カキツバタ（磐之媛命陵）

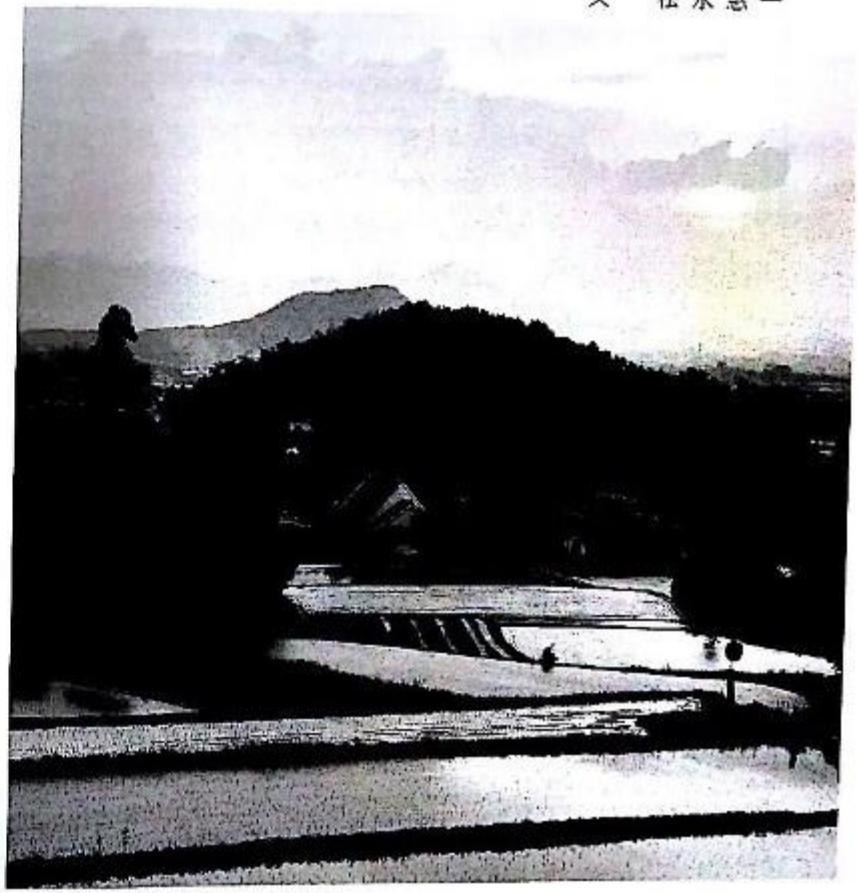
陽光は燦々ときらめき
初夏の風がやさしくなでる
新鮮な大気とさわやかな香り
朝露に光る野を踏んで
ひたすら駆けてゆく乙女
あこがれの目で見送る青年
土の匂い　風のそよぎ
そっと摘んで髪に挿す人妻
鳴きながら去ってゆく不如帰
一面を黄金色に染める落日
そっと目を閉じてみる
安らかさのなかの
祈りにも似た緊張
雑念が洗い流され
すがすがしい気分になってくる

シャクナゲ（室生寺・鎧坂）

Photo essay

風薫る

題字　中田蘭石
撮影　由井　収
文　松永恵一



夕景（八釣の里）

季節の実景

初夏

撮影　武市通治

ギンリョウソウ

シャクナゲ渓谷（日野町）

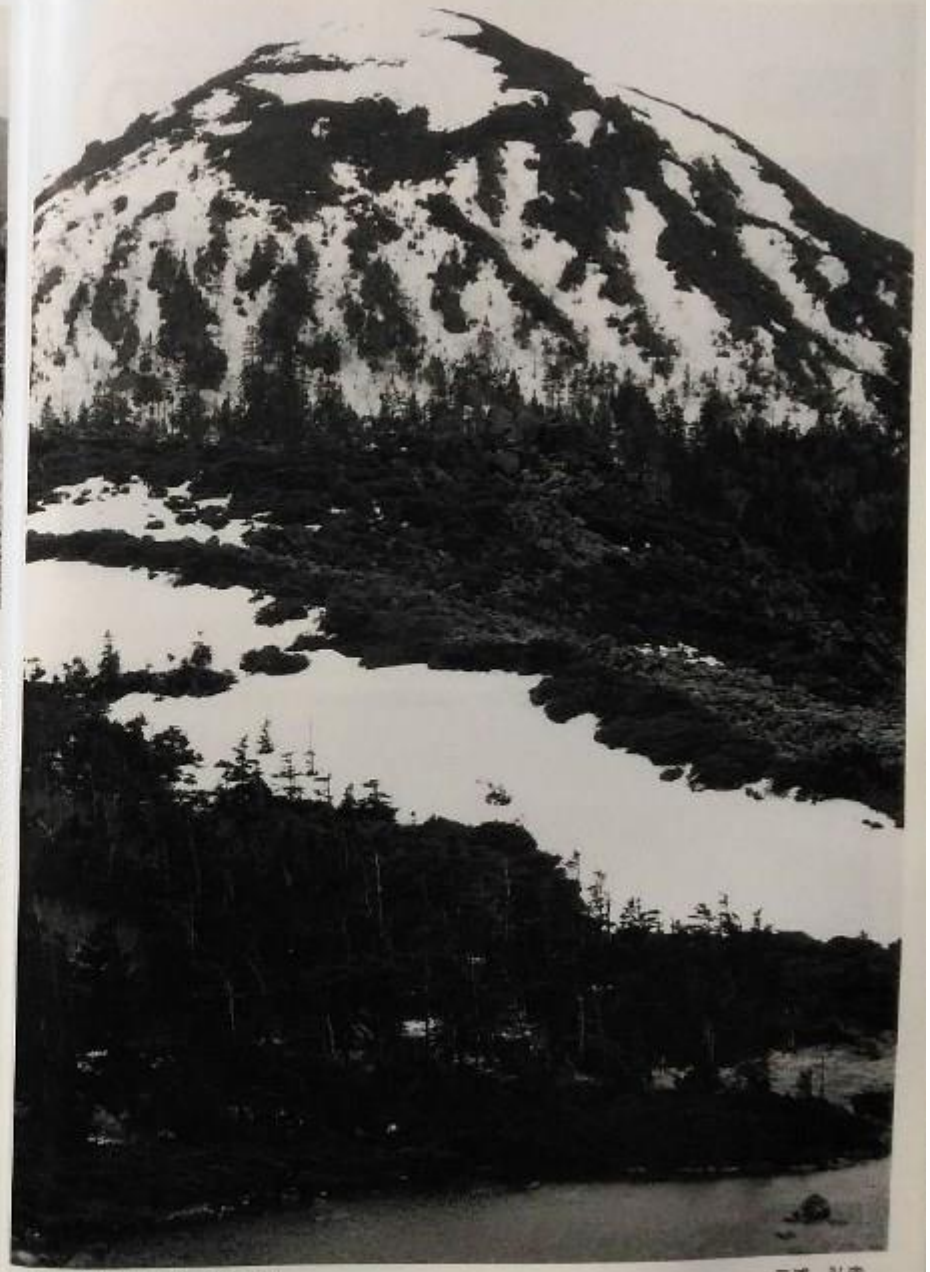
ルピナス（八ヶ岳）

矢車草

休耕田の花畑

大峠よりダイジョウ・綿向山（鈴鹿）　　榊原　計国

老樹（大台ヶ原）　　吉沢　栄一



西天狗岳と摺鉢池（八ヶ岳）　　三浦　弘幸

新ハイキング 別冊 関西の山
'98年5・6月 初夏 第40号

●目次

表紙：松田敏男「ミズバショウとリュウキンカ、白山にて」（白山）

●作者プロフィール●1949年、奈良市生まれ。奈良市立三笠小学校。1987年より山岳版画、山岳画の個展多数開催。（京都平安画廊、南アルプス信州小諸、東京ギャラリー青弓、他）
奈良山と親しむ会代表、日本山岳会会員、一等三角点研究会会員

●グラビア　風薫る……撮影　畑井　収　文　松永　恵一　2
季節の爽景（初夏）「矢車草」ほか……武市　頴治　4
（口絵）三浦弘幸・静原昌国・吉沢栄一・奥田英一郎
随想（山のエッセイ）
イタドリ雑考……網本　逸雄　10
二つの里山の三角点……鶴木酉二郎　12

紀行
日原岳から別山（別山東尾根）……高橋　潔　14
トムラウシ山……北川　浩　18
連載　日本霊山紀行38　甲斐駒ヶ岳……浅野　孝一　22
荒島岳……鷲見　守雄　26
石戸山縦走……多摩　雪雄　30
二児山……松田　敏男　34
連載　比良を歩く㊹
南比良峠から堂満岳・北比良峠……森　康夫　38

エリア別研究
近江側から望む鈴鹿の山々（最終回）……岩野　明　45
㊿リョウシ……45
㊿上手山・オオジャレの頭……48
㊿沢谷峠から雨乞岳……51
㊿近江側から登る鈴鹿の山々全70コース一覧表……54

●1等三角点峰（500m以上）548座完登の記録（第7回）
中国・四国地方の山を平定……坂井　久光　42
●庇瀬峠越を歩く　熊野古道探索……中村　敏文　55
●文学歴史探訪ハイク㊷
平川神社に三枝祭を訪ねて……松永　恵一　58
台湾の山々・五岳三尖へ(7)　大霸尖山……山形　敬之　70

●連載
コースガイド
①一山……藤佐次郎一　74
②七面山……奥田英一郎　76
③万字越……柴田　昭彦　77
沿線ハイキングガイド……新ハイ関西山行計画と報告……81
サービスチェーン……バス時刻表（大峰山系）……94
ませっさ……編集後記・広告案内……96

巻頭言

目覚めれば森の中、あたりに小鳥のさえずりを聞く。テントから這い出して思いきり新鮮な大気を吸う。このような経験はありませんか。暖かくなるこれからのシーズン、山中に野営してハイキングにアクセントをつけてみてはいかがですか。

最近、森林組合などが整備基地を整備し、キャンプが快適にできるようになりました。こう世の中が不景気では山歩きも節約しなくてはなりません。立派な温泉旅館や山小屋に泊まるのもそれなりによいのですが、家計が許してくれません。

新ハイの山行は従来から、テント泊山行は行っておりませんが、ぼちぼち計画したいと考えています。装備としては、テント・ツェルト・シュラフ・テントマット・コンロ・コッヘルなどが必要で、食料は持参することになります。近年は軽量・コンパクトで素材も工夫されたものが出回っています。山用品店で尋ねてみてください。

重いリュックを背負っての山行となりますが、行動の範囲も広がり、バリエーションに富んだコース設定が可能になります。

新ハイキング関西（代表）村田　智彦

初夏の花三景

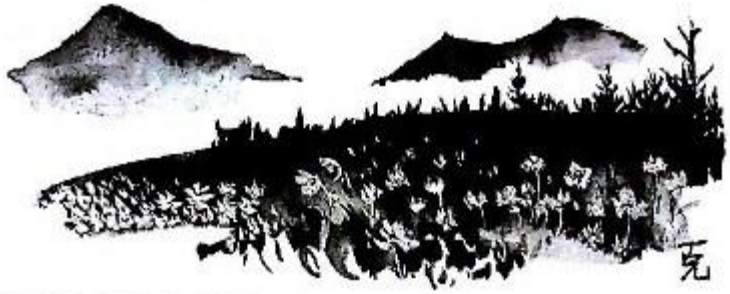
－大峰・七面山にて－
〔64ページコースガイド参照〕

奥田　英一郎

シロヤシオ

ツツジ

シャクナゲ



克

イタドリ雑考

綱本　逸雄

京都市左京区の貴船神社では、6月1日、例祭「貴船祭」が行われる。かつては旧暦4月1日に行った。この日上賀茂の氏人が競馬で参詣し、帰途に市原野でイタドリ（漢名・虎杖）を採ってその大小、多少を競ったことが江戸時代の年中行事解説書『日次紀事』（一六七六）、『諸国年中行事』（一八三一）にみえる。だから「虎杖祭」ともいわれる。現在は、奥宮まで神輿渡御をするだけになっている。

イタドリは山地や荒れ地などどこにでも生えるタデ科の多年草である。中国大陸・朝鮮半島・日本列島に分布する。春、新芽をタケノコのようにもたげ、紅紫点のある若芽はポンと音を立てて簡単に折れる。中高年の方なら、たいがい子どもの頃、酸っぱい味のこの野草と遊んだ思い出を持っているだろう。冬は木質化し、枯れた小竹のように突っ立っている。

どこにでも群生しているから、スッポン・スカンポ・ダンジ・ドンガラ・ナスドリ・タチナ・タケスイバ・ポンポンダケなど各地に五百を超える方言がある。京都では古くからイタドリと言った。

この草は、古来いろいろな用途に用いられてきた。各地で塩漬けにして飢饉の時の救荒植物とした。また、「正倉院文書十一」（天平勝宝二年（七五〇））には「蘇漬一瓶（壺）、唐丈漬一瓶」、『延喜式』（九〇五）内膳に「漬年料雑菜、虎杖三斗、料塩一升二合、右漬春菜料」とあり、奈良・平安時代にはすでに漬け物とされていたことがわかる。年料とは、内裏諸司で一年間に必要とする食料、物資をいう。

根茎の干したものを「虎杖根」と言って薬用とした。日本最初の漢和辞書『新撰字鏡』（九〇〇頃）に「虎杖根　四月採　茎七月採花除干　伊太止利」と載り、わが国最初の漢方集成書『大同類聚方』（八〇八）巻二十二「吐きこぼし病（嘔吐と下痢による脱水）」、同巻四十三「かめはら病（腹中に瓶すなわち〝カメ〟のような塊ができ移動して痛などをおこす）」に「伊多度利（虎杖）」を服するとある（同書は偽書とされたが最近再評価されている）。

『和漢三才図会』（一七一五）などの辞書、本草書にも記載がある。

漢名の由来は『本草和名』（九一八）に「虎杖　一名武杖、諸虎故杖、和名以多止利」（諸は嫌って避ける意）とみえる。明の李時珍著『本草綱目』（一五九六）は「杖はその茎（のこと）をいい、虎はその斑をいう」と否定的だ。

また、四季の時令・名物などを和漢の書籍を引用して解説した『滑稽雑談』（一七一三）は「このものの皮に糸を生ず。織ふに糸をとり、いとどりを転じていたどりといふ」とする。あるいは、若芽は折れやすいから、「手折り島き草」の省略形「イタタヲリ（逆手折り）」→タヲ（t(aw)o）の縮約→イタトリに転化した（田井信之「日本語の語源」角川小辞典）など諸説がある。

定説はないが、イタドリは「イタ＋トリの複合語」（金井令以知『語源大辞典』）と言うことでは共通しているようだ。トリは「取」の義が有力だ。イタは「痛」、「糸」、「虎」だ。

植物名の由来は、センブリ、ゲンノショウコ、チドメグサなど薬効によるものもあるが、形状由来がかなり多い。ハス（蓮）は、古名ハチス（蜂巣、蜂房）の

克

随想（山のエッセイ）

述べている。

杖に用いたことは和書にもみえ、貝原益軒の『大和本草』（一七〇九）には「虎杖　老いたるは杖とすべし。凡そ草木の杖によきもの多し。桑の枝、竹、虎杖、丈菊（ヒマワリ）等なり。虎杖は最も怪し然れども折れやすし、老人足弱きはつくべからず」、小野蘭山の『本草綱目啓蒙』（一八〇三）にも同じ文が載る。

『枕草子』一五四段で、清少納言は、見た目はそれ程のものでないのに、文字にすると大げさなもののひとつにイタドリを挙げ、「いたどりはまいて虎の杖と書きたるとか。杖なくともありぬべきかほつきを」（虎に杖など不要なのに）と記している。平安時代には、漢名「虎杖」と書いて「いたどり」と読んでいたことがわかる。

しかし、それでは、和名はなぜ「いたどり」というのだろう。

*

結論から先に言うと、新井白石も物名の語源解釈をした著『東雅』（一七一九）で、「虎杖その義不詳」と言っているくらい難しい。鎌倉・室町時代の古辞書は比較的動植物の語源にふれているものが多くあるが、この野草については知る限り見当たらない。

『和訓栞』（一七七七）後編は「疼取の義也。また杖によりてたどる意味（注、古語「い辿り」）イは接頭語。本草に血道、腰痛などに用ふ」という。

大槻文彦博士の『大言海』は疼取説を支持して紹介し、「薬物の語源の解すべからざるは効力によるもの多かるべく」と述べている。

一方、牧野富太郎博士は「痛み取りの薬効があるからというが、果たして本当かどうかわからない」（『牧野新日本植物図鑑』）

随想（山のエッセイ）

二つの里山の三角点

橋本　豊二郎

平成6年に野崎観音から飯盛山に登ったが、三角点を見逃けることができず、がっかりした思いで下山した。ただし、三角点らしき石が桜の木の根の焚き火跡の中にあったが、真っ黒に焼け焦げ、丸く削られた表面は、タール状の液がこびりついていたので、それが三角点標石とはとても思えなかった。

平成9年、ハイキングの下見で再び飯盛山に登ることになった。前回を思いだしながら、2万5千分の1「生駒山」の地形図から三角点マークを見つけ、国土地理院にも問い合わせて存在を確認した。4等三角点で、点名は"飯盛山"。前回登った時の三角点らしき石の汚れを落とし、寸法を測る。12㌢四方だ。まさに4等三角点の条件を満たしている。文字も何か彫られている。やはりこれが三角点だった。

この場所からは河内平野が一望できる。桜が満開の頃は、ハイカーの酒盛で賑わうことだろう。この三角点標石が焚き火台にならないよう願わずにおられない。

二つ目は登山口の近くに大山崎山荘がある天王山の三角点。私が使用していた平成3年発行の2万5千分の1「淀」の地形図では天王山の三角点マークはなかった。平成4年10月発行の山の本『ふるさとの山再発見・京滋百山・三角点を行く（上）』（岩村文治著・かもがわ出版）の「3釈迦岳」の中で、「地図上には三角点が記されているのに三角点標石が消失してしまっている事だ。近くの天王山・金勝アルプス東の大納言・南山城の志加良山と共に珍重すべき存在だろうが、三角点を訪ねる山旅を続けていると、やはり物足りない」と記されていた。

また、同書「41大納言」で『大納言の三角点標石は消失し、三角点のない山と言うのが定説になっている。ところが北山クラブの平成3年6月号会報『三角点雑記』の記録を見ると昭和52年12月に地図上の三角点より約150㍍南に移されたと記されている」となっている。このようなことが天王山でもあっ

た。

ハイキングの企画をするため、平成9年発行の2万5千分の1「淀」の地形図を購入し、盛北線を入れていた時に、天王山の近くに三角点マークが新しくあるのに気づいた。また昨年、電鉄会社主催の「天王山ハイク」では、コース中に三角点を通過すると書いであったのを思いだし、この正月休みに三角点を確認するため登ってみた。しかし、三角点は見つけられなかった。

その後国土地理院に問い合わせると意外な回答を得た。「天王山の三角点は平成5年、消失している270㍍地点より西方へ約890㍍の場所に再設し、3等三角点で点名は"天王"」とのこと。

さっそく確かめるために1月中旬再度登ってみた。天王山ビーク下から新しい地形図とコンパスで三角点の位置を確認し、トライするとその三角点があった。頂上には大きな標識ポールがあり、標石は3等とある。

大工用品を持った男性が来られ、驚きながら挨拶を交す。何とこの方はこの山の山主さんとかで、感激した。もともとこの場所は馬の背と呼んでいただけで、山主さんが「十方山」と名付けたと言っておられた。

私が所属している町のハイキングクラブの下見がなかったら、訪れることもなかったであろう二つの里山の三角点が今、私には大きな存在として心に残る。里山に登り、峠を越えての山歩きはさまざまな発見があって楽しい。歴史の道であり、生活の道でもあったのに、市社会になり、人々は楽な道、便利な道を選択してきた。里山の道は徐々に忘れていくが、里山歩きを好む者にはうれしい道である。しかし心もとないハイカーによって山は汚され傷つけられてもいる。"山歩き"を趣味として生きがいとしていくなら、一人一人がマナーを守っていくしかない。いつでも気軽に歩ける里山の三角点標石も大切にしたいものである。

朝、通勤電車から飯盛山が朝日を浴びて輝いている姿を眺め、帰りには、対岸の里山が落日に沈み、稜線がシルエットになるのを見る時が、私にとっては至福の時。明日はきっとすばらしいハイキング日和になるだろう。

白山の長大な尾根

日照岳から別山（別山東尾根）

白山

高雄　潔

長良川沿いを上流に向かって走り、ひるがの高原までやって来た。今年の冬は雪が多かった。建物の影や周辺の林には、所どころまだらに雪が残っている。

すでに日が差しこんでくる時間だが、きょうは雲が低く、空は明るくなる気配もない。閑散とした早朝のひるがの高原を後に、しばらく車を走らせ御母衣湖畔の食堂に立ち寄る。今朝、早く家を出てきたのでここで食事をとることにした。

これから登る日照岳は、ここから少し北にある尾神橋を渡り、さらに三つほど短いトンネルを抜けると湖畔に突き出た小さい広場に着く。そこから送電線の巡視路をたどって登るつもりである。

相変わらず尾根の上部には低い雲がかかり、時おり強い雨が降ってくる。車の中で30分ほど待っていると小降りになってきたので、小雨のなかを歩き始めることにする。

道路を挟んだすぐ向かいの沢の右岸に沿って巡視路に入る。沢に出ると丸木橋を左岸に渡る。まだ沢筋にはいっぱいの残雪があり、その上を登る。

日照岳までは左岸から鉄塔の巡視路を登る記録を読んだことがあるが、沢の右岸側の尾根に続く巡視路も登れそうに見えたので、きょうはこの尾根を登ることにした。尾根を横切っている三本目の鉄塔までは巡視路用の刈り込みがあった。

その先はササと灌木のなかの登りになったが、残雪を選んで高度を稼ぐ。風に流されて尾根を越えてくるガスと、ササに付いた雨で衣服が濡れ、風も強く体が冷えてくる。標高１３００㍍あたりまで登ると尾根筋の雪も多くなって歩きやすくなった。大きなブナの木の並ぶ登りになる。

ピーク1850㍍付近より日照岳方面

ピーク１６４５㍍から日照岳に取りつくやせた尾根筋は、雪の落ちた丈の低いやぶとササが出ていた。尾根を過ぎ山頂に向かう雪の斜面に入ると、標高が高くなってきたのか、雪が固く締まってきた。傾斜がゆるくなってきたと思ったら、ダケカンバの枝に「日照岳」の標識が見つかった。

日照岳・別山付近略図

展望が全くきかないので標識がなければここが頂上だとは気づかないようなピークであった。それでも別山に続く尾根の末端に出たのかと思うと、身が引き締まる思いがする。

相変わらず視界が悪く、まわりを見ても同じような、特徴のない比較的広い高低差のない尾根である。ササと灌木を避けながら進んでみるが、地図と磁石だけでは現在地が分からなくなってきた。一番高そうな所を選びながら進む。目標のない雪面のくだりになると、次のピークに向かう鞍部を見過ごしそうで、このまま谷におりてしまいそうな気がしてくる。足を止めてルートの確認をしながら歩くので、時間と進んだ距離が分からなくなってきた。迷うといけないので野営場所を選びながら進む。

広い雪の斜面をくだると、幻想的な感じの濃い緑のアオモリトドマツの大木の純林に入った。森のなかは居心地がよい。大樹の下で野営することにした。雪の斜面を平らにならしテントを張る。バーナーに火を着け、温かいコーヒーを飲むと一日中張りつめていた気持ちが少し落ち着いてきた。

食事をしていると、日が差してきたのかテントの中が明るくなってきた。外に飛び出し近くの高みまで登ってみる。雲が切れ、あたりのガスはいつの間にか消えていた。天候がやっと回復してきた。日照岳を越えた後、天気の回復が遅ければこの長い尾根をどのように歩こうか、ルートを誤ったらどのあたりで引き返そうか、などと考えていたのだが希望がわいてきた。

夜、テントの外に出て自然の霊気にひたる。人のめったに入らない森のなかは、雪と岩の稜線で自然と対峙するビバーグとは全く感覚が違う。人間の本能であろうか、体のなかの全ての感覚であたりの状況をつかもうとしている。

なにも怖れずそのまま自然のなかで夜を過ごすことができたなら、それはきっとつまらない自然なのだろう。山々を歩きながら自分の五感を信じ、心地よい緊張感のある自然のなかにいることで、生きていることを感じとっているのかも知れない。明日は早く起きて存分に歩こう。

早朝の冴えた空気に触れると、次第に気力が充実してくるのがわかる。オレンジ色の光が山を染め、次第に白くまぶしくなってくる。

天気は快晴だ。これなら今日中に別山を越えられそうだ。こんな日は地図も磁石も要らない。必要なのは丈夫な足と、目の前に広がる雄大な手つかずの自然を楽しむ目と心があればいい。

別山東尾根から二つの大きな支尾根が北東に派生している。雪の落ちた斜面のクマザサはじゅうたんのようであり、斜面に残る雪渓には、うす墨で描いたような幾筋もの跡が次第に急角度となって谷に続く。山を歩いているのが心地よい。

福島谷を挟んだピーク1850㍍に続く尾根の斜面を登りきると、別山から白山へ、さらに三方崩山につながる大パノラマが目の前に広がった。一瞬、夢かと思う。

ピーク2083㍍から北東へ派生する尾根の奥に、ウサギの両耳を立てたような白山の主峰、御前峰と剣ヶ峰が真っ青な空をバックにそびえ立っているのが目に飛び込む。さらに思いもしていなかったアルペン的な三方崩山の真っ白な稜線が続く。左には別山に続く白い稜線が長くなだらかにのびている。南に目を向けると、藍色に霞む大日岳から別山に至る尾根を遠くに眺めることができる。足元からは別山まで越さなければならない尾根上のピークが幾重にも続く。

きょうは存分に楽しめそうだ。今この長大な尾根で大展望を見ているのは二人だけであろう。友人と登って来てよかった。

ここ数年は一人で山に入ることが多かった。久しぶりに自分の息子ぐらいの年齢の相棒に出会い、彼はすぐ後ろを黙々と歩いている。山で経験した話はいつでもできるが、感動をうまく伝えることはなかなかできない。いっしょに体験することだけが唯一の方法のような気がする。

アオモリトドマツの濃い緑の林間を縦横に歩き、またある場所では岩と緑のクマザサの間に続く雪道を選んで登る。幾つかの小さなピークを越え徐々に高度を上げながら進む。日が高くなると雪面からの反射もあり、半袖で歩いていても汗ばむようになってきた。

標高2080㍍のピークを越え雪と岩屑の尾根になると、目の前に迫るものはなく、展望にもいちだんと迫力が出てきた。何ヶ所かやせた雪の急斜面の緊張した登りくだりはあるが、そんなに難しい所はない。

大倉尾根と白水湖の独特の青い湖面を下に見ながら、長近くになって気温が上がり、霞り始めた雪の上を歩く。日当たりのいい岩峰は岩が露出している。なだらかな尾根のかなたにあった別山が、いよいよ見上げるようになってきた頃、やっと南白山が近づいてきた。15時を過ぎ、急な雪の斜面を登りきり、別山（2339・4㍍）の頂きに出た。ここまで思ったより時間がかかった。東方をふり返ると、小さなコブが幾重にも重なり日照岳は特定できないほどに遠くなった。

南には別山平から三ノ峰、さらに大日岳に至る山並みがゆるい曲線で続く。西側には赤兎山・大長山・取立山など懐かしい奥越の山が連なる。

午後の雪は腐っていて、何度も足を取られる。雪に隠れた割れ目に足を突っ込み転倒する回数が多くなってきた。南竜ヶ馬場まで行きたかったが、なかなかはかどらない。天池付近でテントを張ることにした。きょう一日ずいぶん歩いた。

次の日も快晴だ。白山の主峰御前峰がもう目の前にある。油坂からは、南竜ヶ馬場へ向かう夏ルートを逆らずそのまま稜線に沿って北に歩く。

ピーク1850㍍付近より別山から御前峰の主稜

次のピーク2244㍍で少し休む。積雪時、ここから南に見る別山崩れは迫力がある。急傾斜の崩れそうな幾筋もの岩肌に雪が不安定にのり、そのまま谷底に落ちている。昨日歩いた別山から南白山の尾根が白く立派に見える。南竜ヶ馬場を左下に見ながら、尾根筋を快調に進む。やまうば谷の上部で谷を横切り室堂平に出る。ここまで人に会うことがなかった。室堂平で南竜ヶ馬場から登ってきたスキー登山のパーティ二人に会う。いつもはこの時期、別当から登ってくる人がけっこういるが、今年は登山者が少ないようだ。そのまま御前峰に登る。

残雪の山頂で春の白山を満喫する。別山の南には藍色の山が空と区別がつかないほど幾重にも折り重なって、奥美濃の山に続く。あとは大倉尾根をくだるだけだ。

天気の良い春山は気持ちがのびのびとして、特にくだりははかどる。喜び勇んで転ばないよう声をかけながら一気に白水湖までくだる。平瀬への林道には雪が残っていたが、八石平付近からは除雪がしてありずいぶん歩きやすかった。

長い林道であったが、雪で真っ白な山の上から、くだるにつれ徐々に木々の新芽の淡い緑が目に入ってくるようになると平瀬のバス停に着いた。

長い間、白山周辺の地図を眺めるたびに雪のある時ぜひ歩いてみたいと思っていた。ブナの大樹のなか、アオモリトドマツの森林帯、雪と岩屑の尾根。距離は長いがそのぶん変化のある別山東尾根であった。この二日間は存分に楽しむことができ、会心の山登りであった。

友人と天候に感謝をする。

（平成8年5月2日～4日歩く）

※参考タイム※

5月2日　雨のち曇
非常場11・00—ピーク1645㍍12・00—日照岳15・00—テント地15・40

5月3日　晴れ
テント地出発5・35—ピーク1800㍍付近6・45—南白山13・00—別山15・25—天池付近テント地16・40

5月4日　晴れ
天池付近テント地出発5・30—油坂6・00—御前峰6・50—大倉避難小屋10・00—白水湖11・27—平瀬バス停15・20

※地形図▽2万5千＝白山

遥かなる王冠の頂

トムラウシ山

北川　浩

北海道

まさにトムラウシ山は「遥かなるトムラウシ」。結局、山頂には立てず、遥かに眺めただけの山でした。

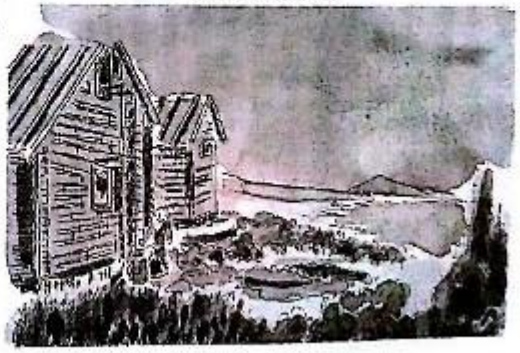
私たちの山行は初日に天人峡温泉から入山してヒサゴ沼避難小屋まで、翌日は山頂へ、という計画でした。初日の8時間歩きは、私たちにとってはハードプラン。でもこの日さえ突破すれば、あくる日は2時間あまりで山頂へ着けます。何しろ天人峡温泉から化雲岳を経てヒサゴ沼避難小屋まで間は、避難小屋はもちろん、テント指定地もないのですから北海道の山はやはり広大です。標準タイムは8時間10分、休憩を入れれば10時間は必要でしょう。初日に何としてもこれを突破しなければ次が見えてこないのですから、「やるしかない……」。

午前4時30分、夜明け前にフェリーで小樽港に着いた私と妻。即、天人峡へ車を走らせました。7時30分には歩きだして、遅くとも夕方の18時30分にはヒサゴ沼避難小屋に入りたいという決意でした。

初日のコースに備えてずいぶんと下調べをしました。問題は二点。一つはテント・食糧・ガスなどの装備で20キロを超すザックを背負って、涙壁といういきなりの急坂を時間をかけずに体力を温存したまま登りきれるだろうかということ。もう一つは雪渓歩き。化雲岳からヒサゴ沼へのくだりにある雪渓を難なく通過できるだろうかということでした。この雪渓は谷を埋めつくしていて、夏道はその下、しかもガスが出れば方向が分かりにくい。ルートをきちんととってヒサゴ沼の小屋へ行けるだろうか。

ふつうに歩いて（しかも若い人たちが）8時間10分、60歳に手の届きかけた我々にはこの8時間歩行が苦行の上、さらに

ヒサゴ沼避難小屋



この二つの難問がありました。ヒグマが怖いところではありません。自分たちが心配です。テントもあるので最悪の時は途中でビバーグという下心もありはしましたが……。

本によると旅を突く急坂という涙壁の道は、適当なつづら折れで難なく通過して時間どおり滝見台に到着しました。我々のザックの大きさに驚いていた地元のハイカーとの所要時間も大差なく、しごく順調でした。

第一公園と呼ばれる台地までは何の苦労もいらない道のりで、針葉樹林のなか、多少のアップダウンはあるものの木々を愛でながらの楽しい道でした。

第一公園で「エゾノコザクラやあ！」と喜んだのもつかの間、ここから先、足元は水にせめられることになってしまいました。これは予想外のことでした。道が残雪におおわれ、雪解けまっ最中で、残雪の手前の登路はどこでも谷川やぬかるむ沼地。その上、顔のあたりはハイマツやハンの木の枝ぜめ。小さな雪渓のコブを越したと思えばまた次のコブ。「雪のまんまだったらどれだけ楽か……」とぼやきつつ、ただただ歩き、登り、こぎ

トムラウシ山付近略図

ました。

足元ばかりに気を取られながら登って来たのですが、ようやくこのやっかいなブッシュと沼地を抜け、小化雪岳の斜面に出たころ、天気があやしくなってきました。ハイマツも疎らになった荒涼とした長い長い坂道で強い風と小雨がやってきました。冷たい風は帽具の頭巾をバタつかせ、20キロのザックは背中に重くのしかかり、私はいよいよバテ気味です。

この日の朝の天気予報では、「曇りのち晴れ、台風8号くずれの熱帯性低気圧は北上して回復する」ということだったのです。実際、朝は晴れ間ののぞく無風のなかを歩きだしたのでしたが。

「あれがウナギ雪渓や」「もうすぐ化雲岳や……」と言っているころにはすでに16時を回っていました。

強い風と視界のきかないなか、うっすらと化雲岳山頂の岩峰を見て、急いで「ヒサゴ沼」という指導標の示す方向にくだりだしたのが17時35分でした。この地点の予定到着時刻は17時30分と手帖に記してあり、これからすればわずか5分の差だけだったのですが、その時はずいぶん時間がかかってしまったかのように

思えました。

すぐに雪渓。案の定、道は雪のなかに消失して、しかもガスって周囲はほとんど見えません。雪渓の広さがどのくらいなのか判断もつきません。どうもヒサゴ沼へ向かう谷全面を埋めつくしているようでした。まるで海に浮いた島か半島かのように、ハイマツの影が行く手に薄黒く現れます。「とにかくくだるだけ」とくだりだしたものの、どのあたりで雪の下の道がハイマツの半島の端に姿を現すのか、それは右なのか左なのか、さっぱり見当がつきません。先人の踏み跡も、ガスと夕暮れのなかで、しかも薄汚れたスプーンカットの雪面上では判然としません。これはと思う踏み跡の現れる道を探したのですが、これもハイマツの島の前で右往左往して乱れていて当てになりません。くだりながら取りつく道らしきを探しましたが、これらでずいぶん時間をくってしまいました。「磁石をたよりに、雪渓どおしをくだろう」と決心してからはかえって気楽になりました。

「こっち、南南東へくだれば、沼に突き当たるはずや」と、どんどんくだりました。

「夕方パッと晴れる時もあるやろ。気つけてや」と言ってるうちに、ガスが切れたのです。幸運にもめざす方向のハイマツの向こうに黒い三角尾根があり、その右手に光る沼が見えました。たった1分間ほどの晴れ間でした。

「やっぱりオーケーや」と言いながらどんどんくだりました。

「左手に道が現れるはずや」。いつの間に降りだしたのか、いつの間に吹きだしたのか、横なぐりの雨風のなかを避難小屋に至る道に取りつきましたが、ああここも水の流れる谷川道。妻はとうとう足を取られて、尻もちをついてカッパズボンは泥炭のようなドロでまっ黒け。取りついてすぐ目の前が小屋でした。

小屋の重い扉を押したのは19時前。二重扉の、その向こうはまっ暗闇、静！

「だれもいないの？」

何の何の、もう皆さんご就寝でした。

「何や今ごろ？」と言わんばかりにガバッとシュラフの中から頭が出てきます。目が慣れてくると、階下はすでにシュラフの人たちでいっぱいで、立錐の余地もないことが分かってきました。ザックを背負ったまま立て梯子を一気に二階へ登りました。やれやれ、と言っても声も出せません。何しろ遅すぎましたから。

夜と共に風も南もますます強くなりました。雨は避難小屋の板壁をバシバシと打ち、風はうなり声をあげて谷を吹き抜けていました。

夜が明けても風のうなり声は相変らずで、雨のたたきつける音も鳴りやみません。「稜線に出たら飛ばされる」ただ待つだけの長い一日でした。

ラジオの天気予報は、台風8号くずれの熱低は千島沖で発達と報じています。きのうはそんな話、聞かなかったのに……。

この荒天のなか、午前中には沼の原でテント泊まりだったという北海道大学の若者男女八人がずぶ濡れで到着しました。午後にはこれもトムラウシ中腹のテント場にいたというおじさん四人のパーティがやって来て、とうとう二階も満員になってしまいました。

二晩をこの小屋で過ごして三日目の朝、快晴のなか、私たちはガスで苦しめられた雪渓を登り返したのです。そして、五色岳の山頂へ。

山頂で追いついてきたおじさん四人のパーティの一人が教えてくれました。

遥かなるトムラウシ山

「ほら、あれがトムラウシ、王冠の頂」（あれがトムラウシか、遥かなるトムラウシ……）

二晩の停滞で、私たちには、もうトムラウシに向かう時間は残されていませんでした。トムラウシを背にして、大雪縦走路を五色岳へとやってきたのです。行く手は花の道、歩けど歩けど尽きることのないイワウメ・ツガザクラ・ネヤマノエンドウなどのお花畑の霧んだ稜線の道。ウルップソウやコマクサの群落もありました。

花に歓声をあげ、ふり返りふり返り、あの「王冠の頂」を見ながら、大稜線を歩きました。

“遥かなるトムラウシ”。今回の大雪山系縦走はまさしくトムラウシをはるかかなたに望む山旅となりました。

「まあいいや」トムラウシは遥かから望む山なのです。

「ほら、あの王冠の頂、あれがトムラウシ」だと。

（平成9年6月29日～7月2日歩く）

＊参考コースタイム＊

1日目　天人峡温泉（1時間）流見台（2時間30分）第一公園（4時間）化雪岳（1時間40分）ヒサゴ沼避難小屋

2日目　停滞

3日目　ヒサゴ沼（2時間30分）五色岳（2時間）出別岳（3時間）高根ヶ原分岐（3時間30分）白雲岳避難小屋

4日目　白雲岳避難小屋（2時間）北海岳（40分）間宮岳（1時間）旭岳下雪渓取りつき（1時間）旭岳（1時間）姿見の池（ロープウェイ）旭岳温泉

＜地形図＞

5万＝旭岳

2万5千＝トムラウシ山・五色ヶ原・白雲岳・旭岳

＜参考＞

「宿泊」＝テント指定地あり。避難小屋は満員の時もある。ヒサゴ沼避難小屋は無料・無人。白雲岳避難小屋は使用料必要で、管理人が駐在している。シュラフ・食料を持参のこと。売店はない。

「雪渓」＝6～7月初旬はまだ大きいのでアイゼン・ストックが必要。特に旭岳登路は必携。

「水」＝ユキノコックス（寄生虫）予防に必ず沸かすこと。

「ヒグマ」＝鈴をならしたが、あまり出ないコースだったと思う。遭遇せず。

連載

日本霊山紀行 38

甲斐駒ヶ岳

2966メートル

浅野孝一

日本各地にある駒ヶ岳については『関東霊山紀行』においてくわしく説明したことがあった（知りたい方は自由国民社発行の同書をお読みください）。日本アルプスには二つの大きな駒ヶ岳がある。

戦前、三省堂から発行された『南アルプス・八ヶ岳連峰』には甲斐駒について「古来、木曾駒ヶ岳に對して甲斐駒と呼ばれ前者を西駒と呼ぶに對して東駒とも謂はれて来た。山は霊閃花崗岩より成り、水気の浸蝕を受ける事甚だしきため以前には白崩山と呼称され、山頂には大巳貫命が安置されて相当昔から信仰的な登山が行はれてゐたのである」と説明している。

『大日本地名辞書』は「此山、駒城村の横手より登る。絶頂まで四里、神祠あり夏に登拝するもの多し」と記している。

山梨県を代表する地誌としては、松平定能編輯の『甲斐国志』がある。巻之三十に「駒ヶ嶽　横手、台ヶ原、白須、諸村ノ西ニ在リ樵蘇スル者山祖若干ヲ貫ス山上ヲ甲信ノ界トス大武川ニ傍ヲ南方山中ニ入ルコト若干ニシテ石室ニ所アリ下ヲ勘五郎ノ石小屋ト呼ビ上ヲ一条ノ石小屋ト呼ブ此ヨリ上ハ絶壁数拾丈ニシテ攀援スベカラズ……山頂ノ巌窟ノ中ニ駒形権現ヲ安置セル所アリ……」と記しており、山頂への登攀はむずかしいとある。

甲斐駒ヶ岳山頂（写真・大森善治）

『日本山嶽志』は「駒嶽　甲斐國北巨摩郡ノ南西方ニアリ、駒城村字横手ヨリ凡五里、曽原村竹宇ヨリ五里十八町、字白須ヨリ八里、字高原ヨリ七里ニシテ其山頂ニ達ス、標高九千九百五尺」

その山容はピラミダルの美しい型をしていて登高欲をさそうものがある。以前は非常なアルバイトが強要されたが、今では野呂川沿いに車道が出来ているので、

前日に北沢峠付近の山小屋に泊まり、そこから日帰りで往復して帰京できるようになった。

私の甲斐駒登山歴を述べてみる。日時は忘れてしまったが、商業学校の同級生のOと二人で登った、十七歳の時ではなかったろうか。新宿駅発の夜行列車に乗り、まだ暗い日野春駅に降り立ち釜無川へおりていった。竹宇から尾白川渓谷を登り、七丈小屋に泊まった。しかし、その先の事は記憶にない。

二回目の甲斐駒へは昭和28年10月3日から5日にかけて、大武川、摩利支天南山稜の岩登りであった。

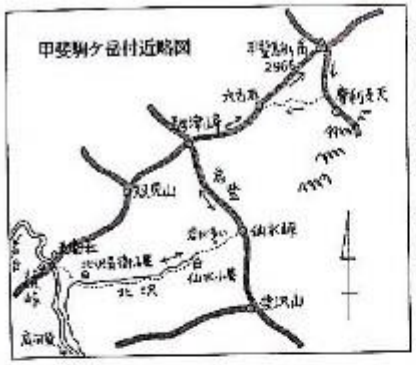
今回は三回目である。総勢七名だが、いずれも五十歳を過ぎた中高年であった。

第一日は甲府駅前からマイクロタクシーで広河原へ、さらに芦安村営バスに乗って北沢峠に入った。北沢峠からは北沢沿いを登り、仙水小屋に泊まった。

第二日目は朝食後、付近が明るくなってから出発した。仙水峠への樹林帯のなかは順調であったが、樹林帯を抜け岩道となると私の歩みは遅くなった。このぶんでは午後の下山はむずかしく、他のメンバーに負担がかかるので私は峠の手前から引き返した。

（10月下旬腰痛癖で手術を受けたが、これがその前兆で、守門岳のくだりでも経験したことであった。以下これよりの山行記録はこの時山頂へ登った今村克彦さんの文章を、写真は大森善治さんの作品を拝借した）。

樹林のなかの道を過ぎると、黒い水成岩が堆積した斜面を左に見て、ハイマツ帯との境界の岩盤状のゆるやかな登路となって、はどなく仙水峠（2520メートル）に達する。



仙水峠は駒津峰と栗沢山に挟まれた、早川尾根への分岐点である。ケルンと道標の周りは、御来光を迎えた多数の登山者が休んでいる。峠から見上げると、摩利支天の岩峰と、左奥に甲斐駒ヶ岳が眺められたが、すぐに霧に包まれた。南西には鳳凰三山が黒い窓の下に望まれ、かすかな光芒に照らされている。

左の樹林帯に入ると、いよいよ駒津峰へのきつい直登が始まる。シラベ樹林の急な登りがしばらく続くが、やがて眺望が開け、霧のなかに白い摩利支天が宙に浮かび上がっている。急な登りに耐えながら、ハイマツ帯を通過すると、双児山からの登山路と出合い、駒津峰（2952メートル）に着く。天気さえよければ、仙丈岳・鋸岳・早川尾根の大展望が開けるだろう。

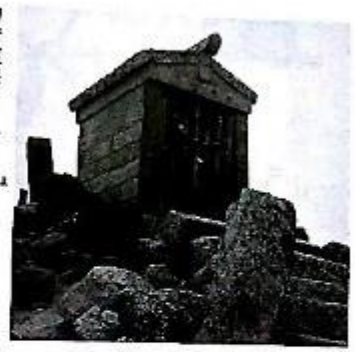
駒津峰からハイマツ帯のやせた岩稜を慎重に下降すると、やがて花崗岩の巨岩で、六方体に見えるという六方石の下に着く。ひと息いれ、いよいよ目前の甲斐駒ヶ岳の登りにかかる。

登路は直登コースと摩利支天の手前を巻く道とに分かれるが、岩場の直登コースを登ることにする。最初は岩の間を腕

力で確保しながら喘じ登るが、やがて花崗岩の白い砂礫の頂上直下に達する。

甲斐駒ヶ岳（2966㍍）山頂は曇り空で、視界不良の頂だ。隣の2955㍍の駒ヶ岳神社がかすかに霧のなかに望まれた。山頂は1等三角点の標石と皇紀二六〇〇年の祠の中に三体の仏像、周辺に石碑・不動尊像が置かれ、山岳信仰の霊場の趣である。岩陰で東寄りの冷たい風を避けることにする。

下山路は、立派な大理石の祠のある駒ヶ岳神社の本社とある、小さな頂きに立ち寄る。山麓を捲きながらくだるザラザラの砂礫は滑りやすく、足を取られないように注意する。六方石までの途中で、鋸岳・栗沢山、そしてアサヨ峰も眺められたが、仙丈岳は相変らず霧のなかであった。



山頂神碑（写真・大森善治）

昼過ぎに大勢の登山者のいる駒津峰に着くとやがて空も明るくなり、甲斐駒ヶ岳と摩利支天が大迫力に見え、その白い山容は、さながら神仙が住む山の伝説に相応しい威容である。

駒津峰から仙水峰までの標高差は500㍍近い。杖を使い膝を庇いながらくだり、仙水峰に着く。日本で有数の名山に足跡を残せたという充実感を噛みながら、北沢峠に向かってゆるやかな岩石道をゆっくりくだり始めた。

（平成9年9月6日～8日歩く）

◇参考タイム◇

仙水小屋4・45―仙水峠6・05～10―駒津峰7・45～55―六方石8・25～35―甲斐駒ヶ岳9・50～10・20―六方石11・15～40―駒津峰12・10～20―仙水峠13・30―仙水小屋14・00～10―北沢峠バス停14・50

◇地形図◇2万5千＝甲斐駒ヶ岳

（この花・この草）

オリーブ（Olea europaea）

モクセイ科

小豆島・牛窓など、瀬戸内海に面した地方ではオリーブの木が栽培されていますが、日本では温州ミカンが栽培可能な地域であれば、生育に向いています。地中海沿岸原産で、ヨーロッパでは紀元前三千年頃から栽培されていたと言われています。そう言えば、ノアの箱舟にハトが持ち帰ったのもオリーブの小枝でした。

初夏、小さな黄白色の芳香のある花をつけ、果実はいわゆるオリーブ色、つまり茶味の青緑色で、熟すと次第に紫黒色になります。

熟果の果肉を冷圧して得た油が、バージンオイルで、芳香があり、食用・化粧品の原料として用いられています。脂肪油には良質な脂肪酸を含み、苦味配糖体オレウロペインは、抗真菌作用も示します。

果実の塩漬けも食用にされますが、緑色の時期に収穫したものをグリーンオリーブ、完熟して紅紫色になってから収穫したものをライプオリーブと言い、ヨーロッパではグリーンオリーブが、アメリカではライプオリーブが好まれているようです。

㊫

登山・ハイキング専門の旅行社

アミューズトラベルの山歩き

スイスアルプス・フラワーハイキング 7日間

マッターホルンのあるツェルマット2泊、グリンデルワルト2泊。花と名峰をじっくり楽しむ山旅。

【出発日】①6／14　②7／5　【代金】①298,000円　②328,000円

カナディアンロッキー・フラワーウォッチング 7日間

フラワースペシャリストの現地日本人ガイドと、ゆっくり時間をかけて、多種多様な花を見ます。

【出発日】6／16　【代金】368,000円

"日本航空で行く" カナディアンロッキー・ハイキング 6日間

モニター企画。美しい湖がたくさん点在するカナダ。絵画のような風景の中をハイキングします。

【出発日】①6／20　②9／26　【代金】①265,000円　②258,000円

北欧フィヨルドとハイキング 9日間

神秘的な白夜の季節にノルウェーを訪れます。無数の滝が落ちるフィヨルドは壮観。

【出発日】6／26　【代金】498,000円

アラスカ・フラワーハイキング 6日間

手つかずの自然が残る穴場、クロウパスとツインビークスを花の一番いい季節に訪れます。

【出発日】7／9　【代金】288,000円

"脇坂先生と歩く" オーストリア・チロルの花と名峰 9日間

高齢(85才)の登山家・医師として著名な脇坂先生と歩くシリーズ。チロルの魅力を満喫します。

【出発日】8／2　【代金】428,000円

"脇坂先生と歩く" スイスアルプス登頂&ハイキング 9日間

高齢(85才)の登山家・医師として著名な脇坂先生と歩くシリーズ。ブライトホルンに登頂予定。

【出発日】8／9　【代金】532,000円

ヨーロッパアルプス最高峰モンブラン(4807m)登頂 10日間

参加者1名に対しガイドが1名つく安心プラン。高度順応日のあるゆったり登頂プランです。

【出発日】8／16　【代金】688,000円

北アルプス・燕岳　5／2(土)～4(月祝)　78,000円
大峰山脈(大普賢岳～八経ヶ岳)　5／2(土)～4(月祝)　45,000円
大台ヶ原～大杉谷　5／2(土)～4(月祝)　45,000円

アミューズトラベル株式会社　☎06-265-3303

運輸大臣登録旅行業第1366号　〒541-0053 大阪市中央区本町4-5-3 本町三井ビル2号館

二人だけの自然観察山行

荒島岳

越前

鷲見守康

「荒島岳のブナ林がとても素敵だから、ぜひ一緒に歩きましょう」と言うKさんとの約束で、梅雨入り直前の6月初旬、越前の荒島岳を歩いた。

この年、Kさんらが中心となってとりまとめた山歩きの自然ガイドブック『中部の山々』の原稿が完成し、刊行も間近であった。次は中部地方のブナ林を取り上げようとの構想があり、私の推奨した荒島岳のブナ林もその候補となっていた。

「ひょっとすると『中部のブナ林』というより、『中部の山々 パート2』ということになるかも知れません」と、車中でKさんが言う。その場合でも荒島岳は大いなる候補の山だ。山岳としても、深田百名山として全国の岳人に登られているのだから。

本日の山行は私たちにとって調査が主体となるため、平日を選んだ。他の登山者の邪魔にもならず、できる限り自由に観察や写真撮影を行うには、平日がベターである。

Kさんの車で早朝5時発。私の住む各務原市から東海北陸自動車道を郡上八幡まで走り、同町から国道156号線、白鳥町から158号線で油坂峠を越え、福井県和泉村に入って大野町の隠原スキー場に到着したのは6時45分であった。

標高約400㍍のスキー場の駐車場を7時に出発。私はこれまでに二回荒島岳を歩いている。二度目は、平成8年10月の新ハイ例会山行であった。したがって、荒島岳は初めてのKさんを私が案内する形になるのだが、常と変わらず、Kさんが前を歩く。

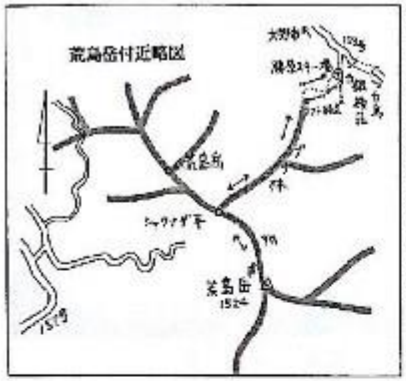
大野市から荒島岳を望む

スキー場は、ゲレンデの拡張工事中なのか、登山者が登るルートを重機数台が大規模に掘削し、昨日までの雨で猛烈な

ぬかるみになっている。ぬかるみを何とか脱出し、最終リフト降り場に近づいたとき、ゲレンデ西端の伐採を免れている林のなかの梢に、Kさんがキツツキを発見した。

「オオアカゲラかも知れません」とのKさんの言葉に、ザックから双眼鏡を取りだし、まずKさんに手渡す。やはり、オオアカゲラのようだ。私は初見だが、双眼鏡の視界のなかで見たのは頭上全体が赤いキツツキであった。

最終リフト降り場から、いよいよ登山道となる。林縁の雑木のなかに、ヒメモ



チ・エゾユズリハ・ヒメアオキなどと並び、ヤブツバキのような樹木が見られた。日本海型の草木を中心とした植相からすれば、豪雪性のヤブツバキとは考えにくい。幹が蛇生状で丈が低いことからしても、おそらく日本海型のユキツバキなのだろうと話し合う。

クリの巨木を左右に見てミズナラの大木を過ぎると、すでに早やブナ林である。すがすがしい雰囲気に気分は次第に高揚してくる。

「やっぱり、典型的な日本海型の植生ですね」。森全体を眺め渡し、オオカニコウモリ・サンカヨウ・スミレサイシンなど、林床の野草にも丹念に視線を配りつつ、Kさんはうれしそうな面持ちで呟く。ふだん太平洋型の植生域で活動を続ける彼にとって、日本海型の植物たちのフォルムには、特別な新鮮さがあるようだ。私の歩く山域は太平洋型植生と日本海型植生の接点になる山々が多いのだが、それでも、日本海型植物たちとのひとつひとつの出会いには、いつも心温かな感慨を抱く。

ニシキギ科のムラサキマユミが実に数多く目に入る。ひょっとしてもう花を付けている株はないかと探してみるが、やはり無理なようだ。

このムラサキマユミには、一つの想い出がある。十年ほど前、まだ草木をろくに見分けられない頃、奥美濃の夜叉ヶ池を歩き、今まで目にしたこともない植物を見つけた。その当時は、何科に属するのか見当もつかず、カメラに収めて帰った。そして、ある自然観察会のおり、スライド写真をKさんに見せたところ、彼は即座に「あも、これはムラサキマユミだと思います」と応え、さらにこう続けたのである。「ぼくは、まだ一度も見たことがありませんけれど……」。まだ一度も出会っていない植物の名を、小さなスライド写真からなぜ判別できるのか、私には驚きでしきりに感心したものだった。

その後、そんな私自身が写真を見せられ、花の名を尋ねられて同じように答えたことがある。その時、草木に親しみ、思い入れが強くなると、その写真を見ただけで名前が瞬時に頭に浮かぶこともあるのだ、ということを知った。

最終リフト降り場からシャクナゲ平を経由するコースは、シャクナゲ平までの

荒島岳のブナ林

間、しばしばひどいぬかるみとなる。その上、山頂まではひたすら登りを繰り返すルートで、けっこう急登もある。新ハイ例会のときは「中級向き」として実施したのだが、実際に歩いた参加者からは「健脚向き」ではないか、との声もあったほどだ。

Kさんとは、このコースを結果的にはほぼ標準タイムで歩いたのだが、途中、休憩や写真撮影、そして種々の調査等でかなりコスタイムがあるのだから、それらを差し引けば、かなりの速度で歩いたことになる。実際、Kさんはすこぶる健脚で、私の通常のペースをいつも上回っているのだ。

荒島岳は、ブナ林が実にいい。森のなかは私たち二人だけ。森の香りと気を体中にいっぱい満たしながら、改めてそう感じる。

ここのブナ林が、森厳さのなかにどこか軽やかな活気を漂わせているのは、林が比較的新しいことにあるのかも知れない。大木が居並び、かなり原生的な雰囲気の林のブナたちも、太平洋側のブナたちと比べると、その樹肌は老木のようにはげ落ちることなく、むしろピーンと張りつめた若々しさを見せている。荒島岳の多雪な気候条件がブナをスクスクと育て上げ、ブナたちは予想外に短い年月で堂々とした大木にまで育っているのだろう。

まだ細い木々たちのつくる林は、真っ白な樹皮を輝かせて登山道沿いにすらっと並び立ち、その辺りはシラカバの純林かと見紛うほどである。そのブナたちのかもし出す伸びやかな空気もまた、このブナ林の魅力なのだろう。

このブナ林の魅力をさらに高めているのは野鳥の豊富さで、林内にはひっきりなしにさえずりが響き渡っている。特に野鳥の観察を意識したのではないけれど、この日だけでも約二十種のさえずりを聞き、七種の鳥は姿も確認できた。ブナ林ではコルリが歌い続け、そのコルリの巣への托卵を狙ってか、ホトトギスが盛んにさえずりながら飛び交っている。

ブナ林を抜けて、シャクナゲ平に出る。名とは裏腹にシャクナゲは見当たらない。下山のとき、今回にして初めて、付近の林内に二株のシャクナゲを見つけた。昔は名前のごとくシャクナゲにおおわれていたのかも知れない。

シャクナゲ平からは稜線歩きとなり、いったんくだり、やせ尾根の急登を越えて行く。ブナから次第にダケカンバに移り変わるとともに樹木が低くなり、四囲の見晴らしがきくようになる。

前荒島を越えた辺りの北側雪崩斜面にお花畑が広がっている。かなり急な斜面なのだが、カタクリ・オオバキスミレ・キクザキイチゲ・サンカヨウ・コバイケイソウなどが咲いており、撮影のため足場を確かめながら下降してみる。Kさんの夫人が同行していれば、身を気遣ってやきもきする場面だ。

11時前に山頂に到着。雲が多く、山々の展望はあまり得られない。さっそく昼食にしたが、アルコールをたしなむことのないKさんは、サッサと食事を済ませると、くつろぐ間もなくいつものように頂上部の植物の観察に動き廻る。

「コバイケイソウの群落ですよ」と言う彼の呼び声に、残りの弁当を頬張り、あたふたと立ち上がる。周囲を見回すと、なるほどコバイケイソウの群落で、花をつけている株がけっこうある。今年は、コバイケイソウの咲き年なのだろう。夏のアルプス山行が楽しみである。

やぶをこいで行くと、花期にはまだ間があるものの、ニッコウキスゲ・カライトソウ・オヤマリンドウなどもあり、花の豊富さを感じる。

「やはり、いい山ですね」、予想していたこととは言え、荒島岳の植物相の華やかさを楽しむ。しかし、時間が十分あるわけではなく、後髪をひかれる思いで下山を開始。

再びブナの原生的な林に戻って、本日の課題のひとつであったブナ林調査を行う。Kさんは植生断面図の作成にかかり、その間に私は適当に十本のブナを選んで、自分自身の胸高幹分に当たる除周りを測定した。太いものでは3・15㍍あり、直径で言えば1㍍ほどになる。

「いいなあ……」、心のなかで、しみじみとつぶやきつつ、一本ずつ樹肌に触れながら高い梢を見上げていると、四方の根張りで「プッ、ポウ、ソウ」と高く、けれどはっきりと声が響いた。

「聞こえましたか！」、少し離れていたKさんがいささか興奮ぎみに叫んだ。「ええ、コノハズクですね」と私が応じると、「良かった、空耳なのかも知れないと思いました」と満足そうに笑顔が返ってきた。

（平成9年6月5日歩く）

◇参考タイム◇

スキー場駐車場7・00―リフト終点7・40―シャクナゲ平9・15―山頂10・45～12・00―シャクナゲ平13・00―リフト終点15・00―スキー場駐車場15・30

◇地形図◇2万5千―荒島岳

低山登山～本格トレッキングまで、
登山用品のことならおまかせ下さい。

南ハイの会員まで更に割引します。

山とスキーのヨシミ

〒543 大阪市天王寺区南河堀4-70
TEL06(772)7231

JR天王寺駅
北出口右へ
歩道橋渡ってスグ

岩屋城趾から高見城跡へ

石戸山縦走

氷上

多摩雪雄

石龍寺

用明二年（587）聖徳太子開祖と伝わる岩屋山石龍寺は、毘沙門天を本尊とし鎌倉・室町期にかけて隆盛をきわめた。南大門の仁王像は仏師定慶作として国の重要文化財である。

観応二年（1351）正月、弟直義との戦いに敗れた足利尊氏は、都から丹波を経て播磨の書写山にて再挙を図る途路、後に二代将軍となる子の義詮に仁木頼章等二千余騎を与えて石龍寺に二ヶ月間滞留せしめた。

寺の衆徒が食糧や馬飼を山のごとくに献じ、源氏の裔久下時重二百余騎、荻野、長沢等の武士も馳せ参じたことが『大平記』三十九巻に記されており、時の院主霊鷲僧都は勝軍毘沙門の法を修して祈祷、後に義詮は帰京できたので足利氏の帰依するところとなった。また、その時献上した丹波栗に義詮が爪を立て、

都をば出て落ち栗の芽もあらば
世に勝ち栗とならぬものかは

と詠んで、それを植えて去り、芽の出た栗を「爪あと栗」として現在も伝えている。

やがて織田信長の丹波攻略により天正七年（1579）、仁王門を残して全山ことごとく焼失したが、江戸期に入って徐々に復興。奥の院・本堂の毘沙門堂・持仏堂・庫裡・客殿等境内が整備された。

石戸山1等三角点で憩う

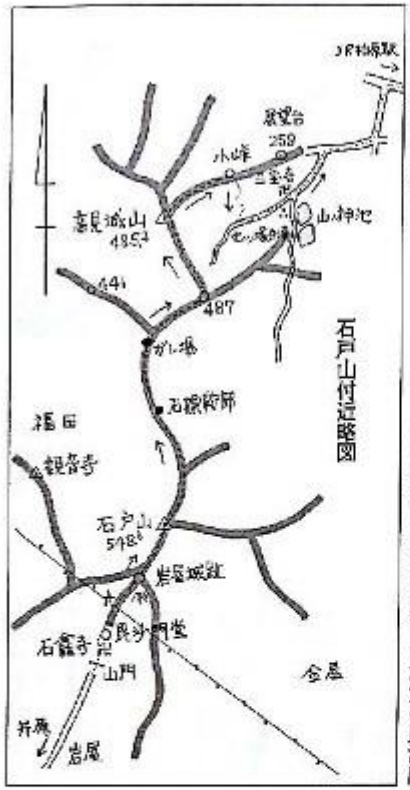
11月第3日曜の「もみじ祭り」には、足利氏ゆかりの武者行列はじめ多くのイベントが行われる。

南大門を入った左側にある十数基の石仏は応永十二年（1405）から文明七年（1475）のもので、内五基に銘がある。また、三十五丁の町石のうち、一丁、二丁の町石が南大門の内外にある。本堂石段下の水子地蔵から右の岩屋谷

川を渡って800㍍、昔の本堂跡の平地には石窟の奥の院と休憩所と鐘楼跡があり、義詮屋敷跡もあって、頭尖峰を経て尾根伝いに岩屋城趾へのルートもある。

岩屋城趾へ

JR福知山線谷川駅から予約したタクシーで石龍寺山門前まで15分。和田方面行きのバスは午前中三本（7時10分・9時40分・12時10分）で、列車の到着を待って発車し井原まで10分。ここには二軒の旅館があり、駅前にも二軒、和田に一軒と付近には飲食店も多い。



石戸山付近略図

井原から門前町の岩屋を通り抜けて山門までは3㌔、約40分の歩程。

山門前には江戸時代の漢学者、太宰春台の詩碑がある（経籍考）。

経籍門陽路　迫来釈氏居
機霊通慶刻　宇古道風書
一将巣中鳥　三章網裡魚
星霜千歳下　遠客自躊躇

案内図・仁王門・石仏群・丁巨石等を振ったりして30分後の7時30分本坊前を通過。境内は掃き清められて気品があり南面で明るいが、シーンとして人気が感じられない。石段を登って本堂の毘沙門堂を拝す。ここには樹齢二百年の櫻の木と、水かけ不動・仏足石・薬師堂がある。奥の院道と分かれて左の山道に入る。

岩屋山頂まで1150㍍である。谷沿い道と分かれて右へ、いきなりジグザグの急登で毘沙門堂の裏山へ登る送電巡視路に入る。電力会社特有の黒い樹脂製の階段が続き、岩肌には鎖が設置されて高度差170㍍、0・7㌔、送電鉄塔まで実に40分もかかる急登であった。ここで10分休んで、まだ続く急登もトラロープを引き、右手の石切り場の凄惨な断崖に目を奪われながら、細稜を北東へ登る。440㍍標高点でやっと稜上らしくなると登りもゆるやかになって5分で、氷上町との境界稜に出る。境界石もあり、西下の山南ゴルフ場へ向かって山麓道が延じている。

歩きよくなった樹林中の稜道をさらに5分、雑石の切り場上の狭い草地の岩屋城趾中心部に出る。白山権現と熊野権現の新しい石造小祠があるが、平板石を組み立てた超ミニ石舞台の中には木製宝塔と蝋燭立が供えてあり、それぞれの社にはいくばくかの賽銭が奉納されていた。東から南にかけて見晴らせる。鉄塔から登

り高度差120㍍、0・6㌔、25分。15分休んで3時ジャストに石戸山へ出発。

町界稜を北東へくだると左（福臣）、右（金屋）の谷から数条のしっかりしたルートを合し、よく踏まれた落ち葉の道は、わずかな登りの後60㍍くらい登って0・4㌔、建設省近畿地方建設局の「石戸山無線中継所」のフェンスに囲まれたコンクリートの建物を見ると、すぐ上が石戸山1等三角点548・79㍍。草地の頂上は柏原・氷上・山南三町の境界をなしている。緑樹に囲まれて見晴らしはないが、落ち着いた静かな憩いが得られる。

標石はわずかな窪地があるとはいえ、周囲にコンクリートを打ち、四個の保護石を配して良好といえる状態であった。磁北は340度、ほぼ規定通りに埋定されている。風無く、全天高層雲、高曇り。30分休んで9時40分出発。

高見城址

高見城跡へ

氷上・柏原町界を北へ向かう判然とした稜道をくだること高度差170㍍、0・8㌔、石標のある鞍部を30分後に通過する。

天然林のなかで右腹を浅く巻いて行くと、梁石跡らしい赤むけの小広い鞍上の幼い松林の道となる。北方に国境稜の青い連なりが見えていたが、再び入った樹林中にケルンがあり、これを抜けると、あっと驚く丸ハゲの鞍が現れた。

頂稜は丸くなるので「ジジ落し」と命名する。

枯れ木を集めてハゲガレ場の森地で火をおこし、早い昼とする。鞍部から登り120㍍、0・8㌔、30分地点。図上北東の独標487と、北西の独標461とのV点の小丸の南肩である。

いたる所ハゲなので、SLたちがルートを確認して、50分後の11時30分出発。この小丸の分岐を右へくだると大樹の根元のササのなかに、ぴっしり鞍石の付着した古い石標を見る。草書で左大新屋、右かもの、界とある。

道はしっかりと続き、左腹、右腹と浅く巻いてわずかに登降して行く。ヤシオが点在する。

高見城分岐には柏原町の「森林とのふれあい、高見城跡遊歩道」の標示があり、丸太段を登るとわりと小広い頂上の眺めは良く、北方の国境稜から東の多紀の山々が重畳と展開し、真下に柏原の町並みや農地の広がりが手に取るように眺められる。

段差のある草地だが、ヤシオ以外にはアブミなど、わずかな開花が目につくのみで、485・24㍍の4等三角点標石が草を刈り払った東端に埋定されている。

「高見城は嘉禄二年（1226）、丹波国守護職にあった仁木頼章が築いたもので、高見山頂が本丸である。室町時代の後期には赤井家清が城主となったが、天正七年（1579）織田信長の命をうけた明智光秀の兵火によって落城した」。

ハゲガレ場からわずかに登降して1・1㌔、45分。15分展望を楽しんだのち、12時30分くだりにかかり、すぐ下の愛宕神社に拝礼して北東の独標259の小丸をめざす。この頃から薄日が差してきて気分爽快となる。

30分で小峠に着くと、高見城跡へ950㍍、展望台（独標258）へ600㍍の標示を見る。そのまま南へくだるルートの斜面は一面シダにおおわれた樹林の道であった。ウラジロが主体でシシガシラほか数種だが、シダは多種類でよく分からない。

丸太段のくだり10分で初めて地形図示の実線道に出る。石龍寺からこの林道に出るまで地形図上に径路記号はないが、整備された立派な道が通じていた。

この林道の東350㍍の卍記号は三宝寺で、見事な庭園は一見の価値があり、仁木頼章の墓もある。その南の二つの池は、上と下の山ノ神社である。寺と池との間に小さい石舞台のある七ツ塚古墳があり、発掘品はここ丹波悠遊の森管理棟に展示されている。森林生態学習会・キャンプ場・ログハウス多数が散在している。

悠遊の森で40分見学、採勝ののち、14時に辞し、柏原駅まで4・5㌔、ぶらぶら歩いて1時間10分。大阪花博の展示棟を移築したすばらしい木造駅舎の中央展望塔のデザインには魅せられる思いであった。列車を待つ間に駅前の柏原藩陣屋跡等を見学する。

（平成5年6月初旬歩く。平成6年12月中旬、我がグループのSL佐橋頒再訪訂正済）

△コースタイム▽文中参照

△地形図▽2万5千―谷川・柏原

△参考▽

播丹交通バス　0795（77）0175

山と高原地図シリーズ

定価 各750円(税込)

	北信州・菅平・志賀高原	*35	白馬岳
*2	二セコ・羊蹄山	*36	猪苗代・磐梯山
3	大雪山・十勝岳	37	蔵王・吾妻山
*4	十和田湖・八甲田・岩木山	*38	上高地・槍・穂高
5	八幡平・岩手山・秋田駒	*39	飛騨高原
*6	奥秩父・甲武信	40	霧島山
*7	那須・塩原	41	中央・南アルプス北部
8	尾瀬山	42	木曽駒・空木岳
9	朝日・出羽三山	43	甲斐駒・北岳
*10	飯豊山	44	信濃・赤石・聖岳
*11	磐梯・吾妻・安達太良	45	白山
*12	玉川・湯原	46	霧島・甲突・鰐塚
13	日光	47	御在所・鎌ヶ岳
*14	尾瀬	48	比良山系
15	越後三山	49	京都北山 1
*16	谷川岳	50	京都北山 2
*17	志賀高原・草津	51	京都西山
18	妙高・戸隠	52	北摂・六甲
19	軽井沢・浅間	53	六甲・摩耶・有馬
*20	赤城・榛名・妙義	54	恩納高原・二上山
*21	赤城・榛名・妙義	55	金剛山・岩湧山
22	南武蔵・秩父	56	紀泉高原
*23	高尾・陣馬	*57	大峰山脈
24	大菩薩連嶺	*58	大台ヶ原・大杉谷・高見山
25	奥秩父 1	59	熊野・伯耆・高原
26	奥秩父 2	*60	氷ノ山
*27	高尾・陣馬	61	大山・蒜山高原
28	房総	62	四国剣山
*29	箱根	63	石鎚山
*30	伊豆	*64	福岡・九山々
*31	富士・富士五湖	65	九重・阿蘇
*32	八ヶ岳・蓼科	66	祖母・椎
33	南ヶ岳・霧ヶ峰	67	屋久島
*34	北アルプス北部		能登・白川郷（刊行予定）

（*印は現在様の地図です）

※昭文社の「山と高原地図」は年度版として毎年刊行します。ご山行の際はなるべく最新版をご使用下さいますようお願い申し上げます。
※90年度版は『十和田湖・八甲田・岩木山』『奥多摩』『富士・富士五湖』を全面改版し、新刊として『奥秩父・甲斐・荒川』を刊行いたしました。

株式会社 昭文社

本社 東京都千代田区九段北4-2-11
電話03(3262)2141(代) 〒102-8238
営社 大阪市淀川区西中島6-11-23
電話06(303)5721(代) 〒532-0011

（インターネットで情報発信中）
http://www.mapple.co.jp/

南アルプスの展望を期待した

二児山

松田敏男

南アルプス

六年前の秋、私の所属する「京都山と野に親しむ会」は、この二児山に行っている。南アルプス連峰を西側より間近に展望できる位置にある二児山。私には魅力いっぱいの山なのだ。登山の資料があまりなく、山頂からの写真なども全くなかったから、どんな所なのだろうかという期待感をかき立てられる山だった。

そこで、晴れる確率が最も高く、葉が落ちて見通しのよい文化の日の連休を選んで登る計画を立てた。ところが直前になって用事ができたので私は行けなくなった。しかし、その会山行は決行された。予想通りよく晴れて、西峰より少し南側にくだった所からすばらしい展望のあったのが、その時の写真から窺える。

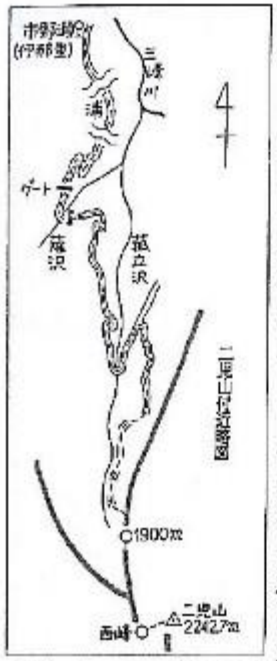
詳細な山行報告をもらって、私ひとりだけでも迷わずに行ける準備ができた。公共の交通機関を使って行くには三日間を要するので、5月の連休あたりに行こうと考えた。三連休がとれる他の季節、たとえば夏では暑すぎるような気がするし、冬はひとりでのラッセルが厳しそうだ。5月の連休と言えば残雪の美しい季節で行きたい山がいっぱいあるところだが、その中でぜひとも二児山に行きたいと決定づけたのは、昨年末に鹿嶺高原に登った時、下山中に逆光に青く浮かび上がった二児山の姿が印象深かったからだ。次はぜひあの山だと思った。

林道のテント場

そして四ヶ月後の5月、私は再び高速からタクシーに乗った。伊那里で帰りのバスの時刻を書き留めて、浦の集落を過ぎ、林道を南へ深く入ってもらった。ゲートがあってタクシーから降りる。もう夕方の5時。林道を15分程歩いた薙沢の流れの近くにテント場を決める。明日一日だけが登山の日。三日間かけて山に登るとはいうものの、一日だけが重要な登山の日である。週間予報で、家を出る前から明日は晴れないことは分かっていた。でも来るしかなかった。来ないと後悔するに決っていた。テントを張った頃からもう雨がパラついていた。私は今、南アルプスの麓にいる。そう考えるだけで満ち足りた気分だった。雨の音を聞きながら眠った。

翌日はやはり雨模様だった。しかし強く降ることはなかった。落葉松の樹林のなかの幅広い林道を進む。芽吹いた若葉の細かな白緑の線が、揺れて光る繊細な枝々のなかに織り込まれて目に優しい。向面かの鹿が白緑の斜面を駆け上がって行くのが見える。白い尻が枝の間から見え隠れしながら遠ざかる。あとはカサコソという音だけが生き物の存在を知らせてくれる。静かな林道歩きだ。

地形図を常に見て、現在地を確認しながら進む。薙立沢を渡る。500㍍ごとに標柱が林道脇にあり、これもいい目安であった。その標柱の「4・½㌔」地点を20㍍程過ぎた所で、南にのびる林道に入る。分岐に何も標識はない。いいことだ。赤布が一本、判る人には判るという呼吸とでも言ったらよいような場所に付けてある。林道が使われなくなって久しい感じで草が生え、大きな石も転がっている。このあたりの判断は山に通いなれてかぎわけるような経験というものが必要なのだなどと悦に入りながら、小雨のなかを登った。林道は傾斜を増し始めた。林道がいつの間にか終わっていて登山道に入ったのではと思うことが数回あった。現在地は2万5千の地形図で言えば「市野瀬」から「鹿塩」に移る所である。私が持参した「市野瀬」



KOBEの登山専門店
手作りザックの店です。
心ときめき、背負い安いザックです。

●ウォーキングスナッグタイプ
ベンチレーションサポートバンドにより背中は常に快適。バックパネル部がワンタッチで取りはずし可能。両室マグネットを装備、アルミフレーム内蔵。
日帰りから一泊山行きに最適、かつ使い良さで定評のアタックタイプです。
●カラー：ジェードXレッド・ジェードXブルー・ジェードXワイン
●容量：28ℓ ●重量：1,400g
●素材：エステルリップストップ使用
●価格：¥13,000

山つつじ、山桜、石楠花
水芭蕉、花もほころぶ、
初夏の山へ
応援します。
あなたの山登り。

IMOCK. KOBE
神戸ザック
〒653-0033 神戸市長田区大橋町3丁目3-1
TEL(078)621-5851
FAX 621-3628

二児山登山道にて

の地形図は平成二年修正測量のもので幅員三㍍以上の道だが、昭和五十七年測量の「鹿塩」の地形図は破線路となっている。素直に考えれば十年間に小径が林道として拡幅されたという答えになるが、このような林道の荒廃状況から感じたことは、地形図の道の幅の違いは重視しないでおこうということだった。

薬立沢に向かって西に進み、南へ進路を変えてしばらくののち、沢がぐっと近づいてきたので、そろそろ東側にある二児山の北尾根に向かう踏み跡が左側にあるはずだ、と注意しながら歩く。予想通り赤テープがあってわずかの踏み跡が左手に上がっていた。しかし、林道はこの先も明瞭にある。「林道の終点から登山道に入る」という会の報告文をかたくなに信じて先に進めば、やはり本当の林道終点があった。左手には先程のよりも濃い踏み跡が上がっていた。文字の標識は何もないが、間違いないだろう。木があまり生えてなくて、背の高いササの斜面を直線的に登る。左手から先に見送った踏み跡を合わせることによって、この道に正しいと確信した。

高度差約80㍍、一気に登って南アルプスらしいシラビソの古木の立つ尾根に出た。東側は雍（崩壊地）になっている。シラビソとササのしっとりとした静かな渋い尾根に唐突の雍、南アルプスの魅力が凝縮された雰囲気の尾根を南下した。庭園風の所を過ぎて荒れぎみの道を登る。この部分は地形図から判断する限り、はっきりした尾根ではないので、分かりにくい所だろうと懸念していたのだが、間断なくテープ標示がしてあって分かりづらさは全くなかった。倒木を捲いたりまたいだりしながら、徐々に傾斜の増してきた尾根を登る。尾根筋がはっきりしてきたので西峰は近い。

登り着いた西峰は細かな木が密生した薙下伏の台地で、左へ折れる標示の赤テープがなければ通過してしまうような所だった。樹林の密度が高いのか、三角点のある東峰との間は雪が一面に残っていて冷えびえとした風情である。持ってきた赤布を付けて目印の補充をする。雨のために薄暗いままのたわんだ緩斜面には、鮮やかな赤色の布がよく似合う。東峰山頂は何の変哲もない樹林が少々切れたつるりとした所だった。標高のわりには山頂らしい風格はなかった。三角点とザックとを写し込んで記念にした。雨は止まなかった。

数分で山頂を後にした。赤布を回収しながら来た道を下山する。シラビソとササによってつくられた庭園風の美しい所まで戻った頃、雨は止んだ。少し遅めの昼食。食器に水を入れる音、コンロを組み立てる音、ガスの火の音、そしてお湯の沸騰してくる音が聞こえ始めれば気持

スミレ

二児山頂上

ちはぐっとなごんだ。あらかじめできている食料を食べて、テルモスのぬるくなったお茶を飲むだけだったなら、山の心に溶けることもなく、休憩しても先の行程ばかり考えるような余裕のない気分のまま下山する山行になったことだろう。

長い林道に戻る頃には青空も少し見え始めた。暗い樹林帯から抜け出た目には、雨上がりの冴えた空気の林道はまばゆい程に明るい。林道に茫々に育った叢を避ければ水玉がはじけ飛んだ。鹿の群れの音が時々ガサゴソする以外、私の歩く音だけの世界。今回の山行も絵の道具の3㌔グラムはボッカ訓練として役立つだけだったが、心は軽かった。

日が差し始めたので、往きの時には気づかなかった草花が目に美しく映る。テントに戻ってから、そんな草花を撮りながら林道散策をした。はるか奥の高みの雲も切れ始め、高山が見えだした。急いで落葉松林のまばらな所を探す。雄大な仙丈ヶ岳が夕日を受け赤味を帯びて光っていた。

夜は快晴だった。テントを開けて空を眺めた。無数の星の大空が鮮烈だった。完成させたつもりだった私の版画の大峰の夜空に、星の版を加えて鮮烈にしようと決めた。そう思えたことが収穫だった。ああ早く帰ってあの作品の夜空をまばゆく輝かせようと思うと楽しくなった。

鮮やかな夜に比べて、次の朝は薄ぼんやりしていた。往路はタクシーだったから15分しか歩かなかったけれど、伊那里まで約2時間かかる。7時42分発のバスに間に合わせるべく急いで歩いた。今回の行程のなかで最も厳しい時間だった。

津という尾根上の集落は、現代の日本の時間の刻み方から超越しているような佇いがあった。住みたいとも思った。公民館の塀がそれはそれは見事だった。昭和四年と刻まれた現役の木製電柱があった。仙丈ヶ岳が背後へ少しずつ遠ざかっていた。

（平成9年5月3日～5日歩く）

△コースタイム▽

浦の林道ゲート（15分）雍沢出合（4時間）二児山（3時間）雍沢出合（2時間）伊那里

△地形図▽2万5千＝市野瀬・聖塩

連載

比良を歩く ④

南比良峠から堂満岳・北比良峠

秦　康夫

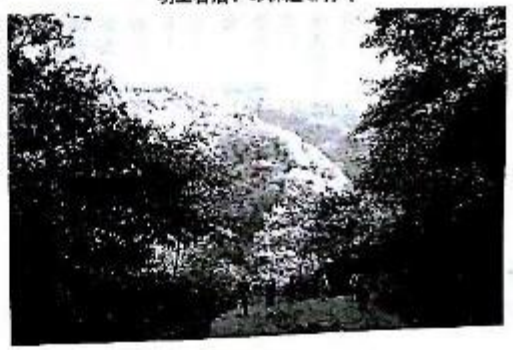
紅葉シーズン真っ最中、降水確率は終日ゼロ、見上げる空に雲ひとつない快晴の日曜日とあれば、これだけの人出もやむを得ない。山町柳駅の京都バス朽木行きは、まだ発車30分前というのに、延々長蛇の列である。

当然臨発バスが出たが、同じ場所からほぼ同時刻に出る広河原行きもあり、的確な誘導がないため列が混乱して、乗車するまでが大変であった。

8時50分頃坊村着。のどかに水車が回る比良山荘の前を通って、地主神社の境内で参加メンバーの確認とコース説明を済ませる。総勢十四名。境内には他のグループもいたが、西南線を経て武奈ヶ岳に至る御殿山コースに向かうようだ。

9時スタート。しばらくは明王谷左岸の林道歩きが続く。谷をへだてた対岸の山腹には、いまが盛りの紅葉黄葉が陽に輝いている。道を曲がるたびにそれが動的に変化する景観は、まるで風景画の展覧回廊を巡るような趣である。いつもはうんざりする長い林道歩きも、きょうばかりは退屈しない。ともに紅葉を鑑賞するかのように、上空にはトンビが優雅に輪を描いて飛んでいる。

三ノ流降り口、ワサビ谷出合の白滝山登山口を通過し、小広場で第一回目の休憩。谷向こうにはシラクラの壁が大きくそびえ、明王谷は、ここから奥ノ深谷と



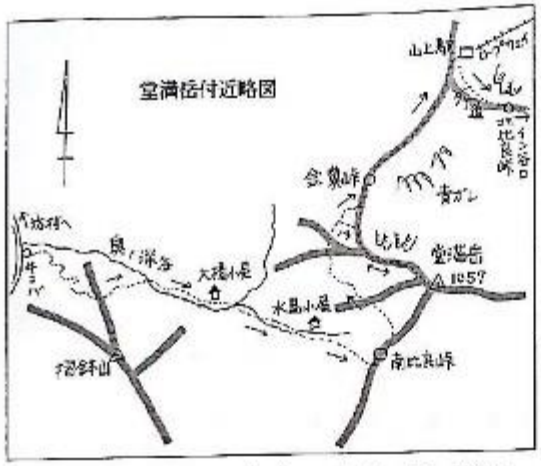
明王谷沿いの林道を行く

口ノ深谷に分かれる。

牛コバの分岐で林道を離れ、道標に従って大橋小屋・金糞峠方面へと左の山道に入る。いったん谷に近づいた登山道はすぐ登りとなり、いままでののんびりした林道歩きが、一転してジグザグの急登に変わった。大きなドングリの実がゴロゴロ転がっており、うっかり踏むとつるっと滑りそうになる。「石車に乗る」という言葉があるが、この場合は「ドングリ車に乗って」転びそうである、というのは、ちと大げさか。

前後左右、圧倒的な黄葉に抵抗するかのように時おり紅葉が現れる。杉が出てきた。久しぶりに見る緑がことのほか新鮮に感じられる。

急坂登りでは、グブル（同手に持った）



ストックが威力を発揮し、大汗をかきながらもぐんぐん高度を稼ぐ。登りが終われば休憩しようと思っていたが、いつまでも急登が続き、たまらず立ったままで小休止。渇いたのどにおやつの柿がおいしい。さすが晩秋、一汗かいた頬に心地よかった風が、すぐ冷たく感じるようになり、早々に出発する。

やっと道がなだらかになってきた。比良の1000㍍峰のひとつ、御殿山の広い裾野をぐるっと巻くように、トラバース状の細道が続く。ゆるやかなアップダウンを繰り返しながら、奥ノ深谷に落ち込む支谷の頭をいくつか越えると、いつの間にか左の谷に近づき、にわかに瀬音が高くなって奥ノ深谷と出合う。

両側二本ずつの丸太に、横に板を渡した立派な木橋を渡った所で一服。小広場で、座るに適当な石もあり、絶好の休憩場所だが昼食にはまだ早い。

わらじを履いた二人の男性が沢から上がってきた。下半身びしょ濡れで見るからに寒そうだが、このシーズンに沢登りとは豪気なものだ。牛コバから谷に入り、2時間半ほどかかったとのこと。

沢沿い右岸に道が直進しているように見えるが、大橋方面へは道標に従って左へ折れる。シャクナゲの木が目立つ。樹の巨木もある。合杉もある。しばらくは杉の緑のなかに、紅葉が映える林間の散歩道が続き、小川新道の分れを過ぎると大橋小屋が現れた。

今度は木橋を左岸へ渡る。橋の手前に苔のついた大きな岩があり、以前は、これが大変滑りやすいのでこわごわへっぴり腰で乗り越えたものだが、今は岩の横にも、補助的に木の小橋が付けられており、安心して渡れるのでありがたい。

すぐまた木橋があり、ここから谷は二つに分かれる。左へ橋を渡れば金糞峠・八雲ヶ原方面。南比良峠へは橋を渡らず、そのまま右の谷沿いに、落ち葉の敷きつめられた道を進む。浅い流れを横切って右岸に渡るとまもなく水晶小屋。名前だけは響きがよい。

流れが次第に細くなってきた。完全に水が枯れた所で谷筋から離れる。ササのなかの小道を登りつめると縦走路に出た。

奥ノ深谷に架かる木橋を渡る

左に1～2分で南比良峠、到着は11時40分。前回打見山から歩いて来たルートと、ここでつながったことになる。

峠の近くには適当な場所が見当たらず、琵琶湖側の深谷道へ少しおりた所、ポカポカと陽当たりのよい場所を選んで昼食をとることにした。うどん鍋を支度する人、ラーメン用の湯を沸かし始める人、北海道みやげの珍味を出してくる人。山での楽しみは、何んといっても昼飯どきの団らんである。坊村からの所要時間は2時間40分。予定より30分ほど早く着いたおかげで、きょうはゆっくりできる。

目の前にはこれから登る堂満岳。頭上に広がる紺青の空。きらきら光りながら、ゆうゆうと大空を浮遊するジェット機は、まるでクラゲのように半透明だ。水蒸気が少ないせいか、飛行雲も出ない。

12時30分出発。南比良峠の二体のお地蔵さまは、だれが掛けたのか珍しく緑色プリント模様の、粋なよだれかけ姿である。

堂満岳は縦走路から外れているので、通常のルートでは金糞峠の近くまで行って折り返しぎみに回り道をすることになる。それではもったいないので、近道を探すことにした。

数分歩くと、堂満岳から西南西方向におりてくる尾根を横切る箇所があり、これを登れば最短距離のようだが、いかんせんブッシュがきつそうである。が、試してみる価値はあるので、一行のうち元気な若手六人が果敢に挑戦することになった。

その他のメンバーは、もう少しましな近道を探すことにする。ロープの張られたガレ場を通過し5分ほど歩くと、幅の狭い溝状の道らしきものが右上にのびている。ザックを置いて空身になり、石のゴロゴロする悪路を3～4分登ると、金糞峠から来る堂満岳登山道に出た。

正面谷左股が突き上げたあたり、目の前に琵琶湖の展望が開け、伊吹山が真正面に見える。右手には、はっと息をのむ急峻な堂満岳北壁、白っぽい花崗岩の岩場。縦走路の雰囲気とは別世界の見様な光景が展開する。

ここから7～8分で、堂満岳1057㍍の頂上到着。最短距離のダイレクトルートをとった道中はすでに着いている。全く踏み跡もないブッシュ続きで大汗をかいたそうだ。

少し木立がじゃまにはなるが、北と東の展望は抜群だ。武奈ヶ岳は見えなかったが、前衛峰のコヤマノ岳から右奥には、ツルベ岳から北に稜線がのび、蛇谷ヶ峰まで続いている。双眼鏡を借りて眺めると、蛇谷ヶ峰の北には、山頂に建物のある箱館山、その右には赤坂山・三国山。さらに右方向に目を転ずると、黒河峠から送電鉄塔の目立つ湖北の乗鞍岳までが

一望のもとである。

展望を充分に楽しんでから、ザックをデポした縦走路に戻った。金糞峠を通過し、いま登ってきた堂満岳を右に眺めながらシャクナゲ尾根を行く。これがきょう最後の登り。けっこうこたえる。尾根道の途中、展望のよい所で立ち止まって2～3分、息継ぎ休憩。

やっと登り着いたピークには、荒れ果てた廃屋のような展望ハウス（？）が建っている。ロープウェイの駅が近づくと観光客の群れが目立ち、にわかに騒々しくなってきた。山上駅の横を通ってダケ道に向かう。

前から少し気になっていたことがある。昭文社の登山地図ではロープウェイ山上駅の所が「北比良峠」と表示されているが、駅付近はまるで峠という感じがしない。一方、ここから南にダケ道に向かう途中の道標では、なおまだ南の方向に北比良峠への矢印がある。きょうはダケ道をおりるので、ついでに峠の所在を確認したい。

堂満岳の山頂にて

シンジ谷最上部のガレ場を高捲いてから、ダケ道に入るルートから外れ、左に少しくだってみる。シンジ谷へおりるクサリ場が始まる手前に「北比良峠」の標識があった。「右尾根道を経て山上駅、左カモシカ台・大山口、下シンジ谷要注意」と記されている。これで標識上の北比良峠は確認できたが、いわゆる一般的な峠、山を登ってきてくだりにかかる所、というイメージではない。どうも釈然としないままであった。

ダケ道から下山にかかる。始めはゆるやかな尾根道。言はここからシンジ谷をへだてた対岸の、次郎坊山のあたりにカモシカが多く見られた、ということからカモシカ台と名付けられたという。

道はだんだん悪くなる。正面に釈迦岳が見えて、ロープウェイのシャカ岳駅と同じくらいの高さまでおりてきた所で一服。

檜の植林が現れてくるあたり、道は少しましになるが、おおむね急坂のゴロゴロ道が続く。石のベンチを通過し、ますます悪くなる道を慎重にくだって、15時40分頃やっと大山口の徒渉地点に到着。これでひと安心、ゆっくり休憩することにした。

さっそく山芋のツルを見つけて、ムカゴを集めている人がいる。しょうゆと塩の薄味をつけてフライパンで炒ると、ビールのつまみに絶品だそうだ。にわかに冷たいビールが恋しくなり、休憩を切り上げて先を急ぐことにする。

16時10分頃イン谷口バス停着。バスの時間まで間があるので、JR北長駅まで歩いて解散した。

（京都北山グループ例会・平成9年11月9日歩く）

《コースタイム》
坊村（50分）牛コバ（1時間20分）大橋小屋（30分）南比良峠（15分）堂満岳登り口・近道（15分）堂満岳（1時間）北比良峠・シンジ谷降り口（1時間10分）イン谷口（30分）JR北長駅

《地形図》
2万5千＝花背・比良山・北小松
昭文社＝「比良山系」

連載

1等三角点峰（500㍍以上）548座完登の記録（第7回）

中国・四国地方の山を平定

坂井久光

私の勤務先であった京都市交通局はその頃、定年が55歳であった。定年前の昭和63年5月に滝沢さんの案内で丹沢山への沢登り。秋の10月には根子岳・東篭ノ尾山へ佐藤さんと登った。11月には中田氏の案内で中国地方の高山・皇座山・花尻山・天井ヶ岳（いずれも山口県下の山）を連続して登った。

昭和54年の3月は、2月に登り損ねた不入山（1336㍍）へ登った。この山は高知県西部の秘峰で、原生林の残る四国でも数少ない山である。3月28日、石灰岩の露出する険道に近い山道をやぶをかき分けて登頂した。この山は四万十川（シマムタ・アイヌ語で「美しい水の流れる川」の意）の最源流で、水源の山である。のちに「一等三角点百名山」に入ったが、直径三十㍍のゴヨウツツジの大木や、コウヤマキ・ゴヨウマツ・ブナ・トチ等の巨大古木がうっそうと茂る。土佐藩の政策で、入山禁止であったことを知り、当時の藩主の英断に敬意を表した。山頂には標石のほかに石鎚山の小祠があった。

定年を迎えるにあたり、有給休暇を全部使っての京交山岳部創立三十周年記念山行は、屋久島の宮ノ浦岳（1936㍍）に登頂した。帰途一行と別れて鹿児島県の高隈山の御岳（1182㍍）に登頂し、その後中田氏と待ち合わせて長岡竜王山（614㍍）に登り、中国自然歩道を下山した。

後方羊蹄山（北海道）

5月30日、北海道へ飛び、旭岳（2290㍍）へケーブル利用の登山。31日は手稲山へ。6月2日はニセコアンヌプリ（1309㍍・アイヌ語でニセイコアンベツ「山中の崖谷に向っている川上の山」の意）へ登っていると京交の伊藤氏一行と会ってびっくりした。共にあす十二支会の会山行の後方羊蹄山に参加するためであった。

その夜はホテルで会長の今西錦司氏、娘の皆子さん、孫娘と今西家三代、全国からの多数の会員と地元北海道の日本山岳会員の山川氏、事務局長の平野明氏、御田原子さんなど総勢百人を超す盛会で、十分飲みかつ食べて翌日に備えた。来年は後方羊蹄山以外に適当な山が見当たらなかったので、最近までこの山が使われている。

後方羊蹄山は、富士山より整った屏形の成層火山で、山名は昔、阿部比羅夫が政所を置いてシリヘシ山と名付けたのが始まりだが、アイヌ語ではマッカリヌプリである。

ヌプリは山の意で、マッは後、カリは廻るの意である。この山の北は尻別川が、南は真狩川がぐるりと取り巻いている。南の真狩川の水源の山の意で付けたのだが、比羅夫がマッが後なることを知り、後方と羊蹄（漢名ギシギシをシと言った）でシリヘシと名付けた。ギシギシは雑草でスイバともいう。後をなぜシリへと言うかは、尻の方向だからで、ちなみに前は目の方向からマへと言うらしい。

北の尻別川は後川の意で、アイヌの人がこの山をぐるりと川が巻いている馬形から付けたものだろう。

翌3日の山行日は快晴であった。山麓の雪は薄かったが、登るにつれ積雪は深まり、オーバーズボンにオーバーシューズで、ワカンを着けたり、雪が締ってくるとアイゼンに替え、雪に埋れた山小屋を経て火口丘の稜線に達した。ぐるりと半周して山頂の1等三角点に登頂した。今西さんの発声で一同万才三唱。

この盛会を取材するマスコミも多く、ヘリコプターまで飛来するしまつ。親子三代の登頂も新記録とか。この第二回目の羊蹄山の登山は最も盛大で百余人の盃を酒森の今西氏はみな飲み干された。

下山は私が最後尾となり、ぐるりと廻るのが面倒とピッケルとアイゼンを頼りに火口底にくだって対岸の稜線へジグザグにステップを切って登った。これを見た今西さんはじめ、皆んながびっくりした。のちに、このことが評判になったらしく、平野さんが日本山岳会北海道支部の会報「ヌプリ」の記事を一部送ってくれた。だれも私のまねをする人はいないし、我ながらはしたないことをしてしまったと当時は思った。

5月15日に定年退職して登山に専念したかったのだが、そうは問屋がおろさぬ。山の神が許してくれるはずがない。「娘の結婚も済まぬのに遊んでくれたら困る。還暦の六十まで働いてくれ」と宣われては仕方ない。6月から西陣の問屋に就職した。給料には不満はなかったが、休暇が少なく、日祝以外は第三土曜しか休めなかった。それで一年勤めて辞め、週休二日制の松下の子会社の東洋電波に一職工として就職した。

その間に赤岳（八ヶ岳・2899㍍）や、宝蓮山（1650㍍）・神山（1438㍍）・鳥海山（2230㍍）・月山（1980㍍）を7～8月に登り、秋には「一等三角点研究会」の例会で岩菅山（229㍍）に会員一同と登った。

昭和54年は京都府山岳連盟創立三十周年に当たり、京都府の1～3等三角点182座を完登し、その記事を記念誌に頼まれて「京都府百山」として1～3等三角点と独標を高い順に選んで書いた。

京都は口うるさい古老岳人が多い所で、百名山などと書こうものなら、つまらぬ山を入れたとか、喧々囂々の非難を受けるのは火を見るより明らかであったからだ。

昭和55年5月3日、新潟県の日本平山（1081㍍）に例会として登った。川越・滝沢・小島の三氏と行ったが、顧問の日本山岳会越後支部長の藤島玄さんが、部下の斎藤弘氏（鉱物山の名北踏早百合の栽培に成功した林業家）と駅で待ち合わせて、我々一行を案内してくださった。残雪があり、山麓ではカタクリが咲き誇っていて、池畔を通るコースを登った。山頂では型れた三角点をピッケルで掘り出して一同万才三唱した。

そののち、土倉山（696㍍）・鳥屋山（381㍍）に登った。のちに早逝されたが、亀田の社長で風雪のビバークで有名な立川氏が、愛車で登山口に来られ、玄さんといっしょに待っておられた。月岡温泉「華月荘」に案内され、立川氏持参の銘茶をいただいた。夕食には銘酒・越の寒梅や山海の珍味をご馳走になった。温泉で汗を流し、楽しい一夜を過ごしたことも忘れ得ぬ思い出の一コマである。

またその年の2月には四国の今ノ山（665㍍）や三本杭（1226㍍）を小西誉夫氏と登っている。

5月25日の例会は中央アルプス南望の猿若木山（2169㍍）で、山小屋で一泊した。松浦さんはじめ、賀島・小西善・福久・川越・滝沢他7名参加と盛会であった。夜遅く小屋に着いた川越・滝沢一行のヘッドランプが登ってくるのを先着者一同が望見し、満天の星空を眺めたのが印象的であった。

8月に山形県の葉山（1462㍍）を登り、次いで大朔山（737㍍）に赤湯温泉の斎藤喜一氏（日本山岳会員）の案内で登った。次いで白鷹山（866㍍）に登り、翌日蔵王の1等三角点屏風岳（1817㍍）に登って帰った。

9月14日、妙高山（2447㍍）を登り、国土地理院の技師が三角測量をしているのに出会った。この時も川越はじめさん一行と会って、深田百名山の火打山もついでに登って帰った。

9月には上高地の長塀山・蝶ヶ岳・常念山を縦走し、前常念山（2662㍍）に登り、常念小屋に泊まった。翌日、大天井岳・燕岳と縦走し、中房温泉に一泊した。帰路に故郷金沢で一泊し帰京した。

10月、秋の例会は信州の斑尾山（1382㍍）であった。この時、小西誉氏の提案で前年の昭和54年に発行された『信州百名山』の著者清水栄一氏をゲストとしてお招きしたところ、快諾され、山麓の民宿で一泊していっしょに登った。これが縁で平成5年頃亡くなられるまで親交が続いた。東北の白神山を始め、森吉山や四国の三嶺や中国の高ヶ山、京都の長老山・地蔵山等を案内したりいっしょに登ったりした。信州の山へ登る時は泊めていただき、いろいろとお世話になった。私にとっては大恩人であり、今もなお奥さんや息子さんとの交流が続いている。清水氏は長野市の実業家で伯与印刷を始め、事務機器、週刊長野の社長であった。

清水氏も私も「深田クラブ」の会員だったので、クラブの例会でもその後何回も会った。親父が長く続いたのは学歴も大倉高商（現東京経済大学）卒業で、私と話がよく合ったからではなかったか。また同窓の小谷隆一氏と取引上の知り合いだった点も大きかった。

11月1日、秋晴れの好日のなか、境港から隠岐に渡り、大満寺山（608㍍）を登り、一人で万才三唱して快哉を叫んだ。これで中国地方を平定し、翌昭和56年1月から4月にかけて四国地方も高縄山以下四座を登って完登できた。

エリア別徹底研究

近江側から登る鈴鹿の山々 ㊽

権現谷の秘境を歩く

リョウシ

本誌35号の鈴鹿の山々㉝「霊仙山・岩ノ峰から南に延びる尾根」で紹介した尾根は△コザトで西に向かい、権現谷の東の峰リョウシで南北に分かれる。

南にのびる尾根は白谷の出合で消える。この尾根に向かって権現谷からリョウシ坂の古い道がまだ残っている。北にのびる尾根は行者谷の支谷滝谷の出合で消える。この出合からリョウシに向かう谷にはエンマ垰という地名が残っている。

リョウシの山頂から北西にある岩峰からは霊仙山のすばらしい眺望が得られる。その真下が奥ノ権現だ。この岩峰は昔は行場として登られたと思われる。権現谷の入り口にあけん原の集落がある。権現谷には「口ノ権現」と「奥ノ権現」がある。雪が深い時は口ノ権現に参拝したという。毎年1月28日・5月28日・9月28日には「権現祭り」が行われる。その日にはあけん原の人たちが神酒と餅をもって参拝するそうである。

昔は、役行者が大和大峰山に入る前にまず、この霊山の権現谷で修行したという、いい伝えがある。戦前には大和大峰山に参った人たちは必ずその足で、あけん原の権現さんにお礼参りに来たものであり、頭に冠をいただき腰に鈴を付けた山伏姿の行者がほら貝を吹きながら、この谷を何人も歩いて行ったそうである。

河内の風穴の集落を過ぎるとすぐあけん原集落の手前で道が分かれた。右折して集落を通り権現谷林道に入る。林道の右下の杉林に杉の大木六、七本が望めた。その根元に口ノ権現の朽ちかけた鳥居が建っている。車を停めてよく見ると奥に蔦のからむ岩が鎮座している。

リョウシ山頂の石神のような苔むした岩

左に炭焼き小屋と地蔵さんを見送ると右の壁の下に河合不動明王が現れ、地球の血液が岩の間から吹き出していた。水はこの湧水で確保する。谷は白い石灰岩が露出した涸れ谷に変り、両岸には切り立った岩壁がおおいかぶさってきた。行者橋の手前の広場に車を駐める。

橋を渡り廻り込むと左の河原の岸に奥ノ権現の鳥居が望めた。左に朽ちかけた

木の橋がある。この橋が行者谷の入り口で、谷の出合はセメントで固めた壁になっているため分かりにくい。正面には岩壁を配した急斜面がリョウシの山頂へと続いている。権現谷橋を渡り南に大きく廻り込む。道路の右側に立つ丸いミラーを見送り、次のミラーが現れると、左の急斜面を登るリョウシ坂の取りつき点だ。

この古い道を登ると左斜面は植林に変わった。消えかけてはいるが、折り返しの急坂が植林帯に沿って続いた。灌木を手がかりにして登ると真上に岩尾根の鞍部が見えてきた。動物たちもこの道を利用しているようで、古い道は消えずに残っている。尾根に着くと道は尾根を乗り越し、東の谷の杉林のなかにのびていた。左折して尾根を登ると石灰岩の岩稜になった。尾根の一部が切り開かれ、造林公社の柱が続いた。カレンフェルトと雑木の尾根は水苔におおわれている。飛び石伝いの登りが続くが、古い道のようで容易に歩ける。冬枯れの雑木の尾根の奥にリョウシの山頂、右には杉林の谷の上にコザトが盛り上がっている。左には遠間から巡大な鍋尻山が望めた。最後の登りにかかると、明るい南向きの斜面に黄金色の花がチラホラ咲いている。フクジュソウだ。あちらにもこちらにも、ザックを下ろし、愛でながら何枚も写真に撮った。今年は暖冬で約3ヶ月も早く花を咲かせている。大丈夫だろうか？　右斜面に杉林が現れるとリョウシ（722・9㍍）の山頂に着いた。

一部切り開かれ、石柱が建っている。左の権現谷に向かう尾根にはっきりした道がある。少しくだってみると岩稜帯に変わり、盛り上がった岩峰の広場に着いた。石を並べたような岩峰からは大パノラマが展開した。北方には雪を薄くまとった霊仙山の西南尾根が、圧倒的なボリュームで明るく輝やき、笹峠からあけん原へと裾を落としている。山腹の白い林道の下には杉と檜の植林が広がっている。南方には左に藤原岳と御池岳が山並みを連ねている。深く落ち込んだ権現谷を挟んで鍋尻山が鋭い角度で迫り上がっている。真下が奥ノ権現だ。この岩峰は昔の行場ではなかったかと思われた。鈴鹿山系の北方にイヌワシが棲息しているが、この権現谷や西南尾根周辺がもっともその密度の濃い山域だ。ゆっくりくつろいでいるとイヌワシが飛来してくるかも。

昼食後山頂に引き返して左にくだると、コザトへのびる尾根の分岐の平頂に着いた。東側には杉林が広がり、山頂部は枯れ木や倒木が目立つものの明るく開けている。頂上にはまるで石碑のような苔むした岩が、霊仙山をバックに鎮座している。

リョウシは漢字でどのように書くのか、あけん原の人たちに聞いてみたが分からないと言われた。エンマ畑とリョウシ坂の地名や岩峰、そしてこの岩を見ると、「霊峰」が正しいように思われた。

山頂部は北東に長くゆるやかに広がっている。ケヤキ・ヤマザクラ・カエデ等の高木・立ち枯れの大木もある。その中にはシロモジ等の低い木もあり、樹々には藤づる、そのほか高やかづらが絡みついて茂っている。下草はなく落ち葉がまるで深いジュウタンのようで、その中をけもの道が縦横にのびている。まさに原始を思わせるような深い樹林が続いた。

苔むしたカレンフェルトの岩峰（697㍍）が現れ、廻り込んでくだる。次第に急斜面となり、右に杉林が現れると真下に谷が見えてきた。灌木をつかみながら右斜めにおりて杉林の谷にくだると、流谷の出合に着いた。

古い林道が上流にのびていた。左折してくだると右に古い作業小屋があった。このあたりは古い地名ではウマゴヤとなっている。谷の右岸に道が続き、重谷の出合を過ぎると左下の行者谷におりる分岐に着いた。左折して谷におりる。

なお、古い林道は分岐のすぐ先で消えている。以前この山域は大きく茂る杉林で、伐り出しのため行者谷の出合から林道がのび、重谷にも続いて山腹を南西にのびていた。谷筋はほとんど消えてしまったが、山腹の道は現在もかすかにあり、太いワイヤロープや鉄のレールがまだ残っている。

行者谷をくだるにつれ道が消えてきた。石灰岩の崩れ谷をくだる。水が流れるとすばらしい滝に変わるような岩場もあるが、問題なくくだることができて権現谷林道に着いた。右折して林道をくだる。

今年の正月3日にも友人とこの尾根を歩いたが、その時、友人が腿の骨を二本拾い喜んでいた。あなたも気をつけるかも……。

（平成10年1月17日歩く）

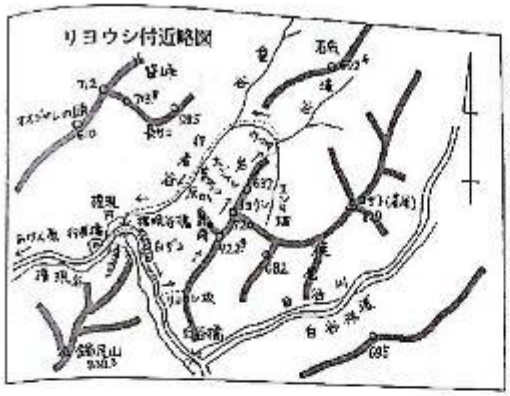
△コースタイム▽

権現谷広場（5分）奥ノ権現（10分）リョウシ坂（35分）尾根（50分）リョウシ岩峰（30分）岩峰697㍍（30分）滝谷出合（10分）重谷出合（40分）権現谷広場

△地形図▽

昭文社＝「霊仙・伊吹・藤原」2万5千＝「彦根東部・高宮・霊仙山・篠立」

（岩野　明）



リョウシの岩峰からの霊仙山西南尾根

エリア別徹底研究

近江側から登る鈴鹿の山々 ⑲

権現谷の秘境を歩く

上手山・オオジャレの頭

あけん原から北東にのびた尾根は、笹峠から霊仙山へと続いている。笹峠へは今畑からの道が一般ルートで、この尾根は全然歩かれていないようだ。あけん原から真上にそびえる上手山へ登る古い道が現在も残っている。上手山からオオジャレの頭へと続く広くゆるやかな尾根には、原生林を彷彿とさせる高木の深い樹林が続く。そしてオオジャレの頭と713・8㍍峰からの眺望をゆっくり楽しみ、標高270㍍の権現谷へ一気に約430㍍を下降するルートを発見した。

あけん原の集落に着くと、左手真上に白い露岩を配した上手山（500㍍）が大きくそびえている。集落を過ぎた権現谷林道入口の広場に車を駐める。引き返して橋の手前にある二軒の民家の間を通り、畑の横を進むと尾根に登る古い道がある。竹林と雑木が茂る急斜面にはシャガが生え込んでいた。

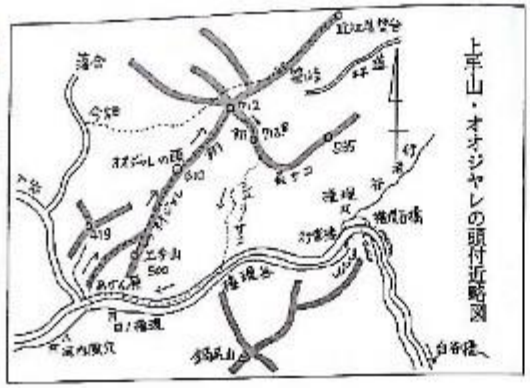
折り返しの坂道を登って尾根に着くと、左斜面は伐採されたばかりで展望が開けた。尾根と右斜面は冬枯れの明るい樹林が続いた。急坂を登ると岩稜の尾根に変わり道が消えたが、苔むした白い石灰岩の岩場を登ると踏み跡が続き、上手山の西のピークに着いた。

広い尾根を右にとると右前方に上手山が見えた。垣り込んでゆるく登ると上手山の山頂に着いた。屋の上の山頂は雑木と赤松が茂り、真下にあけん原の集落が望めた。

引き返して進むと広い尾根はゆるやかな登りになった。自然そのままの高木が続き、そのなかはササと常緑樹の低木がまばらに茂っていた。けもの道をたどると鹿の広場らしくササを折って敷きつめた寝床もあった。あたりの樹木を見上げては、それらを堪能しながらゆっくり登る。古い倒木もある。この山域は長い間自然のままの姿で動物たちの楽園になっているようだ。

713.8㍍峰より近江展望台

左端に尾根が現れると、その右は高木が茂る深い樹林の広い台地に変わった。右端は岩盤の上で、眼下に権現谷のすば



上手山・オオジャレの頭付近略図

らしい渓谷が見えた。何か身震いするような神秘的な気配を感じる所だ。

左の尾根に取りつくと苔むした岩稜に変わり、オオジャレの頭（610㍍）に着いた。淮木の岩峰からは両真に大きく展望が開けた。左にはリョウシの屹立した山塊が険しい山襞を権現谷に落とし、その奥にコザトの稜線から右に続く山並み、真下の権現谷を挟んで南に鍋尻山が大きくそびえている。

岩稜帯を過ぎると疎林に変わりササが増えてきた。そのなかのけもの道を登る。平坦な尾根になると赤松の大木が一本ある。近づいて行くと約15㍍先で大きな雌鹿が一頭跳び出し、角を振りながらササをけちらして奥に消えていった。松の根元の周囲が鹿によって掘り込まれて水がたまり、夕陽になっている。松の根元とあたりのササは泥だらけだった。鹿の後を追うように登り、尾根の分岐の712㍍のピークに着いたが展望はない。北東斜面は杉林になった。右折してゆるくくだり、登り返すと雑木の岩稜に変わり、南西に眺望が開けた。深く落ち込んだ権現谷に向かって左右から尾根が幾筋も重なり合って落ち、横根連峰の左奥に双耳峰の三国岳から御池岳へと続く鈴鹿の山並み、そして鍋尻山の隆大な山塊。V字形に切れ込んだ芹川谷の先に湖東平野がかすんで広がっていた。

次のピーク713・8㍍峰に着くと北方に眺望が開けた。ササ原が明るく広がる笹峠から近江展望台へと冬枯れの明るい斜面が緩い角度に垣り上がり、天を突

山と自然の本

《新刊》ミニヤコンカ初登頂　T・ムーア他著　山本健一郎訳　2500円
《新刊》落日の山　荒賀　憲雄　2500円
山の響き　田畑　古雄　2500円
比良の父・角倉太郎　比良登山会青ものがたり　2200円
関西　山越の古道山塊(下)　中庄谷　直　1942～2000円
京都丹波の山(上)(下)　内田　嘉弘　1942・2000円
兵庫丹波の山(上)(下)　慶佐次盛一　2000・1942円
近畿の山　日帰り沢登り　中庄谷直・吉岡章　1942円
京都滋賀南部の山　内田　嘉弘　1942円
近江　湖北の山　山本　武人　2000円

《新刊》和仏山岳語彙研究　村西　博次　3000円
仏和山岳用語集　村西　博次　2200円
鈴鹿の山と谷①～⑯　西尾　寿一　3107～3800円
美濃の山㊀㊁　大垣山岳協会　各2200円
鈴鹿の山ヤブ山紀行(国境編)　高木　泰夫　1942円
霧の谷／霧の三ちゃんの山ものがたり　酒井　昭市　2427・2716円
山城三十山　増永　迪男　各1942円
初登山　今西錦司初期山岳紀行集　日本山岳会京都支部　1845円
初登頂　花園の峰から天竺の峰へ　谷藤清明編　2718円
平井　一正　2816円

★表示の価格は消費税を含みません

ナカニシヤ出版
京都市左京区吉田二本松町2
☎075-751-1211　〒606-8315

あけん原集落より上手山

大太鼓献納原木の石柱

いてそびえている。山腹の白い林道の下には植林の緑が大きく広がり、その奥にソノドが山頂を現かせている。岩に腰を下ろしてのんびりと昼食をとった。

東にくだって鞍部に着くと杉林になった。この杉林は右下の権現谷まで一筋となって続いている。以前は権現谷の地蔵さんの横からこの尾根に登り、笹峠まで道があったと聞いたが現在は消えている。しかし大きく茂る杉林は、間伐された古木や枯れ枝が、そして落ち葉が深々と積もっている。そのなかにはけもの道もある。たどると残雪の斜面をおりる感じで問題なくくだることができる。

右折して急斜面を折り返しながらおりると、右にケヤキなどの高木が茂る樹林が広がっていた。主な高木には常照の蔦がからみついている。権現谷の奥深い懐に抱かれ、小鳥の歌声を聞きながらのんびりとコーヒータイムにした。

杉林をくだると真下に権現谷が見えてきた。右折して石灰石が堆積した斜面を斜めにトラバースすると、杉林に変わり古い道が現れた。この道をおりると林道脇の地蔵さんに着いた。右折して権現谷林道をくだる。

河原でチッチッチッと鳥の声が聞こえた。カワガラスだ。流れの岩の上でしきりに尾を振って鳴いていたが、そのうちに上流に飛び去った。

なお、あけん原の集落の入り口の上には「稲原神宮大太鼓献納原木之碑」と書かれた石柱が建っている。もとは山ノ神の神木で幹の周囲5・4㍍のケヤキの巨木が茂っていたと言う。昭和15年12月に稲原神宮で紀元二千六百年を記念して大太鼓が造られた際、その原木として伐り出されたことを記念している。

（平成9年12月25日歩く）

《コースタイム》
あけん原（35分）上手山（30分）オオジヤレの頭（40分）713・8㍍峠（50分）権現谷林道（20分）あけん原

〈地形図〉
昭文社＝「霊仙・伊吹・藤原」2万5千＝鈴鹿東部

（岩野　明）

《第19巻新発売》
―山の随想集―
山との出会い
A5判　320頁／定価1680円（税込）
新ハイキング誌常連寄稿家
55名が書下した山の随想集
山との出会い、花鳥とのであい、いで湯とのであい、人びととのであい、さまざまなであい、その他。55編
発行所　新ハイキング社
〒144-0023　東京都滝野川7-6-13
☎（FAX共用）　03-3915-8110

エリア別徹底研究

武平峠から㊙特別ルート

近江側から登る鈴鹿の山々 ⑦⓪

沢谷峠から雨乞岳

鈴鹿の名峰・雨乞岳への近江側からのバリエーションルートとしては、本誌で、①大納言谷からの西尾根、②清水平谷林道からの清水ノ頭尾根、③奥ノ畑谷からの西尾根、④奥ノ畑谷から奥ノ畑峠ルートを紹介したが、今回はまだ全然知られていない私だけの特別ルートを紹介する。

一般的に知られている武平峠からのルートは御在所岳の山腹を巻いて、沢谷の源流からクラ谷をつめ、七人山の西の尾根を登る。しかし、陰湿な谷筋と深く掘り込まれた道は展望も良くない。東雨乞岳から南東に向かう部界尾根は沢谷峠から御在所岳へと続く。一般登山道のすぐ南に続いているこの尾根を歩く人はあまりいないようだ。

神崎川の源流に位置するこの山域はブナを主体にした深い樹林が大きく茂り、沢谷峠から望む鎌ヶ岳は鈴鹿の山八景の一つだ。そして細尾根にはシャクナゲがどこまでも続く。1014㍍ピーク南側の谷の源頭はゆったりと広がり、深く積もった落ち葉が山全体をおおっている。ブナを主に整然とした樹林のなかはたまらなくすてきに感じられ、溜息が出てしまうほどだ。東雨乞岳への登りではササ原のなかにブナの大木が続く。新ハイメンバー専用の特別ルートです。

国道477号線の鈴鹿スカイラインを武平峠に向かう。左に稲ヶ谷の登山口を見送り、ヘアピンカーブを登り、最後のカーブにかかると、左下から茨谷が鎮在所岳に向かって切れ込んでいる。行き過ぎた道路脇に車を駐める。

引き返して茨谷に入ると杉林になった。左上に尾根が見えたので左折して斜めに登り、尾根に着くとそま道が続いた。ゆるい登りから急斜面になると左斜面が檜林に変わり、部界線のピークに着いた。左折していったんくだり、登り返すと平坦な尾根になった。武平峠からの登山道は右下の谷に沿ってのびている。左に檜林を見ながらたどると雑木の尾根に変わった。尾根は続くが左折して檜林の境目を

雨乞岳

おりる。真下の谷から鹿一頭が跳び出して右下に消えた。

沢谷峠に着くと鹿の広場があり、蹄の跡が凄い。峠の南側は伐採してあり大きく展望が開けた。カヤ原の急斜面が明るく広がり、真下に野洲川が望めた。そして左に鎌ヶ岳が逆光のなか、天を突いて黒くそびえ、鎌尾根から水沢岳へと続く主稜線が見えた。切り開きの尾根を巻くとますます展望が開けてくる。真下に国道477号線が見えかくれしながら左の武平峠へとのびている。車の音がはい上がってくる。右斜面は神崎川の支谷沢谷

の源頭で、ブナやミズナラなどの深い樹林が続いていた。

左斜面に杉林が現れると右上に967㍍のピークが望めた。そのピークから南西にのびる尾根に登りつめ、右折して967㍍ピークに登るが展望はない。

くだりにかかると正面に樹間から雨乞岳が雄大な全容を見せてくれた。尾根には切り開きが続き、細尾根には雑木に混じってシャクナゲが増えてきた。鞍部に着くと右斜面から古い道が合流した。この道をたどってみるが登山道のすぐ上の急斜面で消えていた。シャクナゲの尾根が続き、登りになると左斜面は杉林に変わり、険しい岩稜が続いた。岩を避け、左の杉林を登りつめると平坦な尾根になって、ブナが主のすばらしい樹林が続いた。

右下から谷がV字形に切れ込んできた。谷の源頭に向かってゆるく登ると、深々と積もった落ち葉が山全体をおおっていた。動物が寝ころんだような跡もある。下草は全くない。青い空をバックにした冬枯れの明るい樹林だ。いいな、いいな。谷には水もあり、四季おりおりの自然のなかにどっぷりとひたり、のんびりと過ごしてみたい所だ。

頂上の尾根に着くと正面に東雨乞岳が圧倒的なボリュウムで盛り上がっていた。右折して1014㍍から左におりると尾根が消えた。急斜面を登り檜林の横を登るとブナの疎林に変わった。樹床は灌木とササが広がっているが、まばらなので自由に歩けた。真上にササと灌木の生え込んだ尾根が現れたが、左のブナ林をゆるく登るとブナ林のなかに鹿の広場があった。この広場から尾根に向かって鹿道がのびていた。たどってみるとササが低くなり尾根に出た。そして四方に大きく展望が開けた。正面に東雨乞岳が見えるがササと灌木のやぶが広がっている。左には南尾根から南雨乞・雨乞岳へとのびる明るいササの稜線、後方には右から七人山・御在所岳・鎌ヶ岳、そして南に続く鈴鹿の山並み、その手前にいま歩いて来た尾根が常緑樹の濃い緑を混ぜて、もこもこと盛り上がりながら続いている。

鹿道をたどると一部消える所もあるが、ササのなかにかなりはっきりした踏み跡が続き、バサバサバサとササをかき分けて行くと、突然東雨乞岳の山頂に飛び出した。山頂は登山者がいっぱいで皆んな

びっくりしていた。眺望を楽しみながらのんびりと昼食をとった。

復路も同じルートをおりる。1014㍍からのくだりで鹿二頭に出会った。沢谷峠で大休止。登りの時は鎌ヶ岳は逆光にそびえていたが、今は西日をいっぱい受けて白い岩壁と明るい山襞を見せていた。

なお、武平峠からの登山道をたどり沢谷におりる乗越で左折すると、郡界線のこの尾根にのることができる。

（平成9年11月24日歩く）

沢谷峠付近から鎌ヶ岳

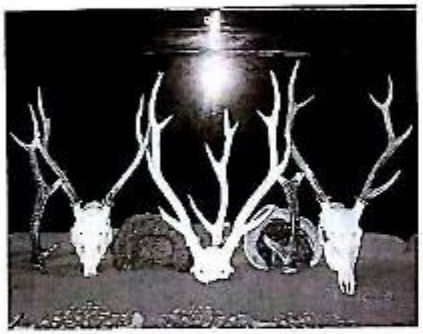
◇コースタイム◇

茨谷入口（40分）沢谷峠（15分）967㍍（35分）1014㍍（60分）東雨乞岳（2時間）茨谷入口

〈地形図〉

昭文社＝「御在所岳・鎌ヶ岳」2万5千＝御在所山

（岩野　明）


私の授かった通行手形

'95年度（平成7年）20号（新春・1・2月号）から今40号まで「近江側から登る鈴鹿の山々」と題して、バリエイションルートを70コースを紹介してきました。その間、いろいろな方々のご協力を得て、無事に終わることができました。長い間ご愛読くださりありがとうございました。

今まで紹介した鈴鹿の70のルート（次ページ「裏表紙」）をベースに歩かれ、その周辺にある尾根や谷もチャレンジしてみてください。すばらしい自然が手つかずのまま、今だに残っています。暖冬が続く近年、鈴鹿山系には動物たちも増えています。特に鹿は急速に増え、鈴鹿全域に棲息しているようです。

雨の神様である八大龍王（お釈迦さまが法華経を講説された時の会座に列した龍王・難陀・跋難陀・沙伽羅・和修吉・徳叉伽・阿那婆達多・摩那斯・優鉢羅の八人）や鈴鹿のやぶこぎ通行手形とも言える鹿の角があなたを待っています。特に未知の谷筋を歩くと頭蓋骨付きの角が発見できるかも知れません。

私が授かった通行手形の写真を紹介して終わりとします。今後ともよろしく。

平成10年3月1日　岩野　明

近江側から登る鈴鹿の山々一覧表

号数	No.	コースタイトル（全70コース）
20号	①	幻の塔、御金明神
	②	鈴鹿の展望台・銚子ヶ口山系
	③	不老堂から水木野
	④	黄和田から山ノ神峠・朝日山
21号	⑤	残雪の雲仙山西南尾根
	⑥	谷山から鹿あそび、ソノド
	⑦	残雪の鞍掛尾根から御池岳
	⑧	幻の池を巡る、御池岳主稜線
22号	⑨	奥ノ畑谷から雨乞岳
	⑩	雨乞岳西尾根を歩く
	⑪	藤切谷からカクレグラ・ダイジョウ
	⑫	ダイジョウ・イブネ・銚子・杉峠ノ頭
23号	⑬	セキオノコバの池、竜ヶ岳・静ヶ岳
	⑭	黒尾山から南東尾根へ
	⑮	カクレグラ（氷谷岳）
	⑯	近江の展望台、入道ヶ原
	⑰	藤原岳新ルートを行く
24号	⑱	秘境の御池岳南部・奥ノ平を行く
	⑲	ブナ林の尾根から御池岳南峰
	⑳	天狗堂
25号	㉑	田村谷林道から御所平・安楽越を行く
	㉒	太郎谷からベンケイ・鬼石・水無し
	㉓	小太郎谷から御所平・仙ヶ岳
	㉔	田村谷藤流から宮瀬路岳・高円山
26号	㉕	元越谷林道から入道ヶ岳
	㉖	元越谷林道から白蓋山・大流ノ頭・水沢岳
	㉗	清水平谷林道から残雪の雨乞岳
	㉘	行者コバから縄同山・北峰・竜王山
	㉙	鹿の楽園、能登ヶ峰の稜線を歩く
27号	㉚	野洲川ダムからサクラグチ
	㉛	雨乞岳南尾根の無名峰（820㍍）を歩く
	㉜	秘境の縄同山南尾根、ブナの森を歩く
	㉝	鹿見峠周辺の山、奥草山・政子と西山
28号	㉞	水木林道からイハイガ岳・向山
	㉟	瀧蔵の滝・永禅の滝から笠松山
	㊱	永源寺から堂後谷源流尾根縦走
	㊲	シキロ谷源頭の尾根、日本コバ新ルート
29号	㊳	藤川谷源流尾根、日本コバ・衣掛山
	㊴	佐目小谷湖行、姫ヶ滝
	㊵	動物の臭いが漂う、岳（向山）
30号	㊶	大バノラマの丸山から蓬戸山
	㊷	仙資谷から赤坂谷を、釈迦ヶ岳・猫岳
	㊸	八風峠から三池岳・御池（お菊ヶ池）
	㊹	雨乞岳南尾根、大納言谷から雨乞岳
31号	㊺	鋳子ヶ口北峰から水荒ノ池・深谷山
	㊻	神崎川林道から風越山・二子山
	㊼	ミズナシ・太尾の稜線を歩く
32号	㊽	茶屋川林道から銚子岳
	㊾	御池川林道からサンヤリ（八供さん山）
	㊿	政所冀谷鉱山跡、東山・キトラ山
	51	茶屋川林道の尾根から静ヶ岳
	52	真の谷で、「頭陀の窟」を発見
33号	53	日本コバ藤川谷、幻の「豹ノ穴」を発見
	54	箕井峠から黒谷山
	55	ササユリの咲く、明神山から白蓋背山
	56	湖東平野を望む、押立山（三子峰）
34号	57	山比古地蔵から赤石・向山
	58	篤取山ふれあい公園から八ツ尾山・高取山
	59	白山神社から万野・大見峠・茶野
	60	ミノガ峠から滝谷山
35号	61	ツツロ坂峠から彼根連峰を歩く
	62	鳴川谷林道から三国岳・烏帽子岳
	63	白谷林道から霊仙山・岩ノ峰
	64	男鬼の山、イブキ・イワス・比良山
36号	65	あけん原から鍋尻山・地蔵峠
	66	向倉から向山と高室山
	67	上丹生から阿弥陀ヶ峰（伊吹山）
37号	◎	夏を楽しむ渓谷歩き
38号	◎	御池岳周辺の池をめぐる
39号	◎	鈴鹿山中に点在する池をめぐる
40号	64	椛現谷の秘境①、リョウシ
	65	椛現谷の秘境②、上土山・オオジャレの頭
	66	武平峠から⑱特別コース、雨乞岳

注◎印（37号～39号）は特別寄稿として山本久男氏に執筆していただきました。（岩田）

鹿瀬峠越を歩く
熊野街道探索（紀伊湯浅駅～内原駅）

中村敏文

コースタイム　JR和歌山駅（電車35分）紀伊湯浅駅（25分）～①勝楽寺（10分）～②久米崎王子跡（一時間）～③井関王子跡（30分）～④川瀬王子跡（25分）～⑤馬留王子社跡（40分）～⑥鹿瀬峠（30分）～⑦吾郷王子跡（30分）～⑧馬留王子跡（30分）～⑨内ノ畑王子跡（40分）～⑩内原王子神社（15分）～⑪紀伊内原駅（電車50分）JR和歌山駅（徒歩15分）

① 湯浅駅から勝楽寺（湯浅町別所）

熊野街道は湯浅の中心街では道町・島内と七町平の南北道が残り、島内の南端で左折して東西道の川原横町へと続く。

湯浅駅から南へ少し行くと川原橋町で熊野街道に入り、広川の北側から大廻りして広川東側の湯浅別所へと続く。古代の熊野道は逆川王子から一直線に別所の久米崎王子へ通じていたが、湯浅に町場が形成されると西寄りに大廻りする近世の熊野往還が通じた。

湯浅駅から25分ほどで別所のほぼ中央部にある白方山勝楽寺に着く。草創は不詳ながら平安朝の阿弥陀・薬師如来。地蔵菩薩と四天王立像、および鎌倉時代の釈迦如来はいずれも重文指定で、平安期の古瓦も残っている。中世には湯浅氏の菩提寺となるなど、有田郡内有数の古刹となっている。

上皇の熊野詣での御幸道に沿うので白方御所と呼ばれ、鎌倉初期に民部卿藤原長房と明恵上人が白方宿所で対談したとあるのは当寺のことだろうか。現在は六間四方の小堂と境内に中興開山の愛栄の墓碑、紀伊国屋文左衛門が別所出身ということで紀文碑がある。

当寺の金堂と山門は豊臣秀吉によって、京都の醍醐寺伽藍として移築されて現存する。

② 久米崎王子跡（湯浅町別所）

勝楽寺の200㍍南の小丘が久米崎王子跡伝承地で、県指定史跡の王子跡の標石は国道42号線沿いにある。藤原宗忠の『中右記』の弘王子は久米崎王子のことで、王子社は明治四十年に藤白神社へ合祀された。

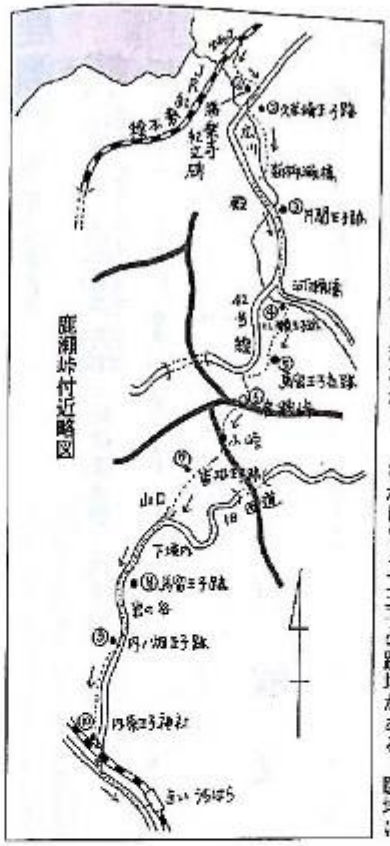
後鳥羽院の『熊野御幸記』には雨が激しく窪路より王子遙拝とある。鎌倉幕府は当王子の損傷がひどいため湯浅太郎に修復を命じている。紀州藩主徳川頼宣は荒廃した王子跡に小社を造営して王子社を復興している。

③ 井関王子跡（広川町井関）

別所地区から広川町域に入ると国道と別れ、広川右岸の柳瀬橋を渡り、殿の地域で国道に入る。広川左岸を進み、再び広川を渡ると井関に入り、再び国道と離れる。近世の熊野街道は殿村から井関村を南北に貫いているが、古い時代には広川岸の低湿地を避けて東寄りの山裾を伝っていたという。

井関の中ほどの稲荷山に、明治時代の井関の産土神であった稲荷明神社がある。明治初年に白井原・津兼・井関の各王子社などを合祀したが、明治末には稲荷社と全ての境内社は前田の八幡社へ合祀された。

白井原王子社は井関の南端の丹賀大権現社にまつられていたと推測される。津兼・井関王子社は同一の社だという説や、古社が津兼王子で、井関王子社はのちにできたなどの諸説がある。街道の東側の小高い丘に跡地がある。



④ 川瀬王子跡（広川町河瀬の北端）

後鳥羽院『熊野御幸記』の「井関王子を経た後、次参ツノセ王子」は川瀬王子で、河瀬集落北端の河瀬橋南詰めの森のなかにツノセ王子の跡地がある。跡地は老賀八幡神社の御渡り地として整備されている。

藤原宗忠の『中右記』に「於白原王子社奉幣」とあるが、河瀬橋の北詰めは井関の小字である白井原と地名が残るので、古代は川の北側に白原王子社があって、その後に川の南に移され川瀬王子社になったと思われる。

⑤ 馬留王子社跡（広川町河瀬）

川瀬王子から1キロ余りで河瀬の集落を抜け、坂道を少し登ると馬留王子社跡がある。三王子社は明治末に前田の八幡神社へ合祀されているが、鹿瀬山麓のこのあたりから鹿瀬峠への2キロ弱の急な坂道は、熊野街道では知られた難所で上皇・貴族も馬を留めたので馬留と名が付いたのだろう。

『続風土記』には馬留王子社の項を立ててあるが、後鳥羽院『熊野御幸記』には「ツノセ王子をへて次登るシシノセ山」と記し、『為房卿記』には「白原王子を経て次登る鹿瀬山」と記し、室町中期に書いた住心院僧実賢の『熊野詣日記』にも馬留王子の名はない。

⑥ 鹿瀬峠（広川町・日高町境界）

平安期よりその名が残る標高360㍍のかなり急坂の峠で、「鹿背・ししのせ」峠とも記され、熊野古道の難所の一つである。

現在の峠は木立が成長して展望がきかないが、江戸初期から明治まで茶屋も開かれていた。シイの巨木の目立つ茶屋跡、待に対して霊験のある地蔵、法華塚跡が残る。

⑦ 沓掛王子跡（日高町山口）

鹿瀬峠をくだりきると山口集落の手前に沓掛王子跡がある。付近に永享八年（1436）・嘉吉二年（1443）などの銘を持つ板碑がある。江戸期には雑掛王子といわれ弁財天境内社の王子社があったが、明治十年に原谷村村社の皇大神社に稲荷・里神社などとともに合祀された。

⑧ 馬留王子跡（日高町原谷）

沓掛王子跡から3キロ南の光明寺の下方の県道に馬留王子跡の碑があるが、実際の跡地はこの石碑より上のほうのみかん畑のなかにある。『熊野道中記』は沓掛王子と内ノ畑王子の中間にあると記す。

後鳥羽院の『熊野御幸記』や藤原宗忠の『中右記』には馬留王子の名はないが、『続風土記』には馬留王子社「境内周り六〇間」とある。河瀬の馬留王子社と同様に室町末か江戸初期に設置されたと推定される。

⑨ 内ノ畑王子跡（荻原～垣内）

馬留王子跡を過ぎると熊野街道も平坦になり広い大字の荻原へ入る。下垣内・岩の谷の小字を通り岩の谷南端で西川を渡り、古い熊野道らしい道を南へ行くと今熊野神社がある。神社下の少し南に内ノ畑王子跡の碑があるが、現在不明の旧王子社から近世になり移転したと言われる。

明治末に今熊野神社へ移し、その後に内原三王神社へ合祀している。後鳥羽院の『熊野御幸記』に「山中で休息し木を切り柱を造る。榊枝持参しウチノハタ王子に結び付ける」と記され、藤正実の『熊野詣日記』の応永三十四年（1427）に槌王子と記載する。

⑩ 内原王子神社（荻原～王子殿）

『中右記』に「参大家王子社奉公幣」とあるが、高家荘地域の総社として高家王子とも称されていた。また『続風土記』には若一王子社・東光寺王子社と言われたとある。

明治六年に王子・皇大神宮と改めその後に内原王子神社と改称したが、明治初期までは別当寺として不動堂・法華堂・祈願堂・毘沙門堂・護摩堂があった。

熊野九十九王子は他社へ合祀したり廃絶して大部分が跡地になっているが、現在は県指定史跡となり現状は保存できる。

10月の荻原祭りは荻原・荊木・池田・高家の四地域が参加して盛大に行なわれる。豊栄舞や日高郡に残る鬼獅子・獅子舞、池田の奴踊りなどが奉納される。かつては荻原と荊木の四ッ太鼓が奉納されたが最近は廃れている。

⑪ 紀伊内原駅（日高町荻原～内原）

内原王子神社から熊野街道は西川とJR線からだんだんと東へ離れ、荊木の大池の東で南へ方向を変えて道成寺へ向かう。

神社から紀伊内原駅へは大池のはるか手前で熊野街道と離れ、約30分はかかる。

文学歴史探訪ハイク ㊵

率川神社に三枝祭を訪ねて

松永恵一

祭りの姿

わが国は祭の国である。一般に祭りはお礼参り（報賽）と説かれる。秋祭りは神の指図や教えのとおり稲作に励んだところ、これこれの収穫がありましたと神に報告する神事である。祖先たちは天上の神の国のそのままが、この地上の人間の世界でうつし行われていると信じていた。この国で行われていることは神の命令によって行われているのであり、神事以外の何ものでもなく、天つ神の御意のとおりにとり行うことが、祭りだと考えた。収穫の報告祭、それだけが祭りなのではなく、天つ神の教えのままに稲作に従事することが祭りだと理解していた。

御酒を供え、御饌を奉り、山の幸・野の幸・海の幸を献じて、降臨された神々に感謝の意を表し、神の御意を迎え、音曲を奏で、歌舞を演じ、以て神意を慰め奉ろうとするのが「祭り」である。

わが国は太古の昔から今に到るまで、一日として祭りを欠かしたことも、一年として祭りを怠ったこともない、祭の国である。

祭という言葉に心を惹かれる。祭典に参拝すると、心がすがすがしくなる。何か古代の神秘に触れたような感じを抱き、神代の世界を覗いたような清浄感が与えられる。

三島由紀夫は、昭和四十一年（1966）8月、アメリカの日本文学研究家ドナルド・キーンと共に、神の山・三輪山山頂の「沖津磐座」を拝した。三島由紀夫が、三輪神社に宛てた礼状に次のような言葉がしたためられていた。

「……日本の最も古い神のおそばへ近寄ることは、一種の畏れなしにはできぬと思ってをりましたが、畏れと共に、すがすがしい浄化を与へられましたことは、洵にはかり知れぬ神のお恵みであったと思ひます。」

うま酒みわの舞

三枝祭（ゆりまつり）

神武天皇の皇后・媛蹈鞴五十鈴姫命とその両親・玉櫛姫命・狭井大神を祭神とする率川神社は、出産・育児の神様として知られる。三つの社が仲良く扉を並べている。中央が五十鈴姫命、向かって右が母・玉櫛姫命、左が父・狭井大神。父母の神が、娘を大切に守っておられるお姿から「子守明神」ともいわれる。奈良町のはずれに位置する市内最古の神社は三枝祭、別名ゆりまつりが行われる6月17日、一年のうちで最もにぎわう。

午前10時半。笹ゆりが境内いっぱいに香り、祭礼の開始を告げる雅楽が流れ、式場内がお祓いされる。古式により熟饌に御調理申し上げた「御神饌」と呼ばれる神饌が黒木の御棚にのせられて二つの本殿に供えられる。柏の葉を菌草で編んで作った器をされた折敷の中には、鯛・鯉・鮒・鳥賊・蒲鉾・若布・牛蒡・枇杷・大根・餅・白蒸（蒸）・椎茸・栗・稲が、それぞれ大きいものは切り揃えられ、箸一膳を添えて納められている。優雅な楽の音につれて三輪山に咲き匂う笹ゆりの花でふさふさと飾られた。「鶴」「亀」と呼ばれる酒樽が供えられる。樽の中にはそれぞれ黒酒、白酒が盛られている。宮司が柄杓で掬って本殿前の杯にそそぎ、祝詞があげられる。「地の平安とともに、本子守町をはじめ町々、里々すべての人々が守られんことを」。

笹ゆりと同じ薄紅色の衣に朱の袴、色鮮やかな緑で、唐草文を施したように美しいとカゲノカズラを挿頭した四人の巫女は、手に笹ゆりを採物として持って本殿前へ。ゆったり華麗に舞われる「うま酒みわの舞」。

午後1時半からは、古代衣装に身を包んだ稚児や七媛女、ゆり姫らの一行がゆりの花をかざして巡行する。華麗な時代衣装に身を包み、ゆっくりと市内を練り歩く行列。列の中央には笹ゆりの造花を満載した山車が並ぶ。

三枝祭は三輪山に生い咲ける笹ゆりの花で、神前を壮厳し、その花を供え、罇缶の中で醸した黒酒白酒を盃る儀式。笹ゆりの色と香りとその品格が織りなす夢幻の世界。すくすくと伸びたゆりの姿、而はゆげに首かたむけてかすかに咲けるゆりの花。三枝祭は笹ゆりのすがすがしい香りとともに、花の姿そのままのやさしさを初夏の古都に振りまいていた。

媛蹈鞴五十鈴姫命の伝承

『古事記』中、神武天皇の皇后選定の段に、次のような話がある。大久米命が神武天皇の皇后たるべき女性を捜し出して、その女性が「神の子」であると天皇に説明する話である。

三島の溝咋の娘、セヤダタラヒメは容姿が美しかった。三輪山の大物主神は心を奪われ、かの乙女が厠で用を足しているときに、丹塗りの矢となって、厠の下の流れより乙女のホト（陰部）を突いた。乙女は跳び上がって驚き、ともかくその丹塗矢を持って来て床に置くと、矢はたちまち麗しい青年の姿になって現れ、乙女と契った。二人の間に生まれた子の名をホトタタライススキヒメといい、別名ヒメタタライスケヨリヒメという。このヒメこそ「神の御子」です。と。

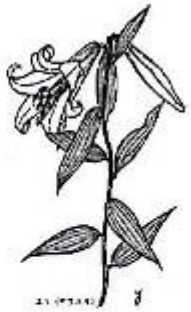
ホト（陰部）タタラ（矢を立てられた）イススキ（身震いを繰り返す）姫の娘という名を持った乙女が、七人連れだって高佐士野で野遊びしているときに、神武天皇は見初められた。狭井川のほとりの家で、ゆりの甘い香りに包まれながら、天皇と一夜をすごしたヒメは、橿原の宮に皇后として迎えられた。

コース概観

今回は、古都奈良に大神神社の摂社・率川神社に三枝祭を訪ねてみた。神武天皇の后、五十鈴姫をまつるこの神社では、后にゆかりの笹ゆりの花を神前に供えて花鎮めの祭りを6月17日に行う。

梅雨のうっとうしい季節、笹ゆりの花のすがすがしい香りが一面に漂う。四人の巫女がゆりの花をかざし、ヒカゲノカズラを頭に挿してうま酒みわの舞を舞う。参列者にもゆりの花がわかたれるゆかゆかしいしきたり。

一度は参拝して、太古の神の国の姿に触れてみよう。



率川神社はJR奈良駅・近鉄奈良駅、どちらの駅からも徒歩7分の距離である。二つの駅の中間、三条通りとやすらぎの道が交差するすぐ西側が率川神社である。三条通りはかつての三条大路。きわめて重要な役割を有していた。東の果ては春日大社。西に向かうと難波へと続く生駒越えの暗峠奈良街道。

JR奈良駅で下車。奈良駅は昭和九年完成。国際観光都市の玄関口にふさわしい駅舎として、奈良を代表する興福寺や薬師寺の塔をモデルにして設計された。大きな屋根の上に九輪と水煙を立てた荘厳な駅舎は、古都の象徴的な存在。完成してから、すでに半世紀以上が過ぎたが、今なお古都にふさわしい美しい姿を保ち続けている。

三条通りを春日大社に向かって歩く。まっすぐ東にのびる三条通りは敷き詰められたカラーブロックが美しい。古さと新しさが交互に顔をのぞかせる不思議な繁華街だ。通りから北に細い参拝道が付けられた第九代開化天皇の春日率川坂上陵へが、緑の潤いを与えている。町なかのよき隣人といったおもむきで横たわる全長100㍍の前方後円墳。開化天皇は春日率川宮に都を置き、在位六十年で没したという。

開化天皇陵の東に、藤原不比等が社殿を造営したという漢国神社が鎮まる。檜皮葺の屋根を持つ本殿は、桃山時代の様式を今に伝える美しい建物である。境内の鐘楼には、寛長十九年（1614）10月、大坂冬の陣に向かう徳川家康が奉納した鐘が残る。

境内社の林神社は、室町時代に来日し、饅頭を伝えた「饅頭の神様」林浄因をまつる。全国の製菓業者による「饅頭祭」は、浄因の命日にあたる4月19日に行われる。毎年百㌔を超える大きな饅頭が供えられ話題を呼んでいる。

三条通りを隔てた反対側が率川神社。本子守町に鎮座する。推古天皇元年（593）2月3日、大三輪君白堤が勅命によりおまつり申し上げた奈良市に於ける最古の神社である。当神社境内には率川阿波神社が併祀されている。このことから、この付近を万葉の阿婆の野とも考えられる。

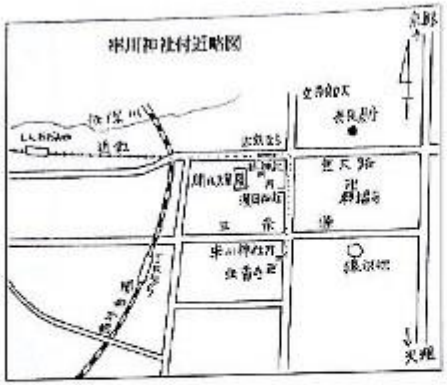
鐘なす　我が見し君を　阿婆の野の
花橘の　珠に拾ひつ

（『萬葉集』巻七　一四〇四）

大事な鎖のようにいつも私が見ていたあなたなのに、そのあなたを、今はせめてもの慰めに阿婆の野の白い花橘の玉と見て拾いました。

火葬して遺骨を拾ったことを詠んだ挽歌。阿波の地は町並みの中。「野」を思い描くにはあまりにも隔絶してしまった。

率川神社の少し南にある立派な門構えは伝香寺。鑑真の弟子思託の創建によるという。筒井順慶の母が順慶の菩提を弔い、筒井氏の菩提寺となった。本堂は



方三間の寄棟造のかわいい小仏堂で、天正十三年（1585）の棟札が残る。

地蔵菩薩立像は鎌倉時代に作られた衣を着せる裸形着装像。木造聖徳太子立像は太子二歳の像で、気品ある像として有名である。境内には一弁ずつ花びらが落ちる奈良三椿の一つ「散り椿」がある。三月下旬が見ごろ。

三条通りとやすらぎの道の交差点に奈良市観光センターがある。手軽なイラストマップや観光パンフレットが手に入る。奈良の物産や文化財の紹介、平城京の復元模型が置かれている。歩き疲れた足を休め、次のポイントを考えよう。

三条通りは、昔ながらの老舗と現代的な店とがひしめきあう町。「一刀彫」、奈良の一刀彫は、鎌倉時代に春日大社若宮祭礼のために作られたのが始まり。槍や薙を使って仕立てられた人形は、能楽や舞楽、狂言を主な題材としている。「奈良うちわ」、鹿や五重塔・若草山など奈良の風物、天平模様などの透かし彫りが優雅。「筆」、弾力性があり、使い心地の良さが長く続くものが理想の筆だという。「墨」、玄関から独特の香りが漂ってくる。製墨法を伝えたのは高麗の僧・雲徳。推古天皇十八年（610）のこと。本格的に奈良で墨の製造が始まったのは弘法大師・空海が筆と共に唐から製法を持ち帰り伝えてからという。興福寺二締坊の僧が持仏堂の燈火の煤を集めて油煙墨を作り、寺社の需要により発達した。油入りの土器に火をつけた燈芯を入れ、盃をして煤をとる作業に始まり、原料の膠を湯煎して溶かし、型入れ、灰乾燥・自然乾燥、最後に磨いて完成。中世には写経が頻繁になるとともに墨の需要が増え、三条通りにずらりと墨屋が並んだという。

《コース》
JR奈良駅—開化天皇陵—漢国神社—率川神社—伝香寺—近鉄奈良駅

《費用》

JR大阪駅～JR奈良駅	780円
近鉄難波駅～近鉄奈良駅	540円

《地形図》2万5千＝奈良

《問い合わせ先》
奈良市観光センター

率川神社	0742（22）3900
漢国神社	0742（22）0832
伝香寺	0742（22）0612
	0742（22）5873

特選コースガイド 1

奥播磨

秀麗な山

一山

中級コース（★★）

慶佐次 盛一

関西圏には、私を魅了してやまない山が多いが、やはり交通の不便な所で、私は車とテント泊で登りこなしてきた。ここに紹介する一山は、阿舎利山に登った時に一目ぼれした山だったが、若き仲間から誘いをかけられるまで、すっかり忘れていた山だった。

若き仲間は、山の奥ミで入った林道を利用すれば日帰りは十分可能で、さらに阿舎利山（1067・2㍍）へのピストンも可能だと言う。実際に歩いてみて、私たちがとったバラエティーコースさえ外せば、もっとらくに両山を訪れることができるだろう。

大阪を車二台で出発。中国自動車道の山崎インターで国道29号線へ降り、国道を北上する。曲車で国道を離れ、揖保川（三方川）に沿った車道を走る。三方で国道429号線へ左折。すぐに国道を離れ、阿舎利の村へ向かう細い車道へ右折する。阿舎利川に沿ったゆるい傾斜の坂道をしばらく走ると、阿舎利に着く。どうしてこんな山深い所に村があるのだろうと、だれもが思うような秘境である。木地師の村ではないかとの説もあるが、定かでない。しかし、砂鉄のタタラ炉があったのは事実で、私には三度目の訪問だ。

住居は十戸もないだろう。ここに車一台を置き、もう一台の四駆に全員が乗り移り、地道の林道をゆられながらひた走る。高度が上がるにつれ、一山が見えてくる。林道が山を越す手前の左側に、大きなスペースがあり、ここから一山の北麓を縫う林道が分岐する。

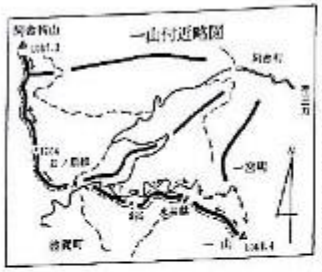
ここに駐車。正面には端正な一山。以前に比べると、西面がかなり伐採されたようだ。一山北麓のほぼ平坦な林道を進む。山肌にタニウツギや可憐なコガクウツギが咲き、ウグイスが鳴く。近くに阿舎利山、北に横無山、その右に須留ヶ峰などが見えて懐かしい。

秀麗で端正な一山

林道終点も展望がよく、カッコウの声がこだましていた。朽ちかけた木製の梯子を登り一山をめざす。かすかな踏み跡を、このまま登りつめれば一山だと思ったが、若き仲間は登る間もなく左側の踏み跡を選ぶ。これは明かに捲き道で、その上遠回りで道も悪かったが、やがて支尾根に出る。雑除けネットの扉を開け、いよいよ一山の方へ向かう。次のネットが現れ、これは扉が分からず乗り越える。

踏み跡も消え、雑木のやぶを突破するとなだらかな植林帯になり、登りつめるとナナやぶのなかに一山の1等三角点があった。

ここにもネットがあり、ネット越しに林道からも見えていた山々が広がり、西には三室山まで見えた。くだりはほぼ北西に、ネット沿いにくだる。一宮町と波賀町の町界稜線である。左側にネットで仕切られた伐採地で、右側の植林帯に道がある。ササが茂っている所もあるが、残置テープが認められるのでこれが一山のメインコースであろう。林道終点からこの道を登っていれば、ネットを越えることもなく、やぶをこぐこともなく、容易に山頂に達していたことだろう。



次は阿舎利山だが、ここはいったん林道にくだり、林道から日ノ原越に出て、そこから稜線通しに山頂をピストンしたほうが早いと考えたが、若き仲間は水谷越も確認したいし、あくまでも町界稜線通しに日ノ原越に出たいという凝りようである。

正確に稜線をたどるのはやはり難しく、少し稜線を外したところで食事にする。白いミズキの花が盛りで、足元には花が散ったエンレイソウが生え、草の茂みには鹿の骨が散らばっていた。

稜線にコースを修正し、水谷越の鞍は発見できたが自然に還りつつあった。町界稜線はほとんど植林帯だが、手入れが悪く枝が張り放題で歩きにくい。おまけに視界はなく、小さな起伏が続くので案外手間どったが、無事に日ノ原越に出た。

日ノ原越といっても今では林道だが、昔の峠はこの少し北側にある。おそらくもう消えていることだろう。開かれた林道の山肌に、かすかな踏み跡が残る。かつて私は、林道途中の鉱線路から阿舎利山へ登ったが、今はここからも登られているようだ。若き仲間を先頭に皆は阿舎利山へ向かったが、私ともう一人の仲間は駐車地点へ戻り、秀麗な一山を眺めながら皆の帰りを待った。2時間ほどして皆は元気に帰ってきた。

山頂手前のやぶには手こずったらしいが、ブナの木が残る静かな山だったと聞き、昔のままの面影を残しているようで嬉しかった。

Aコースタイム

中国道・山崎インター（1時間）駐車地点（15分）林道終点（50分）一山（1時間45分）日ノ原越（10分）駐車地点（1時間）山崎インター

〈地形図〉2万5千＝音水湖

登山に必要なものは、
国産・舶来
すべて揃っています。
足にピッタリ！
登山靴のことならお任せ下さい。
（定休・火曜日）
〒604-0077 京都市中京区丸太町通堀川東入
☎〈075〉211-5768
FAX〈075〉231-0318
山とスキーの専門店
京都 ムラカミ

特選コースガイド②

大峰

シャクナゲの尾根を行く

七面山

上級コース（★★★）

奥田　英一郎

大峰山脈のいわゆる奥駈道の縦走路の中程に近畿最高峰の八経ヶ岳があるが、そこからさらに南の釈迦ヶ岳へ行く途中に舟の埠と呼ばれる鞍部がある。尾根を少し登った所に「七面の摺拝所」があって、樹間から七面山の山容を望むことができる。七面の名はその山容よりも、さらに南のほうから見る宇無ノ川の源流に落ち込んでいる大岩壁で知られている。

楊子ヶ宿を底にたどる樹林の美しさはなかなか魅力的で、『近畿の山と谷』（住友山岳会編）には「楊子ヶ宿から仏生・孔雀と南進するに従い森厳な神秘感を覚えるほど深奥幽寂の気に満ちている」とあるくらいである。

その仏生ヶ岳を西にからむあたりから、深い谷を隔てて望む七面山の峭壁は見事なもので、「壮観といわんよりも、むしろ凄愴と形容するのが適切だ。鉈で削ったように滑らかで頂上から垂直に、一息に落ち込んでいる」と前記の本には記されている。

それほど七面山の大岩壁についてはよく知られているのだが、縦走路から外れているせいか、あるいは十津川・舟ノ川をたどるアプローチが長いせいか、それともいまひとつ魅力に乏しいというのか、既版のガイドブックにはほとんど取り上げられることがない。岳人たちにもあまり登られていない。いわば不遇な山のようである。

しかし、大峰主稜からのびる支尾根の七面尾には見事なシャクナゲが咲いていて、無垢な美しさを誇っている。さらに山頂付近の小ササの原の雰囲気はさすがに大峰の深さを味わわせてくれ、人に会わない静謐な山を好む人には十分に楽しい山である。

登山基地は舟ノ川の最奥の篠原集落になる。JR和歌山線の五条駅から十津川行きのバスで大塔村に入り、宇井から村営バスで入る。マイカーなら大塔村役場前から高野辻を経て篠原に入れる。舟ノ川流域で幕営するなら集落より上流に入るのがよい。ただマイカーの場合、舟ノ川林道は某製紙会社の私有地のようで、地獄谷出合を上がった所にゲートがある。篠原には民宿もあって、役場に勤めておられる主人は何かと便宜をはかってくださる。

七面山へ

篠原に入るのに今ひとつ、昔から下市へ出るのに越えたという川瀬峠越がある。前日この峠を越えて篠原に泊まり、翌日七面山をめざすのがおすすめである。

和田の郵便局と発電所の間にある小さな鉄橋を渡るとすぐ登山道で、材木を運んだのだろうかモノレールがずっと続いている。この道は関電の巡視路であまり人が入っていないが、約15分間隔ぐらいに鉄塔が現れる。1183㍍のピークへ直登するやや手前で稜線に出ると川瀬峠はすぐ下である。大塔村に入ると山仕事の人が入っているらしくよく整備されている。昔からの道は歩くに優しい道である。尾根筋から岩屋滝におりる道があるが、桟道が朽ちていて危険である。滝におりないで直進する山道はやや廻り道になるが歩きやすい。

翌日七面山をめざして舟ノ川の林道を上流へ入る。民宿の主人に登山口まで軽トラで送ってもらうと便利。車でも1時間はかかるから歩くと大変である。入谷までは舗装路だが、日裏山谷の出合からは地道となる。（アビンのジグザグを繰り返して地獄谷を見おろすが、注意していると、小さな木切れに「七面登山口」と書かれた立札が立てられていた。これが七面尾の1397㍍と1265㍍の中間あたりへ取りつくルートだ。

あまり人が入っていないので道らしい道ではない。大峰主稜を大塔村と上北山村とを結ぶ舟ノ埠への昔の道は、七面山の中腹をからんだあと、七曰迷を抜けだすようである。七面山への登山道は篠原の南にある下辻山から稜線伝いにあり、岩茸採りとか猟師たちが通った道のようだ。だから七面尾へのルートもいわば鹿が往き来したけものみちで、鹿の足跡がずっと稜線までついていた。

七面尾にたどり着くと、しっかりした踏み跡となる。東の1397㍍まではクマザサの茂るなかで、やがてやせ尾根となるとシャクナゲが現れる。このあたりからはシャクナゲ尾根となって、南側は削れ落ちている。むき出しになった木の根っ子は濡れているとよく滑る。

5月の末、シャクナゲは初めはつぶやくように咲いていたが、やがてざわめくように咲き乱れてくる。滑る木の根っ子の元には豆のような鹿の糞が散らばっている。そんな尾根で、ヒンカラカラ……とコマドリが鳴く。アカゲラだろうか、アオゲラだろうかドラミングが響いている。

やせ尾根がいつまで続くのだろうかと思う頃、突然ブナの疎林が現れて、小ササが敷きつめられたような所に出る。小ササのなかを適当にけもの道をたどって着いた円頂が七面山である。

1629㍍のピークはいったん深い森のなかをくだって東へたどることになるが、七面山はこの円頂らしく、かまぼこ板に七面山と書かれ、木にくくり付けられていた。樹間を透かして北のやや東寄りには八経ヶ岳、南のやや東よりには名峰釈迦ヶ岳が望まれる。

帰りはもと来た道をたどるのが無難。

（平成8年5月27日歩く）

＜コースタイム＞

和田（1時間30分）川瀬峠（1時間30分）篠原（車・1時間）登山口（1時間30分）七面尾（1時間45分）七面山山頂（2時間30分）登山口

＜地形図＞昭文社＝「大峰山脈」

特選コースガイド③　湖北

弘法大師ゆかりの古道

万字越（まんじごえ）

初級コース（★　）

柴田　昭彦

今昔恵介『地図で歩く鉄道の旅』（けやき出版）に、昭和一年の20万分の1帝国図「岐阜」の一部が掲載されていて、北陸本線の旧ルートが分かるのだが、地図に虫食いがあるのが気になった。

以前に古書店で帝国図を52枚購入していたことを思い出し、調べてみると、大正六年製版の「岐阜」図幅が見つかった。北陸本線は明瞭で、しばし、湖北地方を眺めていたら、ふと目にとまったのが、「饅頭越」という、ゆかいな名前の古道であった。

峠に饅頭を出す茶店でもあったのだろうかなどと想像をたくましくしながら、現在の2万5千分の1地形図「海津」を広げてみると、峠には「万路越」と記入してあった。名称が異なるので、不思議に思い、角川日本地名大辞典の『滋賀県』をひもといてみた。

「まんじとうげ　万字峠　……饅頭峠・万路峠とも書く。峠名は弘法大師が峠の大石に卍字を書き残した故事に由来する（湖北志略）。峠越えに西浅井町黒山とマキノ町小荒路が結ばれ、昭和の初め、海津大崎経由の湖岸道路……が開通するまでは海津方面と大浦・塩津方面を結ぶ主要道。現在廃道。……」

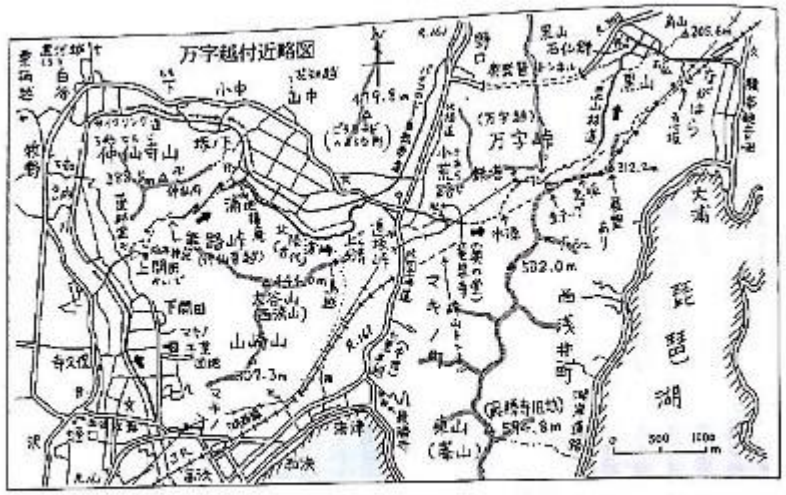
これで、いっそう興味をそそられたので、享保十九年（1734）に寒川辰清が完成させた『近江輿地志略』（弘文堂書店）の巻之八十七、浅井郡黒山村の項を調べてみた。

「［萬字峠］黒山村の西二十町計にあり。此峠より西へ十七八町西へ至れば海津小荒路村なり。［萬字塔］萬字坂の北の方にあり。大石なり。相伝弘法大師此坂を通行する時、此石面に卍字を書すといふ。今形見えず、されど此故に坂を万字坂といひ、萬字峠といふ。」

さらに『マキノ町誌』（昭和六十二年）には、「万治越（小荒路―黒山）　一説では、山容が卍形になっているので卍越とも書くという」とあるが、これは俗説で信じがたい。

万字越の古道

峠に茶屋があった話は聞かないから、饅頭というのは万字からの転訛であろう。主として、明治・大正期の地図に「饅頭越」とあるので、時代を反映しているようにも感じられる。現在、よく用いられる「万路越」「万治越」は、路の強調および人名・元号からの発想らしく思われるが、どちらも当字であり、本来、卍は「万という字」の意味なので、「万字越」と表記すべきであろう。



万字越は、明治期には県費支弁里道「西浅井道」の一部、大正九年には県道「海津木ノ本線」の一部となり（高島郡誌）、昭和の初めに大崎トンネルによって湖岸道路が開通するまでは、湖西と湖北を結ぶ重要路として人馬の往来もかなり多かったという。奈良時代に東美神駅（藤原仲麻呂）が敗走したのも、この道らしく、戦国時代、賤ヶ岳の決戦に向かう諸将もまたこの道をたどったと言われている。江戸時代には幕府役人の巡検などを機会に「まんじ峠道」の補修が繰り返し行われたようである（マキノ町誌）。

現在万字越は、西浅井町側はよく整備されているが、マキノ町側は少し荒れている箇所がある。峠の南方の東山（蓬山最勝寺旧地）への縦走のために利用されることもあるが、万字越だけではやや短いので、今回、古代北陸道として利用された熊路坂（仲仙寺越）と組み合わせたコースを紹介しよう。

JR湖西線永原行きに乗り、マキノ駅で下車。国道を横切って湖西マキノ荘園から西進して、知内川東岸沿いのサイクリング道を北上する。マキノ高原の景色が実にすばらしい。途中に東屋もあって憩いの場となっている。

サイクリング道に入ってから三つ目の橋の所で右折して上開田の集落に入る。林道に入る手前に称念寺の薬師堂と阿弥陀堂がある。薬師堂には本尊薬師如来立像（鎌倉）が収蔵されている（国重文）。像体内には延久六年（1074）、僧源増の墨書があり、平安中期のものである。境内には鎌倉時代の石造宝塔がある。

分岐で直進してすぐ右手に入ると坂本神社（式内社）であるが、左折して林道に入る。旧道（古代北陸道）は谷沿いにあったが、今では堰堤のためにたどることはできなくなっている。左手に三つ目の堰堤が見えたら、ほどなく、熊路峠に着く。

上開田は仲哀天皇のときの開発といわ

万字峠の地蔵祠

れている。木角宿禰命を祭神としている坂本神社の伝えによると、武内宿禰がこの坂道を塞いだ大熊を子の木角に命じて退治させ、その手柄により木角にここを領地として与えたところ、子孫が繁栄してこの神社に祖先をまつったという。それでこの坂道を熊路の坂と呼んでいるとのことである（宇野健一『近江野ざらし行』北陸・湖西街道・鯖街道篇、サンライズ印刷出版部）。

そういえば、熊路峠から林道をくだり、浦の集落に出て、旧道と交差している地点に「熊が出没しています」という古い立札があったが、こんな人里にも現れるのだろうか。湖北歩きには、鈴やラジオが必携のようだ。

熊路坂は仲仙寺越とも言われるが、北側にそびえる仲仙寺山の山頂近くに仲仙寺があることに由来する。その観音堂には平安後期の十一面観音立像（国重文・秘仏）が安置されていて、中世の天台宗寺院、中善寺（後の仲仙寺）の本尊であったという。今では、浦の集落の地祖庵（曹洞宗）の飛地境内、仲仙寺観音堂の本尊となっている。

浦に入ると、厳島神社でそれとわかる式内社、大荒比古神結神社がある。古代官道の北陸道は熊路峠を通っていたようで、『延喜式』に見える「鞆結駅」は、その経路にあたる石庭または浦にあったと推定されている。

地祖庵への入り口を過ぎて、右手に防火水槽があるが、その少し手前で右折して地道に入る。少し進むと、小川を隔てて左手に舗装道が並行している。地道にはやや雑草が茂ってはいるが、旧道の趣がよく残っている。

山裾をぬうように古代北陸道を歩いていくとやがて簡易舗装となる。上分の集落に入る所で右手に山道が分岐していて、鳥越と呼ばれている。『マキノ町誌』によると一説に、この峠付近は渡り鳥の道になっていて、昔は魚をすくうのに用いるタモ網で鳥を捕ったのでこの名があるのだという。上分を過ぎると広い道に出合う。国道161号線を横切ればいよいよ小荒路で、バス停がある。次の辻で旧北陸道を横切る。

小荒路の地名は『万葉集』をはじめとする多くの和歌にうたわれた、近江から越前敦賀へ越える「有乳山（荒路山）」への登り口に自天している。大津に都があった天智天皇の頃には鈴鹿関・不破関・愛発関という古代三関が設けられた。愛発関はあらち山を越えた越前国側に設置され、壬申の乱の舞台となり、源義経をはじめとして多くの武士が往来した。

中世になって追坂（中世は逢坂、近世は越坂と書いた）道が開かれ、敦賀への北国海道（西近江路、七里半越）が海津経由の主要な交通路となっていくのである。

さて、小荒路からは万字峠をたどることにしよう。墓地公園に出ると、左手に

マキノ町最古の古代寺院の一つ、竜泉寺（奥の堂と呼ぶ）がある。天平年間（729～749）、泰澄の開創と伝えられる。泰澄は白山を開いたとされる高僧である。この湖北が平安時代から仏教信仰の厚い所であったことを古代寺院の存在が物語っている。

砂防堰堤によって谷沿いの旧道は消失している。左側を捲いて林道をたどる。やがて、流れを横切る所で旧道と出合うが、倒木などで荒れているので、手前で左側の踏み跡をたどる。黒パイプに沿って歩くと水源に出る。ここからは左手の旧道をたどる。山道が続き、渓流の音が耳に快い。火の用心とある鉄塔巡視路の入り口を過ぎると古道らしいよい道となり、クマザサが混じってくると、ほどなく万字峠に着く。

黒山三尊石仏

峠には大石はなく、シデの大木と地蔵祠がある。この地蔵に子どもを守ってくれるというので、今でも参詣する人が多いという（マキノ町誌）。手作りの祠は昭和四十三年の日付があり、風雪に耐えてきた歴史が感じられる。

峠から右手へ登れば巡視路で、すぐくだりになる。その手前の右手に東山への縦走路の入り口があるが、やぶが多く、踏跡向きである。北山クラブ『北山百山』（ナカニシヤ出版発売）のレポートが参考になるだろう。

峠から祠の前を通って山道をくだる。歩きやすい道で、小屋に出るとすぐ黒山林道となる。地道なので足に快い。黒山の集落に入りコミュニティハウスのある辻で左折すれば、ほどなく寺跡で、阿弥陀堂という小堂だけが残っている。黒山石仏群は、室町・江戸期のものである。道の脇の五輪塔の前に「右山道、左泉道」と刻んだ道標がある。おそらく先ほどの辻にあったものだろう。万字峠を越え、西近江路で京都へ向かったことを物語っている。手前にある五輪塔二基と層塔三基は鎌倉後期のものだという。

永原駅の方へ向かう途中に黒山三尊石仏がある。道の右側にある大きな一枚岩に彫られた像高69㌢の地蔵菩薩坐仏で、像脇に鎌倉後期にあたる嘉元二年（1304）の刻銘がある（滝水俊明『関西石仏めぐり』創元社）。

湖西線のガード下をくぐって、JR永原駅に着く。湖西線は、ここからでは1時間に一本ぐらいなので、前もって時刻を調べておこう。

なお、永原駅を起点として黒山から万字峠に出て鉄塔巡視路をくだるルートは、よく整備されていて、展望にも恵まれ、楽しい一般向きの3時間コースとしておすすめできる。

（平成3年10月10日・11月8日歩く）

☆コースタイム☆

JR湖西線マキノ駅（1時間）上開田（50分）浦（50分）小荒路（1時間）万字峠（50分）黒山（20分）JR永原駅

＜地形図＞2万5千＝海津

連載

台湾の山々・五岳三尖へ（第7回）

大覇尖山（3492メートル）

山形歳之

五岳三尖の七山目、大覇尖山は台湾中部山脈の雪山山系に属する山で、雪山北峯を北上した所に位置する。このあたりは、東に「台湾百岳名峯」に含まれる品田山（3524㍍）・池有山（3303㍍）・喀拉峯山（3133㍍）の四つの山々が連なり、西には小覇尖山を従え、北に伊澤山（3297㍍）・加利山（3112㍍）など3000㍍を超える山々が続き、高山密集地帯である。

この山には平成9年3月に入山を計画し台北まで行ったが、天候が悪くて登れなかった。入山許可やガイド、帰りの航空券の日時のこともあって、天候待ちの日延べも簡単にはできず、やむなく中止した。

その後12月になってやっと登頂の機会を得た。今回も二人のガイドを頼むことになる。何しろ三人以上でないと入山が許可されないので仕方がない。

台北空港に到着すると、待っていた車で台中に走り、入山許可を受ける。その日は台中市泊まりとなる。翌日は早朝に宿を出発して台北市方向に戻り、竹東市でハイウェイを降りる。町の中で給油と朝食を済ませると、国道122号線を東上する。この道は幅も狭く、曲がりくねりながら登るので、速く走れない。やがて国道も終わりを告げる頃、警察の検問所となる。ゲートがあり、ここは一般の台湾人でも許可が必要である。登山する者は甲種で、事前に台中市で買うが、観光客はここで乙種を取ることになる。

道は大鼻林道と名を変え、一山乗り越して反対側に走る。峠を出ると「銀霧」に到着する。ここは高度2000㍍の山腹で、下界より涼しく観光客がたくさんやってくる。ここには宿舎やトイレ・公衆電話・営林署の事務所等があり、大覇尖山や雪山連峰の展望台になっている。ひと休みして大覇尖山の登山口に向かって地道の林道をくだって行く。まだ20㌔余り、1時間は走らねばならない。登山口は馬遠拉渓流にくだった所にある。

大覇尖山

竹東市から車で4時間、やっと登山口に到着した。古びたトイレ舎が一つあるだけで林道は沢で終わる。見上げると上空に吊り橋が架かっていた。二、三台の車が置かれ、川原で炊煙が上がる。二、三人の男がたむろしているが、キャンプ客か山仕事の人らしい。

車を片隅に置いて登山の準備をする。道は沢の堰堤を渡り、対岸の吊り橋の橋脚の所から始まる。増水している時は上の吊り橋を利用することになる。きょうの宿泊予定の九九山荘までは800㍍程の登りが待っている。

大覇尖山付近略図

道は最初から急登の連続で、森のなかをジグザグに登って行く。周囲は五葉松やリンゴの林で、所どころに樹名板が付けられている。丸太のベンチもあり整備された登りやすい道である。一汗かいて尾根上に出ると、林から抜けて明るくなる。さらに尾根を廻り込むと九九山荘到着である。

標高2693㍍と書かれた門柱の奥に、円形の宿舎が左右に並ぶ。その隣に管理人室・食堂・炊事場等、さらにトイレ舎と続く。これらは第一期の建物で、少し上の台地に新しい長屋の建物が二棟建っていた。管理人常駐とのことだが、きょうは無人であった。

新しい建物は中央に土間を挟んで両側に二段の床が作られ、驚いたことに真新しい布団が折り目正しくずらりと置かれていた。

この九九山荘は台湾一の山小屋で、3500人収容の設備を持っているそうである。たしかに以前泊まったことのある玉山の排雲山荘や雪山の山小屋より新しくて大きい。何より布団のきれいなのがすばらしい。登山客の姿もなく静寂を保っていた。炊事場には流水があふれ、板張りのトイレも自然流水の水洗である。

夕刻四人のグループが到着したが、本日はそれだけであった。晴れ渡った夜空に星が瞬いていたが、半月のため多くは望めない。

翌朝は雲ひとつない青空が広がる。思った程寒くはない。尾根伝いの道をゆっくりと登って行く。加利山の稜線に登り着くと展望が開ける。西の平野は一面の雲海に埋まっていた。同宿の人たちはカメラマンらしく、明けゆく山に大きなカメラを据えていた。

大覇尖山までは8㌔足らずの距離で、1㌔毎に距離標が立っている。稜線上は一面小ナナのなかのおだやかな道が続き、展望を楽しみながらのハイキングといったところ。3050㍍の峰を廻り込むと突然大覇尖山が姿を現した。右に続く稜線に小覇尖山、背後には雪山山系が広がる。今まで写真でしか見たことのない風景が眼前いっぱいに展開し、その荒々し

九九山荘

いぎにしばし固唾を呑んで立ち尽くした。

道は少しくだって伊澤山の登りにかかる。目の前には絶えず大覇尖山・小覇尖山の荒涼たる姿を眺めながらの歩行で、すばらしいの一語に尽きる。伊澤山は山腹を捲いて東側からわずかの登りで山頂に立つ。3等三角点があり、台湾百岳の一つで、大覇尖山・小覇尖山の最高の展望台である。中覇尖山に足を進める。プレハブの避難小屋が現れ、「積雪時は是より先通行禁止」の標板が立っていた。道はこのあたりから稜線の北側を捲くので、所どころ残雪が凍りついており、慎重に歩く。

中覇尖山からはもう大覇尖山は手の届く近さ。その荒々しく直立する岩壁に圧倒され身震いを感じる。遠くは南湖大山から中央尖山が望まれる。今まで南湖大山や雪山から大覇尖山を小さく眺めていたのが、今、おおいかぶさるように眼前に迫るさまは口では言い表せない。ただただ黙って目を見張るばかりであった。

しばし立ち尽くしたのち、その岩峰に向かって歩を進める。一度大きくくだる。中覇尖山と大覇尖山の鞍部は風の通り道で、常時強い風が吹き抜けて危険なので、鉄柵が設置されている。岩壁の下を通過する時も凍りついている所があるので、滑落しないよう注意する。岩壁を通り越した所が小覇尖山の分岐点で、先ず小覇尖山に向かう。やせ尾根を通り小覇尖山の肩の岩場の上に出る。少し平らになった展望が得られる所から、正面に大覇尖山、北には今歩いて来た中覇尖山から伊澤山の緩走路の山々が見える。山上のおだやかな道に比べて深い谷に落ちるすごい岩壁、南には桃山・池有山・品田山・雪山と台湾百岳に頷を並べる雪山山系の山々が連なる。すでに雪山は真っ白く輝いていた。

ゆっくりと昼食をとる。大景観を前に贅沢な時間が過ぎてゆく。カメラのシャッターをいったい何回押しただろうか。

小覇尖山の岩峰の上に立つ。少し足場の悪い所もあるので慎重に登る。頂上は全く尖塔の上の感じで、少しも落ち着けなかった。

大覇尖山の分岐に戻ると今度は岩壁沿いに南側に廻り込む。ここが雪山への縦走路の分岐点で、大覇尖山の頂上への岩壁の登り口でもある。以前はここに鉄梯子が架けられていたのだが、現在は崩壊して簡単な縄梯子や数本のザイルが取り付けられているだけだ。4～5尺の垂直の岩壁が二段に見える。登れないこともなさそうだが、岩場の経験のない私は遠慮することにした。いちおう梯子の無い現在は一般登山者は登れないことになっている。ガイドたちは山頂へと姿を消したが、私はここまでとして引き返した。

下山と言っても小屋までは6㌔。時間はすでに午後2時前。冬の日は短いのであまりゆっくりもしておられない。登る時は気にしていなかったが、中覇尖山・伊澤山・加利山と三つの山を登り返さねばならない。午後の日を浴びた大覇の山々を、雪山を、ふり返りふり返り足を進める。そうして3055㍍地点で大覇尖山に最後の別れを告げた。これ以後は山陰に入るので見ることができない。

大覇尖山と小覇尖山

稜線から1㌔ばかり離れた加利山も台湾百岳に入っているので足をのばす。ここは最も雪山山系に近いので、同宿だったカメラマンたちが落日を待っていた。午後も遅くなると下界から霧が湧き上がってくる。夕日は落ち始めると足が速い。小屋にたどり着いた時には太陽はすでに山陰に姿を隠していた。

翌朝下山にかかる。さすがに下山は速い。登りに3時間余りもかかったのに、くだりは2時間で車の前に降り立った。長い林道を走って飯豊に立つ。きのう登った加利山が前面をおおい、大覇尖山はその稜線にポツンと小さな頭を乳首のように持ち上げていた。

この大覇尖山のコースは、五岳三尖の山の中では最も展望の良いコースで、玉山よりこちらのほうがすばらしい。一山のみを選ぶならこちらのほうがおすすめである。

このコースでは、台湾百岳に入る大覇尖山・小覇尖山・伊澤山・加利山の四山を登ったことになった。

（平成9年12月17～21日歩く）

◇コースタイム◇

第1日目　大阪＝台北＝台中泊

第2日目　台中＝竹東（車・3時間）観霧（車・1時間）馬達拉渓登山口（3時間）九九山荘

第3日目　九九山荘（1時間10分）加利山分岐（1時間10分）伊澤山（1時間40分）中覇尖山（30分）小覇尖山（30分）大覇尖山（2時間30分）加利山（40分）九九山荘

第4日目　九九山荘（2時間）馬達拉渓登山口＝（車・4時間）竹東＝台北

第5日目　台北＝大阪

観光バスなら 確実第一の
太陽観光開発㈱へ!!
・小型（20人・24人）
・中型（28人乗り）
・中2型（45人乗り）
・大型（55人・60人）
いずれもサロンカーからデラックスまで
スキーバスもあります
〒578-0971 東大阪市鴻池本町1-20 オカダビル4F
電話 06(745) 3911・FAX 06(745) 3983
（夜間・電話 06(945) 0816・FAX 06(945) 9044）

沿線ハイキングガイド

近鉄　京阪　阪急　南海　神鉄　山陽電車　叡電・京福
公開ハイク　歩け歩け大会　文学散歩　歴史散歩　その他

近鉄

▽スペシャルイベント「第9回奈良～飛鳥、歴史街道マラソンハイキング」　5月3日(祝)雨天決行（集合）（42㌔コース）近鉄奈良駅7時30分～9時（24㌔コース）近鉄天理駅前9時～10時（コース）「42㌔コース」近鉄奈良駅―北・山の辺の道―石上神宮―山の辺の道―桜井駅―橿原神宮前駅―国営飛鳥歴史公園（ゴール）―飛鳥駅（24㌔コース）天理駅―石上神宮―（24下42㌔コースと同じ）、参加自由・参加費500円、上本町事業06（775）3566

▽万歩ハイキング「柳生街道を歩く、滝坂の道」　5月15日(祝)雨天中止（集合）近鉄奈良駅東改札前10時（コース）近鉄奈良駅（バス）忍辱山―円成寺―流敎の道―近鉄奈良駅（約12㌔）参加自由・無料（バス代・拝観料は別途）、上本町事業06（775）3566

▽あみま倶楽部親睦・会員募集ハイク「古大野から飯降の石仏」　5月17日(日)雨天中止（集合）室生口大野駅前10時～10時40分（コース）室生口大野駅―古大野―六体地蔵―向淵―飯降石仏―山部家人墓―十八神社―榛原駅（約15㌔）参加自由・無料、上本町事業06（775）3566・天王寺事業06（624）0382～3

▽近鉄ファミリーハイキング「てっせんの名所を訪ねて、室生寺・滝谷コース」　5月30日(日)雨天中止（集合）室生口大野駅前10時20分～10時50分（コース）室生口大野駅（バス）室生寺前―室生寺―三輪神社―滝谷花しょうぶ園―三本松駅（約10㌔）参加自由・無料（バス代・拝観料等は別途）名古屋事業052（582）3325

▽金剛生駒紀泉120㌔縦走「第3回二上山から葛城山へ」　5月31日(日)雨天中止（6月21日(日)または6月28日(日)に延期）（集合）二上神社口駅前（二上山ふるさと公園）9時～10時（コース）二上山ふるさと公園―佐坐寺―二上山―竹内峠―平石峠―岩橋峠―寺駅迂―葛城山ビジターセンター（約13㌔）参加自由・無料（バス代・ロープウェイ代は別途）、天王寺事業06（624）0382～3

▽読売ふれあいハイキング「一休寺から甘南備山へ」　6月13日(土)雨天中止（集合）新田辺駅前10時（コース）新田辺駅前―大住川―遍照寺―一休寺―甘南備山―田辺公園―新田辺駅（約11㌔）参加自由・無料（拝観料は別途）、上本町事業06（775）3566

▽読売ふれあいハイキング「奈良大和路の峠を行く第10回、佐保川湖から入野峠」　6月20日(日)雨天中止（集合）大和二市駅前9時50分（コース）大和二市駅―法華寺―刺―みかえり橋―入道橋―入野峠―法華寺内（バス）大和上市駅（約14㌔）参加自由・無料（バス代は別途）、天王寺事業06（624）0382～3

京阪・叡電

▽北山ウイークデーハイキング「初緑の鞍馬～天ヶ岳コース」　5月13日(水)雨天中止（集合）叡電鞍馬駅9時～10時（コース）鞍馬駅―薬王坂―三角点―三叉岳―天ヶ岳―百丈峠―扶桑橋―鞍馬駅（約12㌔）一般向）参加自由・無料、叡山電鉄運輸課075（702）3111

▽スポニチファミリーハイク「北山・ナッチョ（天ヶ森）5ミタニ峠コース」　5月17日(日)雨天中止（集合）叡電鞍馬駅9時～10時（コース）鞍馬駅（バス）花背峠―大原呂井町―ナッチョ―ミタニ峠―三谷林道―三谷口（バス）八瀬遊園駅・出町柳駅（約10㌔一般向）参加自由・無料（バス代は別途）、京阪文化・レジャー企画部06（944）2525

▽比良運峰アタック「御殿山～武奈ヶ岳コース」　5月24日(日)雨天中止（集合）叡電八瀬遊園駅9時～10時（コース）八瀬遊園駅（バス）坊村―御殿山―ワサビ峠―西南稜―武奈ヶ岳―イブルキのコバ―八雲ヶ原―山上駅（ロープウェイ・リフト）山麓駅（バス）比良駅（約6・5㌔縦断）参加自由・参加費大人2300円小人1150円（バス代・ロープウェイ・リフト代含）、京阪文化・レジャー企画部06（944）2525

▽スポニチファミリーハイク「北山・貴船～二ノ瀬ユリコース」　6月7日(日)雨天中止（集合）叡電貴船口駅9時～10時（コース）貴船口駅―奥宮―滝谷峠―見晴らし台―二ノ瀬ユリ―経覚峠―二ノ瀬駅（約1㌔一般向）、参加自由・無料、叡山電鉄運輸課075（702）8111

▽比良運峰アタック「岩阿沙利山～音山コース」　6月21日(日)雨天中止（集合）JR近江高島駅9時～10時（コース）近江高島駅（バス）庵ヶ瀬道―鵜川越―岩阿沙利山―八王寺―長尾峠―岳山―大炊神社―近江高島駅（約9㌔縦断）参加自由・参加費大人500円小人250円（バス代含）、京阪文化・レジャー企画部06（944）2525

南海

▽駅長推薦・南海沿線ぶらりあるき第5回「歴史と文化を求めて堺市内を歩く」　5月2日(日)雨天中止（5月9日(日)に延期）（集合）堺駅10時（コース）堺駅―大浜社―陸軍記念碑―堺灯台―大浜公園―開口神社―宮原神社―妙国寺―西本願寺堺別院―ザビエル公園―堺駅（約6㌔）、参加自由・無料、南海総合サービスセンター06（643）1005

▽かんさい遠足・五月の鉄道史ウォーク―街道編―「土佐日記・潮風の道」　5月10日(日)雨天中止（5月17日(日)に延期）（集合）みさき公園駅9時30分～11時（コース）みさき公園駅―万葉歌碑―長松自然海岸―船守神社―宇土塚古墳―あたご山―土佐日記碑―淡輪ヨットハーバー―府立青少年海洋センター―三谷林道―三谷口（バス）八瀬遊園駅・出町柳駅（約10㌔一般向）参加自由・無料（バス代は別途）、京阪文化・レジャー企画部06（944）2525

▽比良運峰アタック「御殿山～武奈ヶ岳コース」　5月24日(日)雨天中止（集合）叡電八瀬遊園駅9時～10時（コース）八瀬遊園駅（バス）坊村―御殿山―ワサビ峠―西南稜―武奈ヶ岳―イブルキのコバ―八雲ヶ原―山上駅（ロープウェイ・リフト）山麓駅（バス）比良駅（約6・5㌔縦断）参加自由・参加費大人2300円小人1150円（バス代・ロープウェイ・リフト代含）、京阪文化・レジャー企画部06（944）2525

▽スポニチファミリーハイク「北山・貴船～二ノ瀬ユリコース」　6月7日(日)雨天中止（集合）叡電貴船口駅9時～10時（コース）貴船口駅―奥宮―滝谷峠―見晴らし台―二ノ瀬ユリ―経覚峠―二ノ瀬駅（約1㌔一般向）、参加自由・無料、叡山電鉄運輸課075（702）8111

▽比良運峰アタック「岩阿沙利山～音山コース」　6月21日(日)雨天中止（集合）JR近江高島駅9時～10時（コース）近江高島駅（バス）庵ヶ瀬道―鵜川越―岩阿沙利山―八王寺―長尾峠―岳山―大炊神社―近江高島駅（約9㌔縦断）参加自由・参加費大人500円小人250円（バス代含）、京阪文化・レジャー企画部06（944）2525

▽駅長推薦・南海沿線ぶらりあるき第5回「歴史と文化を求めて堺市内を歩く」　5月2日(日)雨天中止（5月9日(日)に延期）（集合）堺駅10時（コース）堺駅―大浜公園―陸軍記念碑―堺灯台―大浜公園―開口神社―宮原神社―妙国寺―西本願寺堺別院―ザビエル公園―堺駅（約6㌔）、参加自由・無料、南海総合サービスセンター06（643）1005

▽かんさい遠足・五月の鉄道史ウォーク―街道編―「土佐日記・潮風の道」　5月10日(日)雨天中止（5月17日(日)に延期）（集合）みさき公園駅9時30分～11時（コース）みさき公園駅―万葉歌碑―長松自然海岸―船守神社―宇土塚古墳―あたご山―土佐日記碑―淡輪ヨットハーバー―府立青少年海洋センターせんなん里海公園（解散）―加茂神社―神作駅（約10㌔）参加自由・無料、南海総合サービスセンター06（643）1005

▽読売ヘルシーハイク第2回「新緑の高野山ハイキング」　5月15日(日)雨天中止（集合）高野山駅10時（コース）高野山駅（バス）奥の院―子継峠―根来山―黒河峠―歴尼山―三本杉―転軸山―奥の院（バス）高野山駅（約8㌔）参加自由・無料（バス代は別途）南海総合サービスセンター06（643）1005

▽金剛生駒紀泉120㌔縦走「第4回岩湯山から横尾山へ」　6月14日(日)雨天中止（6月21日(日)または6月28日(日)に延期）（集合）紀見峠駅9時～10時（コース）紀見峠駅―根古峠―岩湯山―滝畑ダム―坂尾山地福寺―横尾山バス停（バス）和泉中兵駅（約18㌔）参加自由・無料（バス代は別途）、南海総合サービスセンター06（643）1005

山陽電車

▽山陽ハイキング「海峡まつり協賛ハイク」　5月4日(祝)雨天中止（集合）舞子公園駅下車すぐ舞子公園10時（コース）舞子公園―舞子六神社―きつね塚子塚―崇宮出世電王神社―環境センター前―朝霧駅―大蔵谷駅―大蔵谷海岸（イベント会場）（約5㌔家族向）参加自由・無料、須磨浦遊園ハイキング係075（731）2520

▽山陽ハイキング「鳥原貯水池ハイク」　5月17日(日)雨天中止（集合）西代駅山陽電車本社前10時（コース）本社前―高取山―長者町―峠越―鳥原貯水池―山麓リボンの道―平野―高倉畑―戸駅（約12㌔家族向）参加自由・無料、須磨浦遊園ハイキング係075（731）2520

▽山陽ハイキング「自然観察の森ハイク」　5月31日(日)雨天中止（集合）姫路川駅下車夢前川河川敷10時（コース）河川敷―サイクルロード―青山―板山貯水池―自然観察の森―青山（バス）姫路駅（約10㌔家族向）参加自由・無料（バス代は別途）、須磨浦遊園ハイキング係075（731）2520

▽山陽ハイキング「大中遺跡・鶴林寺を訪ねるハイク」　6月14日(日)雨天中止（集合）播磨町駅前向ケ池公園10時（コース）播磨町駅

—大中遠郷—鈴林寺—尾上の松駅（約10㌔家族向）参加自由・無料、須磨浦遊園ハイキング係078（731）2522

三岐鉄道

▽鈴鹿の山を歩こう「花の御池岳」5月3日回／5月6日回雨天中止（集合）近鉄富田駅三岐線ホーム8時3日は8時／8日は9時（コース）富田駅（電車）西藤駅駅（バス）御池坂—鈴北岳—鈴掛峠（バス）西藤駅駅（電車）富田駅（約11㌔一般向）参加予約申込み制・参加費200円（バス代1000円別途）、三岐鉄道運輸課観光係0593（64）2141

▽鈴鹿の山を歩こう「新緑の竜ヶ岳」5月24日回雨天中止（集合）近鉄富田駅三岐線ホーム8時（コース）富田駅（電車）大安駅（バス）宇賀渓キャンプ村—五階滝—ヨコ谷出合—中道—竜ヶ岳—ホタガ谷—宇賀渓（バス）大安駅（電車）富田駅（約12㌔健脚向）参加自由・参加費200円（バス代別途）、三岐鉄道運輸課観光係0593（64）2141

▽鈴鹿を歩こう「緑の釈迦ヶ岳」6月14日回雨天中止（集合）近鉄富田駅三岐線ホーム8時（コース）富田駅（電車）大安駅（バス）湯船ヒュッテ—尾崎谷—松尾尾根頭—釈迦ヶ岳—初音峰—湯船ヒュッテ（バス）大安駅（電車）富田駅（約11㌔一般向）参加予約申込み制・参加費200円（バス代100円別途）、三岐鉄道運輸課観光係0593（64）2141

▽鈴鹿を歩こう「宇賀渓砂山」6月21日回雨天中止（集合）近鉄富田駅三岐線ホーム9時（コース）富田駅（電車）大安駅（バス）宇賀渓キャンプ村—山腹道—五階滝—長尾滝—砂山道—砂山—宇賀渓キャンプ村（バス）大安駅（電車）富田駅（約8㌔初心者向）参加自由・参加費200円（バス代は別途）、三岐鉄道運輸課観光係0593（64）2141

神戸電鉄

▽神鉄ハイキング「トエンティクロスと森林植物園ハイク」5月3日雨天中止（1日順に延期）（集合）新開地新神戸駅9時30分～10時（コース）新神戸駅—布引貯水池—市ヶ原—トエンティクロス—森林植物園—山田道—谷上駅（約11㌔一般向）参加自由・無料、神鉄観光事業部078（521）0321

▽神鉄ハイキング「帝釈山と稚児墓山ハイク」5月24日回雨天中止（集合）藍那駅10時10分（コース）藍那駅—藍那古道—帝釈山—岩谷峰—稚児墓山—射山り—真谷駅（約15㌔健脚向）参加自由・無料、神鉄観光事業部078（521）0321

▽神鉄ハイキング「鳴川谷支流と黒甲越ハイク」6月14日回雨天中止（集合）五社駅下車すぐ中尾神社9時20分（コース）中尾神社—八多—鳴川谷支流—黒甲越—花山駅（約15㌔健脚向）参加自由・無料、神鉄観光事業部078（521）0321

□これ以外にも多数の催しがあります。各社の広報も見て下さい。

○新ハイ関西サービスチェーン

名峰・二岐温泉 小白森—大白森—甲子・甲子への縦走路 ■どこでも最寄り駅送迎可（到着わ）■大温泉と内湯

福島・二岐温泉 日観連 大和館

〒333—0621 福島県岩手郡西根町 電 0246—84—2021 F 0246—84—2706

岩手県温泉 **嘉田屋**

〒377—1614 群馬県吾妻郡嬬恋村新鹿沢温泉 電 0279—98—0111

富士登山・富士五湖 東海道自然歩道 ◇石割山・ハリモミ純林

三国山の麓 ペンション コットンテール

〒401—0502 山梨県南都留郡山中湖村平野 電 0555—25—1851

太平洋岸中央から約1時間分岐点 個室・冷暖房 ■駅下車タクシー10分 JR中央線塩山駅下車徒歩2時間 バス20分登山口下車徒歩2時間

山小屋 福ちゃん荘

〒409—1302 山梨県塩山市上萩原2832 電（自宅）0553—33—4639（山小屋）0553—14—7215

せせらぎ

顕宇・小林玻璃三

8月12日、赤薬木で山山頂にて
山の上に立ったら
山の向こうは山ばかり
山がやまほどあった
山が文句あっかぁ！と言っていた
9月5日、荒山岳—山途中で……
熊に会った　久しぶりだ
にらみ合いになったにらめっこだ
これはヤバイ笑ったら食けよで
はすまなくなった
ヤツは勝負に出るのか
一瞬早くオレが勝負に出た
「おんどれゃー!!　おのれのキンタマ引きちぎって、鼻梁でキュッキュッと踏みつぶして犬に喰わしてしまうぞ!!」
両手をふりかざし、飛びはねて
大きな声で叫んだ
するとヤツは茂みのなかに入っていった。
（評文明を待つ人類は強い。
言論の自由もまた正しい。）

登山口に降り立ってみると
「熊の住む山の自然を守ろう」
と書いた地元青年団の看板を目にし、先ほどは大変失礼なことを申し上げた、と気がつき、顔が熱くなった。

12月23日、観音峰山頂手前カヤトにて
山って　なんだ!!　と叫んだら
山だぁー　文句でもあんのかぁ！
と向かいの和村ヶ岳が怒鳴り返してきた。　（山形　明）

『山行短歌』
12月26日　湖東雪野山
ここ妹背に現世の頼田王あれば
われに悟りみなく恋慕なえよ
1月2日　宇治天ヶ瀬
わが詩林間と共に風流湖を越え
帰り来ぬ青春呼べば高駆ぐ
1月11日　越州高泊位山
冬は駆足で去れ岩場を跳ねて
ハミングすれば雨も乙なもの
1月21日　台高高見山
急に思い立ち高見の樹氷見に
ウォーターブルー雪路を歩る
1月26日　大和葛城山
雪のち晴れ木々より雫降り来て
陽に映える詩プリズムを放つ
1月27日　六甲荒地山
岩梯子登り甘美な疲労をもらえ
僕だけの眺め海と空と街
2月3日　台高三峰山
友と二人三脚でトレースをたどり
イメージの霧氷腕に結びつけ
2月6日　大分鶴見岳
二十歳の子と船上で肩ならべ見た
白き乙女峰きらきら描れる
2月6日　大分由布岳
雪荒れて雪のつぶてが紗影を撃つ
頂上あきらめてコルに引き返す
2月23日　六甲長峰山
夜明けの山脈へ海から炭酸を
凍る雑高岡に冬の調べ開く
（木村　太郎）

尾瀬、平ケ岳登山と釣りの山小屋
越後三山只見国定公園内
清四郎小屋
ほんものの手打そばと薬店は
樹　海
〒949—8601 新潟県北魚沼郡湯之谷村大字藤倉 電 02580—8—2526
（冬期休業）0257—9—2—5026

浮をたっぷり流せる温泉と
笹ケ峰牛のシャブシャブ
日本海の鮮魚と山の幸
ハイカーの宿
ナガサキロッジ
〒949—2100 新潟県中頸城郡妙高高原町池の平温泉 電 0255—86—2261

高山の花、温泉の花
妙高山と火打山
百名山を二つ登れる山小屋
黒沢池ヒュッテ
〒949—2100 新潟県中頸城郡妙高高原町池の平温泉 ナガサキロッジ 電 0255—86—2261

海から昇る朝日と海に沈む夕日を眺め、山と海の両方が楽しめる。大佐渡縦走の起点。星と夜景に酔いながら時いはばずも
国民宿舎 大佐渡ロッジ
1泊2食付き 6800円
〒952—1603 新潟県佐渡市相川 電 0259—22—2—4570

私の山行の楽しみの一つは植物と出会うことです。よく歩いた局ヶ岳の山域では、鬼々椿二種、岩鏡・白糸草・大文字草の群落や、片栗・金蘭・雪鶯草・土通草・蟹人参等に出会うことができました。

昨年春～夏の印象的な出会いを、会員の皆様にご報告いたします。

4・20矢筈山／山歌・明納草・鳥形半鐘草・二葉葵・苣三種の花。花筏・山五加、瀧沢で薬飯を作る。

4・26御池岳／猫の目草三種、片栗・小貝母・二輪草・菊咲一花・黄花甘草・深山片喰等の花々。

4・28猪ノ鼻方岳／本石楠花・岩鏡。わずかに咲き残る岩団扇。

5・5藤原岳／一輪草・延齢草・片栗・山吹草・鈴蘭等の花々。

5・10鷲峰楽山／石楠花・雪笹・紅煙台・白八塩の花。孔雀羊歯。

5・18鳥居／姫薔薇苺を摘んで、ジャムを作る。他に三種の木苺。

5・25南赤山／水木・山法師の花。深山樝の青い実。椋の落果。

6・1高見山／雞栖・水木の花。登路以外で山法師・小葉陽花も。

6・8経ヶ峰／八十種以上を数えた中でも山頂近辺の谷空木の花。

6・14雁山／金袋・大天蓼・笹百合の花、接竹木の実。蜂も多種。

（藪本　伸人）

天気予報では1月3日は文句なしの晴れの予報、去年からまだ雪は降っていないし、しかも4日からは崩れるとのこと。条件が完全に揃った。前から狙っていた明神平・菊岳の完全踏破のチャンスがやって来た。

明神谷を過ぎるあたりから徐々に雪道に変わり、天候も北の方角からガスが急に吹き上げて悪くなってきた。しかし明神平到着直前の本々には見事な樹氷が見られ、カメラを持ってこなかったことがひどく悔やまれた。

10時40分、明神平に到着したが、楽しみにしていた菊岳方面の景色はガスで全然見えない。11時まで粘るが回復の気配がまったくないのでやむなく菊岳へスタートする。

三ッ塚分岐から前山に差しかかった所で、皮肉なもので急に下の方からガスが消え、アッという間に視界が広がった。木々の間から晴れ渡った明神平方面を未練たらしく時々ふり返りながら、低温でサラサラと鵝の羽毛のように結晶した雪道を、ひとり黙々と菊岳をめざした。

菊岳には11時55分に到着。頂上は非常に狭い所で、それぞれ単独行の三人がすでに休憩中だった。

菊岳山頂より南方はるか遠くに大普賢岳・和佐又山・大台ヶ原の峰々が、逆光のなかに白く光って神いて見えた。北の国見山方面は下から吹き上げるガスの切れ間に、影のよい高見山が時おり顔を覗かせている。昼食後のほんの一瞬、南からの太陽を背にした足下のガスのなかに、小さな半円の虹がはっきり浮かび上がって見えた。

12時30分くだりにかかった。途中大鏡池まではやせ尾根の変化のあるくだりを楽しんだが、それからは暗く単調な造成林のなかを、ひとりさびしく大又へおりた。

休憩昼食入浴も歓迎
10名以上マイクロバスで送迎
箱根仙石原温泉
福　島　館
〒250－0631 神奈川県足柄下郡箱根町仙石原1-39
電 0460－4－9041

「但馬の踊り子」の情緒　レトロな宿
眼下に河津川の渓流
湯ヶ野温泉　湯ヶ野荘
ご宴会の方に当地（天城山）ハイキングコース案内致します
〒413－0507
静岡県賀茂郡河津町湯ヶ野93
電 0558－35－7225

四季彩りなす乗鞍高原のハイク
上高地・乗鞍岳へ　冬はスキー
けやき通りと味の宿・日観連
温泉旅館　けやき山荘
〒390－1500
長野県松本市新村乗鞍高原
電 0263－93－2555

さわやかな信州
露天風呂　山吹の湯
湯田中温泉（穂波）
日　野　屋　旅　館
〒381－0400 長野県下高井郡山ノ内町湯田中温泉秘湯
電 0269－33－3578

念願の明神平・菊岳フルコースの完全踏破ができて大満足の正月山行だった。

今年は春から調子がいいぞ。

（矢野　晃）

2月8日、朝の箱根大涌谷駐車場は、昨夜からの降雪で除雪中であった。10時30分、やっと駐車を許される。

神山へは新雪のラッセルとなり、吹き溜まりは膝上まであった。慎重にルートを選んで少しばかり時間がかかったが、だれもいない山頂へ。一等点は雪の下、山頂一角の展望台より外輪山を眺めて昼食。

駒ヶ岳はあきらめて、もと来たルートを楽しみながらくだる。ロープウェイは運休していた。

翌日は仙石から矢倉沢峠に出て富士を背に金時山を、明神ガ岳から明星ガ岳まで歩いて宮城野へくだる。

天候に恵まれ、丹沢山塊・大山から相模湾までの眺めに、陽光うららか春近しを感じた山旅だった。

（粟津忠二・典子）

2月11日、五名で今年初めて御池岳に入りましたが、新雪が80～100㎝もあって登りはてこずりました。

鈴鹿の山々からも富士山が見えると言われていますが、実際に見たという話は、一昨年11月の新ハイキング関西での山行のおり、雨乞岳から見えたという以外は聞きません。

きょうは快晴微風で、空も澄んで東の方の見晴らしが過去にないほどの良い条件でしたので、南アルプスの全景が初めて確認できました。

双眼鏡を持参して来た人がいたので、南アルプスの山の名を世で確認していると、Vさんが富士山が見えると言われるので、小生も双眼鏡を借りて覗いてみました。

確かに言われる方角に、富士山の頂上部らしい山が南アルプスの向こうに見えたので、方角を磁石で確認しました。真東よりもわずか北です。この方角の高い山は富士山以外にはないはずです。

家に戻って地図で再確認してみました。間違いなく富士山でした。御池岳からほぼ東に210㎞、程離れた富士山を、初めて見ることができたのです。

新雪のラッセルはきつかったのですが、来た甲斐のある、思い出深い山行でした。

（山田　明男）

2月中旬、愛知県豊田市と瀬戸市の境にある猿投山（629㍍）で地元自然観察会による山行が催され、初めて登りました。

この猿投山は私の故郷の山で、子どもの頃から朝夕遊び暮れてきたのですが、就職して故郷を離れたのち、四十歳から山を歩き始めたという経緯から、かつて一度も登ったことがありませんでした。

一時はみぞれ模様の雲ゆきでしたが、訪けた地点からは、三河湾の島や知多半島と渥美半島の先端も同時に眺望できました。

巣箱で休息中のムササビのまじろぎもしない表情を眺めたり、冬の照葉樹林で赤い実があざやかな樹木がモチノキ科のクマミズキであると知ったり、ブナ科カシ類の気候帯による分布につ

標高2000m級上の温泉
湯の丸高峰自然休養林
ハイキングにXCスキー
高　峰　温　泉
〒384－0000
長野県小諸市高峰高原
電 0267－25－2000

ハイキングに／スキーに／
志賀高原　石の湯ロッジ
バス　熊の湯経平 床十車
電 0269－34－2421
東京本社・東京都新宿区新宿3－20－5（新光第2ビル）
電 03－3344－0211
例スポーツナービス

塩の道　千国街道
百八十七体「観音巡礼」
ホテル
白馬ブランシェ
〒399－9202
長野県北安曇郡白馬村いわたけ
電 0261－72－4452

八ヶ岳南北縦走の中心地
59年秋新館増築完成全館四室
木の香ぷんぷん新鮮野菜生水豊富
オーレン小屋
1泊2食付き　6000円
4月末～11月末開設
〒391－0213
茅野市泰平27－20　小平勇夫
電 0266－72－1279

いての今までの知識に誤解があったことが分かったりと、自分自身の世界がまた広がったような充実感に満ち、里山の自然の楽しさを再確認しました。

（鷲見　守康）

やっと、孫兄の来姫があり、世界文化遺産に指定されている熊野域を案内し、立派だと褒めていただき、気をよくしている。

その先輩と知り合ったのは“ひょんな”ことからで、四年前、夏山シーズンの終わった木曽駒ヶ岳の山頂直下でカメラを拾ってからである。

その時、頭をよぎったのは、どのようにして持ち主を捜すかであった。幸い、カメラの裏に電話番号が記されていたので、帰宅し、すぐ連絡をいれた。

カメラはもちろんだが、フィルムが無事だったのを大変喜んでいただき、それ以来の付き合いである。

その後、我が持ち物にも必ず連絡先を記している。そして人との出会いの妙を改めてこころし、大切にしている。

今回のお返しに、長野への招待を受け、当日を楽しみにしている。

（須磨岡　桃）

二月山野行報告

1日　『やまと地形図の会』例会。Ⅲ和佐又山雪中登山案内。25名。

2日　月ヶ瀬梅渓下見。

5日　伏見公民館『大和の峠を歩く⑩』案内。和坂峠。参加28名。

6日　Ⅰ金剛山、天ヶ滝新道下見。

8日　『駱のつどい』例会。北宇智小GPSと1金剛山。23名。

10日　伏見公民館『霧氷ツアー』天ヶ瀬と金剛山。参加11名。

11日　Ⅲ新住（「吉野山」）再訪。

16日　『大和漫歩会』案内。松明の道③　田原～二月堂。47名。

18日　『生駒さくら会』案内。山の辺の道　三輪～巻向。11名。

19日　伏見公民館『平成京への道散策』案内。暗峠奈良街道。33名。

26日　『峠一番』案内。檜木峠～子供の森～迫分海林。25名。

27日　Ⅲ守道（「古市場」）再訪

（上田　伸弘）

2月下旬、本誌35号で柴田電器さんが紹介された「長者屋敷越」を歩いた。

狛の集落で、どこからか甘い香りが漂ってきた。見上げると白梅が満開だった。今年は早い。

棚田の奥に山を背にした小さな集落があり、大和の原風景かと立ち止まる。

杉林の中の岳山は静寂そのもの。やがて長者屋敷越の祠に達した。

祠から下山しようとしたとき、思わず足を止めた。なんと、体長1尺ほどの一羽のヤマドリが、忙しそうにエサをついばんでいるではないか。黒褐色の節目のある長い尾の美しさに目を見張った。

夢中でシャッターを切りながら近づいたが、警戒心が全くない。間もなく、よちよちとした足どりでやぶのなかへ消えていった。ヤマドリを初めて見た幸運を喜び合った。

きめ細かいガイドのお陰で、くだりの迷路にも足どりは軽かった。

（北岳　佐久治）

北八ヶ岳の登山基地、冬はスキー
JR茅野駅・北八ヶ岳登山口まで
送迎します
料理旅館
プチホテル　カナール
〒391－0301
茅野市北山蓼科高原笹丸平55
13の1
電　0266－67－2258

日本唯一の女人禁制の山「大峯山」（行者山）の登山口
熊野川ヶ岳女人コースもあり
温泉・名水の里
旅館　紀の国屋荘八
1泊2食付　7,000円から
〒658－0431
奈良県吉野郡天川村洞川
電　07477－4－0309

九州の屋久島・日本百名山
宮之浦岳に一番近い宿
屋久島安房登山口
屋久島グリーンホテル
〒891－4311
鹿児島県熊毛郡屋久町安房
電　09974－6－3021

御在所登山に
愛知川沢谷沢歩きに
山好き仲間の集う宿
朝明渓谷
山小屋　朝明荘屋
〒510－1125
三重県三重郡菰野町千草
電　0593－93－1789

山行計画
（5・6月）
新ハイキングクラブ関西

このページの山行計画には、「会員に限る」と特記してあるほかは会員外の方でも参加できます。一人ずつ往復ハガキに記入例によって必ず出発の7日前までに到着するように申込み先に申し込んでください。電話・FAXでの申し込みはお断りします。「費用」のほかに参加名簿代その他の資料代実費をいただくことがあります。

山行申し込み後参加できなくなった場合はすぐ係に連絡してください。

体調の悪い方、幼児と飛び入りはお断りします。

例会の参加者全員に傷害保険がかけられています。出発点等の既、係に保険料日額50円と救援対策費日額50円合計100円（夜行日帰りの場合は2日になり200円）を支出していただきます。

傷害保険特約内容は次の通りです。（安田火災海上保険会社と契約）

死亡・後遺障害保険金額	1000万円
入院保険金　日額	5000円
通院保険金　日額	2500円

保険の対象は集合時から解散時まで。事故があった場合は解散までに係に申し出てください。この保険に該当しないものは次の通りです。①ピッケル・6本爪以上のアイゼン・ザイル・ハンマー・ワカンを持参すること表明した山行　②スキー使用の山行　③沢・岩・氷雪登はんを目的とした山行　④宿泊所内の事故　⑤疾病の場合（詳細は係まで）

（記入例）

（往復ハガキを使用）

山行き申込み書

山行名（正確に記入すること）

期日

住所 〒

氏名

会員番号
（会員でない方は会員外と記入）

電話番号

生年月日

緊急時の連絡先　TEL
（山行中の連絡先を記入）

返信ハガキの宛名欄にご自分の住所氏名と「様」を記入してください。

美濃・妙法ヶ岳　（一般向き）

期日　5月2日㈯　日帰り

集合　JR岐阜駅改札口9時

コース　岐阜駅（電車）谷汲駅―華厳寺本堂―奥の院―妙法ヶ岳―横蔵寺―谷汲駅（電車）岐阜駅（18時15分頃解散）

費用　約2000円（岐阜駅から）

地図　2万5千＝谷汲

係　◎小出良春

申込み　〒448－0002
刈谷市一里山町一里山59の3　小出まで

谷汲山華厳寺は西国33番観音霊場で、ここから西界山横蔵寺を結ぶ東海自然歩道の山歩きです。

雨天中止

越前の山々
赤兎山・大長山・取立山
（中級向き）

期日　5月3日㈰～5日㈫
2泊3日

集合　〈3日〉勝山市の小原林道終点駐車場午前11時30分

コース　〈3日〉小原林道終点―小原峠―大舟山分岐―赤

山行例会の実施について

山行例会は保険を掛けたり、登山届けを提出しますので、実施日の7日前までに上記記入例の通り、必ず往復ハガキで申し込んでください。人数により前もって、バスなどをチャーターする必要もあります。また山でほいかなる事態が発生するかも。緊急連絡先など、記載すべき事項はもれなくご記入ください。

申し込みの返信案内は細目が決まり次第、山行日の10日前頃にします。早くから申し込まれた方はそれまでお待ちください。

定員のある計画は先着順に受け付けます。

記載のグレードは、常日頃山歩きに親しんでおられることを前提にしています。

（初心者向）やさしいコース
（初級向）どなたでも歩けます
（一般向）ハイキングの経験コース
（中級向）かなり経験者のコース
（やや健脚向）（健脚向）は、危険な所があり、キツイ登りや、くだりが長く続くコースと、ご理解ください。

兎山―赤兎平避難小屋（泊）
（4日）赤兎平―赤兎山―大長山―小鼠峠―刈安山―大長山―小鼠峠―小鼠林道終点（車）横倉「あまごの宿」（泊）
（5日）横倉（車）東山いこいの森―取立山林道終点―取立山―ミズバショウ群生地―こつぶり山―滝谷大滝―取立山林道終点（車）勝山温泉センター「水芭蕉」（解散）

装備　シュラフ・マット・コンロ・コッヘル。3日の夜、4日の朝・昼の食料など

費用　約15000円（宿泊代等（交通費及び3日・4日の食料は各自で））

地図　2万5千＝越前勝山市の南・北谷

係　5万＝越前勝山

申込み　◎村田智俊　○安倉正勝　〒610―0121　城陽市寺田大畔10の10　村田まで

定員20名（会員に限る）

＊マイカー―山行

白山を展望する三山に登り、初夏の花と新緑を楽しみましょう。

＊マイカーでない方は、係・村田までお問い合わせください（☎0774（53）2754）。雨天決行

鈴鹿・御仙山（中級向き）

期日　5月4日(祝)　日帰り

集合　JR名古屋駅中央改札口7時30分／JR米原駅西口9時10分

コース　名古屋駅（車）米原駅（タクシー）養鱒場―洋ふき所―峰塚山―霊仙山三角点―経塚山―避難小屋―柏原道―JR柏原駅（解散）

費用　約3000円（名古屋駅から）

地図　昭文社＝「霊仙・伊吹・藤原」

係　◎小出誠春

申込み　〒448―0002　刈谷市一里山町一里山59の3　小出まで

イブキザサを登りつめた三角点からは、琵琶湖と比良山系の展望がすばらしい。申し込みハガキに集合駅を明記ください。雨天中止

ブナの芽吹きを楽しむキャンプ

鈴鹿・御池川、小又谷出合広場（能舞向き）

期日　5月4日(祝)～5日(土)　1泊2日

集合　（4日）御池川、小又谷出合広場9時

コース　（4日）出合広場―藤川谷―サンヤリ―大狗平―出合広場（14時頃到着、テント設営・炊飯など）

（5日）出合広場―ゴロ谷出合―二の尾根―御池岳ボタン岩―ブナ植林平―1泊バック尾根―ゴロ谷出合―出合広場（16時頃解散）

費用　交通費・食料費等各自

地図　5万＝度瀬東部・鈴鹿所山

係　◎青井京治　○木村吉秀

申込み　〒610―0121　城陽市寺田大畔10の10　新ハイキング関西まで

＊マイカー―山行

自然派の仲間にそこへ行けば会える。自分も仲間に混ぜてもらおう。そんな気持ちで計画しました。キャンプ装備で参加ください。雨天決行

三重の山39

鈴鹿・宮指路岳（中級向き）

期日　5月9日(日)　日帰り

集合　菅原神社駐車場9時

コース　菅原神社（車）小峰須渓谷（車）大石橋―東海展望―宮指路岳―小峰須峠―大石橋（車）小峰須（解散）

費用　1500円（交通費各自）

地図　昭文社＝「鈴鹿所・鎌ヶ岳」

係　◎尾鷲英五　○稲垣逸夫

申込み　〒519―0311　鈴鹿市人久保町2065　稲垣まで

＊マイカー―山行（ただし菅原神社へバスで集合の人は申込みハガキに「バス」とご記入ください）

シロヤシオが見られるかも…。雨天決行

京都北山歩き67

シャクナゲ尾根から天ヶ岳（一般向き）

期日　5月10日(日)　日帰り

集合　京都地下鉄北大路駅京都バスのりば8時30分

コース　北大路駅（バス）小出石―シャクナゲ尾根―天ヶ岳―聚土坂―叡山電鉄鞍馬駅（車）出町柳駅（解散）

費用　約2000円（京都から）

地図　昭文社＝「京都北山1」

係　◎中西信行

申込み　〒610―0121　城陽市寺田大畔10の10　新ハイキング関西まで

初夏の花、シャクナゲの尾根を登り、天ヶ岳から鞍馬にくだる。小雨決行

鈴鹿を歩く47

ベンケイ・舟石・御所平（健脚向き）

期日　5月10日(日)　日帰り

集合　黒瀬集落広場8時30分

コース　黒瀬―太郎谷林道―ベンケイ―舟石―水無し―御所平―ヨコネ―田村谷林道―黒滝（解散）

費用　交通費各自

地図　昭文社＝「御在所・鎌ヶ岳」

係　◎近野　明　○山本久雄

申込み　〒610―0121　城陽市寺田大畔10の10　新ハイキング関西まで

＊マイカー―山行

展望を楽しみながら、アセビの新緑とミツバツツジが咲き乱れる稜線をのんびり歩く（25号・43ページ参照）。雨天中止

湖北・呉枯ノ峰（一般向き）

期日　5月10日(日)　日帰り

集合　JR北陸線木之本駅9時

コース　木之本駅―三本松―呉枯ノ峰―田上山分岐―菅山寺跡―坂口―木之本駅（解散13時30分頃）

費用　約5000円（大阪から）

地図　2万5千＝竹生島

係　◎村田智俊

申込み　〒610―0121　城陽市寺田大畔10の10　村田まで

1等三角点の呉枯ノ峰を縦走する。急登もあるが、山頂からは琵琶湖が一望できる。小雨決行

京都北山歩き68

クリンソウを訪ねて愛宕山（一般向き）

期日　5月12日(火)　日帰り

集合　清滝バス停10時

コース　清滝―梨ノ木秋道―大杉谷―愛宕山―宮見谷渡流―首無地蔵―神護寺―高雄バス停（解散）

費用　約1000円（京都から）

地図　昭文社＝「京都北山1」

係　◎今西光男

申込み　〒610―0121　城陽市寺田大畔10の10　新ハイキング関西まで

大杉谷を愛宕山に登り、宮見谷の源流をくだって神護寺へたどります。雨天中止

平日木曜ハイク42

比良・武奈ヶ岳から蛇谷ヶ峰（健脚向き）

期日　5月14日(木)　日帰り

集合　JR湖西線比良駅前発8時47分の江若バスに乗車、イン谷口下車

コース　比良駅（バス）イン谷口―ダケ道―八雲ヶ原―武奈ヶ岳―蛇谷ヶ峰―桑野橋（バス）JR堅田駅（解散）

費用　約2000円（バス代）

地図　昭文社＝「比良山系」

係　◎前中　毅　○西上利和　○氷見周二

申込み　〒610―0121　城陽市寺田大畔10の10　新ハイキング関西まで

恒例の武奈ヶ岳シリーズ（3）です。今回は文字どおり何度も山場のあるタフなコース。団体のワンデイハイクとしては行程的に限界でしょうが、チャレンジしてください。雨天中止

地図読み山行28

東海自然歩道を歩く（5回）

鞍馬から金毘羅山（一般向き）（新ハイ関西与都合同）

期日　5月17日(日)　日帰り

集合　叡山電鉄鞍馬駅9時

コース　鞍馬駅―桜土坂―静原―江文峠―金毘羅山―聚楽山―大原バス停（バス）出町柳駅（解散）

費用　約1500円（京都から）

地図　2万5千＝大原

係　昭文社＝「京都北山1」

申込み　◎塚元一彦　○中村　登　〒536―0008　大阪市城東区関目4の14の9の901　塚元まで

定員30名（4月30日まで）

東海自然歩道シリーズパート6です。自然歩道から少し寄り道して金毘羅山に登り、地形図の読み方とコンパスの使い方を勉強しま

す。初心者歓迎。シルバー皿型コンパスと指定の地形図を持参ください。雨天中止

平日ふれあいハイク8
鈴鹿・綿向山（一般向き）
期日　5月19日(水)　日帰り
集合　JR近江八幡駅南口近江バスのりば8時05分
コース　近江八幡駅（バス）北畑口—登山口—水無山—金明水—表参道—登山口—北畑口（バス）近江八幡駅（解散17時30分頃）
費用　約3500円（京都から）
地図　昭文社＝「御在所・鎌ヶ岳」
係
申込み　〒610—0121　城陽市寺田大畔10の10　新ハイキング関西まで
鈴鹿中央部西端にあり、眺望のよい綿向山に登ります。雨天中止

平日水曜ハイク15
六甲・有馬三山（一般向き）
期日　5月20日(水)　日帰り
集合　神鉄有馬温泉駅8時50分
コース　有馬温泉駅—善福寺登り口—高槻山—吹形山—湯槽谷山—槽谷峠—ゴルフ場—油コブシ—上甲ケーブル下（バス）阪急六甲駅（解散17時頃）
費用　約3000円（京都から）
地図　昭文社＝「六甲・摩耶・有馬」
係
申込み　◎湯浅次男　○青木一雄　〒569—1133　高槻市川西町1の18の20　湯浅まで
新緑が映える金剛山麓路のアップダウンをしっかり歩きます。小雨決行

週末ハイク7
湖北・横山岳（中級向き）
期日　5月23日(土)　日帰り
集合　JR北陸線木之本駅9時
コース　木之本駅（バス）杉野農協前—白谷出合—経ヶ滝—五銭ヶ滝—横山岳—鳥越峠—コエチ谷—杉野農協前（バス）長浜駅（解散）
費用　約6000円（大阪から）
地図　2万5千＝美濃川上・近江川合
係
◎狩野東彦
申込み　〒610—0121　城陽市寺田大畔10の10　新ハイキング関西まで
双耳峰の姿が美しい湖北の山を、遅い春の芽吹きを楽しみながら登ります。途中、滝を高巻きすると急登になります。小雨決行

播磨・広峰山から奥須加流（一般向き）
期日　5月24日(日)　日帰り
集合　JR姫路駅北口神姫バスのりば待合所9時30分
コース　姫路駅（バス）鶴居城前—登山口—広峰山—播磨四季彩予定地—池—田川神社—JR仁豊野駅（解散）
費用　約3500円（大阪から）
地図　2万5千＝姫路北部
係
◎須磨岡　相
申込み　〒671—1262　姫路市余部区上余部50の2の11　須磨岡まで
山ツツジ咲く姫路耳羽山地の里山を歩きます。雨天中止

鈴鹿を歩く48
イブネ・鎌子・ダイジョウ（健脚向き）
期日　5月24日(日)　日帰り
集合　藤切谷旧林道入口8時30分
コース　旧林道入口—桜地蔵—アケビダン—ダイジョウ—佐目小谷源流—鎌子—イブネ—佐目峠—アゲンギョ—西尾根—藤切谷—旧林道入口（解散）
費用　交通費各自
地図　昭文社＝「御在所・鎌ヶ岳」
2万5千＝日野東部・御在所山
係
◎岩野　明　○山木久雄
申込み　〒610—0121　城陽市寺田大畔10の10　新ハイキング関西まで
＊マイカー山行
新緑に包まれてイブネ周辺の秘境を歩く。雨天中止

京都北山歩き69
花背の三本杉から知井陸谷山（一般向き）
期日　5月26日(水)　日帰り
集合　京阪出町柳駅京都バスのりば7時40分
コース　出町柳駅（バス）大悲山口—峰定寺—花背三本杉—826林道—緑風の森—ちょろ尾根古道—公知世路谷山—天神の森—花背交流の森バスセンター（解散14時30分頃）
費用　約2000円（バス代）
地図　昭文社＝「京都北山2」
係
◎出口憲次
申込み　〒610—0121　城陽市寺田大畔10の10　新ハイキング関西まで
峰定寺から天然記念物「花背の三本杉」を見て、新緑の古道ちょろ尾根を知井路谷山へ登ります。交流の森では天然温泉（要予約・入湯代約400円）もあります。入湯希望の方は申し込みハガキにご記入ください。小雨決行

自然観察山行12
美濃・伊吹北尾根（中級向き）
期日　5月31日(日)　日帰り
集合　JR東海道線大垣駅8時30分
コース　大垣駅（バス）国見峠—国見岳—大荒山—御座峠—醒ヶ原—世又—さざれ石公園（バス）大垣駅
費用　約3500円（大垣駅から往復バス代等）
地図　2万5千＝美束・関ヶ原
◎鷲見守康
申込み　〒504—0828　岐阜県各務原市蘇原市蘇原村南町1の19の5　鷲見まで
定員17名（会員に限る）
春らんまんの花の伊吹北尾根をじっくりフラワートレッキング。自然の観察と写真撮影に伴う不規則な歩き方が苦にならない方ご参加ください。小雨決行

平日木曜ハイク43
芦生・ブナノ木峠（一般向き）
期日　6月4日(木)　日帰り
集合　JR湖西線安曇川駅9時
コース　安曇川駅（バス）生杉峠—越林道地蔵峠—長浜谷—池ノ谷峠—ケヤキ坂—ブナノ木峠—鉢峠—中山—地蔵峠（バス）安曇川駅（解散）
費用　約3000円（バス代）
地図　昭文社＝「京都北山2」
係
◎前中　毅　○西上利和
申込み　〒610—0121　城陽市寺田大畔10の10　新ハイキング関西まで
芦生形の濃緑とブナなどの萌黄色とのコントラストがすばらしい近畿を代表する原生林を散策します。雨天中止

三河・石巻山と坊ヶ峰（一般向き）
期日　6月7日(日)　日帰り
集合　JR名古屋駅中央改札口7時50分／JR豊橋駅豊鉄バスのりば9時
コース　名古屋駅（電車）豊橋駅（バス）金田バス停—石巻神社—石巻山—大知波田峠—富士見岩—本坂峠—坊ヶ峰—本坂峠—蒲郡バス停（バス）豊橋駅（19時30分頃解散）
費用　約4000円（名古屋駅から）
地図　5万＝豊橋
係
◎小出良春
申込み　〒448—0002　刈谷市一里山町一里山59の3　小出まで
特異な樹木の茂る岩峰の石巻山に登り、下山時は展望の良い坊ヶ峰に立ち寄り、かつて城下町の難所と言われた本坂峠をくだります。申し込みハガキに集合駅を明記ください。雨天中止

鈴鹿を歩く49
鎌子ヶ口・黒尾山・庭戸山（健脚向き）
期日　6月7日(日)　日帰り
集合　紅葉尾の神崎川橋広場8時30分
コース　鎌子ヶ口登山口—東峰—鎌子ヶ口—北峰—黒尾山—坂鎌峠—庭戸山—紅葉尾（解散）
費用　交通費各自
地図　昭文社＝「御在所・鎌ヶ岳」
係
◎岩野　明　○山本久雄
申込み　〒610—0121　城陽市寺田大畔10の10　新ハイキング関西まで
＊マイカー山行
眺望を楽しみながら鎌ヶ口から黒尾山・庭戸山と続く稜線の縦線を歩く。雨天中止

野坂・箱館山（初級向き）
期日　6月7日(日)　日帰り
集合　JR近江今津駅9時10分発の湖鵜公園行きバス
コース　近江今津駅（バス）箱館山バス停（リフト）リフト中間駅—箱館山—ロープウェイ山上駅時台駅—

スキー場ビッテ—Bコース—姥方湖—平池—Aコース—スキー場—見晴台駅（ロープウェイ）箱館山バス停（バス）近江今津駅（解散16時頃）

費　用　約6000円（大阪からバス・リフト・ロープウェイ代共）

地　図　2万5千＝海津・熊川

係　◎村田智俊　○吳比裕美

申込み　〒610—0121　城陽市寺田大畔10の10　村田まで

平池にはカキツバタの花が咲いている。初夏の箱館山を散策する静かなコースです。小雨決行

湖東ハイク8

北良・堂満岳から八雲ヶ原（中級向き）

期　日　6月13日(土)　日帰り

集　合　JR湖西線比良駅8時50分

コース　比良駅（バス）イン谷口—ノタノホリ—堂満岳—金糞峠—八雲ヶ原—カラ岳—リフト山麓駅（バス）比良駅（解散）

費　用　約3300円（大阪から）

地　図　昭文社＝「比良山系」

係　◎野野英彦

申込み　〒610—0121　城陽市寺田大畔10の10　新ハイキング関西まで

湖西線から見上げると三角形の姿かたちの美しい堂満岳へ東南稜からひたすら登り、カラ岳から縦山リフト下の道をくだります。小雨決行

若狭・西国札所松尾寺と青葉山（一般向き）

期　日　6月14日(日)　日帰り

集　合　JR六甲道駅出口8時20分（大阪駅発7時51分発の快速で）

コース　六甲道駅（バス）舞鶴道経由高野—東峰—西峰—松尾寺（バス）六甲道駅

費　用　約5500円（バス代）

地　図　2万5千＝青葉山・東舞鶴

係　◎井上　保

申込み　〒674—0057　明石市大久保町西丘3の1・20の101　井上まで　定員28名（会員に限る）

コース中に難所の鎖場があります。高所恐怖症の方はご遠慮ください。山頂からは日本海の美しい眺めが待っています。小雨決行

自然観察山行13

湖北・小谷山（一般向き）

期　日　6月14日(日)　日帰り

集　合　JR北陸線河毛駅8時50分

コース　河毛駅（バス）小谷城登山口—本丸跡—六坊跡—国道出合—小谷城登山口（タクシー）長浜駅（解散）

費　用　約1500円（河毛駅からバス・タクシー代共）

地　図　5万＝長浜　2万5千＝虎御前山

係　◎藤見幸蔵

申込み　〒504—0828　岐阜県各務原市蘇原村雨町1の19の5　藤見まで　定員20名（会員に限る）

新・花の百名山に選ばれた小谷山にイチヤクソウなど初夏の花を探訪します。自然の観察と写真撮影に伴う不規則な歩き方が苦にならない方は参加ください。マイカー参加の方は、その旨お知らせください。小雨決行

錦生を歩く50

サクラグチ（健脚向き）

期　日　6月21日(日)　日帰り

集　合　野洲川ダム広場8時30分

コース　ダム広場—477号線取付点—789計—西峰—サクラグチ—691計—477号線—ダム広場（解散）

費　用　交通費各自

地　図　昭文社＝「御笠所・鎌ヶ岳」

係　◎石野　明　○山本久雄

申込み　〒610—0121　城陽市寺田大畔10の10　新ハイキング関西まで

＊マイカー—山行

急登いちばん789計に登ると正面に鹿の楽園、錦生ヶ峰の草原が広がっている。真下にはダム湖。雄大な雨乞岳を縦断山の景観を楽しみながら稜線を歩く（27号・49ページ参照）。雨天中止

台高・伊勢北山から高見峠（中級向き）

期　日　6月21日(日)　日帰り

集　合　近鉄大阪線榛原駅8時10分

コース　榛原駅（バス）大又—又谷—二俣—三度小原辻—伊勢辻山—ハンシ山—雲ヶ瀬山—高見峠—小峠—高見登山口（バス）榛原駅（解散18時頃）

費　用　約5000円（大阪から）

地　図　昭文社＝「大台ヶ原・大杉・高見山」

係　◎村田智俊　○則定保夫

申込み　〒610—0121　城陽市寺田大畔10の10　村田まで　定員40名（会員に限る）

涼しい渓谷と樹林のなかを合流主稜に登り、高見山への縦走コースを歩きます。小雨決行

夏山へ向けてのトレーニング

鈴鹿南部の山を大縦走

高畑山・那須ヶ原山・油日岳（健脚向き）

期　日　6月28日(日)　日帰り

集　合　JR関駅前駐車場7時

コース　関駅（車）鈴鹿峠—高畑山—滝ヶ山—那須ヶ原山—杭瀬—三国岳—油日岳—杭瀬駅（電車）関駅（解散）

費　用　交通費各自

地　図　5万＝御在所山

係　◎増井克治　○木村吉男

申込み　〒610—0121　城陽市寺田大畔10の10　新ハイキング関西まで　定員25名（会員に限る）

ササユリを見に蛇谷ヶ峰へ登ります。雨天中止

比良・ササユリを訪ねて蛇谷ヶ峰（一般向き）

期　日　6月30日(日)　日帰り

集　合　京阪出町柳駅京都バスのりば7時40分

コース　出町柳駅（バス）桑野橋—天狗の森—蛇谷ヶ峰—朽木スキー場—武曾口バス停（バス）近江高島駅（解散）

費　用　約3000円（高野から）

地　図　昭文社＝「比良山系」

係　◎今西光男

申込み　〒610—0121　城陽市寺田大畔10の10　新ハイキング関西まで　定員25名（会員に限る）

ササユリを見に蛇谷ヶ峰へ登ります。雨天中止

山行報告

（1・2月）

新ハイキングクラブ関西

京都東山・大文字山

1月2日(金)　曇りのち晴れ

JR・地下鉄山科駅集合9・50～10・01（電車）蹴上駅—登山口10・10～30—日向大神宮10・40～55—七福神案内11・15—大文字山12・20（昼食）13・00—大の字火床13・15～30—銀閣寺前14・05（解散）

—哲学の道—大王町バス停14・30

おだやかな新春日和のなか、神社に参拝して大文字山への尾根道を歩いた。火床からは京都の街を一望した。

（参加者）竹田善美　吉塚孝次　布施清美　上友延夜　立川郁夫　小林　稔　横田昌蔵　水島岡一　伊藤　真　秋田福郎　森末喜美子　美谷静子　伊藤則男　山本千鶴子　広阪利昕　遠水　保　相原裕紀子　向田　豊　戸川則子　坂田由美子　木村光江　田中　茂　草野智恵子　鹿原きよみ　鹿原美枝子　松本ミユキ　前田幸子　清　紀嘉

○村田智俊　◎小出良春（計30名）

新年会山行・十三石山から氷室（木曜ハイク38）

1月8日(水)　雨のち雪

出町柳駅集合9・20～35（バス）市の瀬10・20～30—十三石山11・30（昼食）12・10—高樹峠・寺山を経て氷室神社13・10～20—駅延谷口から北横社14・40（新年会）17・10（マイクロバス）北大路駅17・20（解散）

明からの小雨が雪に変わり、十三石山から望んだ京都の街は、あたかも墨絵のように幻想的だった。恒例の新年会は賑なべに酒、そして山談義にと盛り上がった。

（参加者）南　篤子　中村英雄　吉田誠宏　氷見哲彦子　高木　晋　前田政雄　高岡信男　川上久堅　吉川裕子　清林武雄　北尾信長　右近八朱子　中路加代子　○氷見周一　○西上利和　◎前中　毅（計17名）

比叡・横川寺跡から瓜生山

1月10日(土)　曇り

JR唐崎駅9・30—百穴古墳10・10～20—岩屋寺跡10・30～45—大太分岐11・30～45—川原12・20

(昼食) 13・00—瓜生山14・00～15—大山祇神社14・50(解散)

曇っていたがおだやかな日だったので古代の墳墓、千二百年前の寺院跡を見たり、当時の屋根瓦のかけらを見つけたりして、冬枯れの里山をのんびりと楽しんだ。

(参加者) 岡本和子　川中　保　近藤　恭　野口　修　橋本貴二郎　斎藤　隆　斎藤妙子　草野碧雅子　向田　豊　岩城敏子　中村　保　奥村清一　渡辺宗子　巻田　晃　土肥三枝　奥野嘉子　川端敏子　徒水英雄　佐藤章一　倉橋純二　前田政雄　都竹米子　岡　和子　古川裕子　冨松薫子　中尾博子　細野欽也　中田茂子　宮脇季喜　隣　苑子　入江武史　西上利和　吉田孝子　本間俊次　井上北恵　石浜尚子　竹田喜英　野垣マツヨ　光川二美子　中野吉五郎　北川忠枝

◎宇佐美弘子 (計42名)

宝殿駅より高御位山縦走

1月11日(日) 曇り

JR宝殿駅集合10・00～10—峠10・45—高御位山12・20(昼食) 13・20—廣ノ奥山14・00—JR曽根駅16・00(解散)

不安定な天気でしたが順調に歩け、足下の眺めを楽しみました。しかし、残り30分程の所から雨が降りだしました。同会を約して解散。

(参加者) 前田宰子　兼田幸子　真田久子　船越利明　船越みよ子　井上久子　中村静香　桜田牧子　小田淑子　立川郁夫　馬籠忠男　平敏英子　野口　修　野口志津子　真田明子　岡田　昇　岡田恵美子　山本武臣　山木令子　山本いすゞ　山本　勉　島田亮子　川端恵美子　木村太郎　辻村幸裕　石田智二　美濃幸治　堀　久子　倉元ミツエ　三木英子　北川良子　中路恵代子　橋田昌憲　高月ミツヨ

◎井上　保 (計35名)

美濃・池田山 (宝殿駅集合山行8)

1月11日(日) 曇り

JR大垣駅集合8・40(電車) 近鉄池野駅8・58(タクシーでピストン) 藤橋ヶ渕9・30—池田の森11・45(昼食) 12・30—池田山13・30～50—池田の森14・40—藤橋ヶ渕16・00(タクシーでピストン) 近鉄池野駅16・30(解散)

曇天でしたが、比較的おだやかな天候の下、雪模様や野鳥の観察、美濃の山々の展望、アニマルトラッキングなどを楽しみながらのスノーハイキングでした。プロミナーの(地上部展望台)でとらえたイスカ(野鳥)の頭胸色彩は見事でした。

(参加者) 岩田育士　飯田由美子　緒方由子　金森節子　狩野重彦　木寺真子　田中禮子　砂原恵美子　桜井康一　緒方光子　梨　良男　深坂　寛　深坂昌子　三井紘一　倉川信之　横井恭子　横井　徹　出田親代

◎加藤元彦 (計20名)

◎鷲見寺廃

文三ハゲから綿向山・水無山 (鈴鹿を歩く41)

1月11日(日) 曇り

北畑口集合8・30～40(車)—熊野8・55—文三ハゲ10・00—水無尾根10・30—綿向山11・00(昼食) 12・15—水無山南峰13・30—集野14・30(解散)

10センチほどの雪道を登り、山頂に近づくと霧氷から樹氷に変わった。山頂からの雄大な景観と白い樹氷の華々に囲まれてのんびりと昼食。高々と風を上げて楽しむ人もあり、冬山のすばらしさを全員で楽しむことができた。

(参加者) 小林　稔　大石将美　池田隆一　武村千鶴　草野孝光　谷　守　山田義三　八田治司　奥井幸生　吉野正治　小田妙子　竹田利夫　池田孝雄　浅田繁美　高橋　寛　鈴木　剛　馬場貴茂子

○山本久雄　◎若野　明 (計19名)

愛宕山から滝又の滝 (京都北山歩き61)

1月13日(火) 晴れ

京都駅集合9・00～20(バス) 愛宕道10・30—滝又の滝11・15—余野12・00(昼食) 12・45—滝ノ町12・20(解散・バス) 京都駅

滝には少し雪があった。期待の氷瀑は見られなかったが、天気がよく楽しいハイキングができた。

(参加者) 芝野義明　砂原恵美子　石原若子　北原信枝　東　榮智子　岡本和子　梅井和子　都言義八郎　都司長江　菅生幸子　中村　保　南　寛子　中村英雄　川原勝熙　若松朝子　松山みつ　辻　富子　前田政雄　西上利和　久谷美紗子　古川裕子　中西福子　宮村孝次郎　(＊はか飛び入り参加2名)

◎今西孝男 (計27名)

瀬栗・太郎坊山

1月15日(日) ◎村田智優

雨天のため中止しました。

(参加予定20名)

播州・瓜生峠縦から三濃山

1月18日(日) ◎須磨岡　樹

雨天のため中止しました。

(参加予定41名)

奥比叡・宝体杉から御木峠 (平日ふれあいハイク8)

1月20日(水) 晴れ

北大路駅集合8・40～9・00(バス) 登山口9・40—青竜寺10・40～50—宝体杉11・15～20—宝体杉12・00(昼食) 12・40—堂高山12・55～13・10—次郎山13・25～30—御木峠14・05～15—吉寺バス乗15・05(解散)

厳寒の中に大雪は氷点下の朝、山は固い霜柱の道で迎えてくれた。青竜寺のまわりはびっしりと氷。しかし快晴・無風の好条件下、寒さに追い立てられることもなく、霜柱の道を踏み、凍ったけものの足跡を指摘し、白い比良遠望山を眺めながらの一日でした。

(参加者) 岡本和子　石原若子　立川郁夫　松山みつ　小森伊佳子　辻　(母子)　吉田義宏　辻　行子　白坂智子　川端敏子　長沢佐美　前田政雄　西上利和　瀬里雅香　大橋元造　山岸勝雄　国松義雄　藤井義子　川原勝恵　小島和子　小倉久子　京近栄智代　青木一雄　中西温子　久世美紗子　清林武男　堅田玲夫　堅田美奈子　古川裕子　○寺井恒夫

◎川上久雄 (計32名)

鈴鹿・クラシからイブネ (雪んこと遊ぶ1)

1月24日(土) 曇り

朝明渓谷駐車場集合8・00～15—根ノ平峠—藤倉川10・00—クラシ尾根取付—ランチ・テラス11・30(昼食) 12・30—クラシ—イブネ—ランチ・テラス14・15—クラシ谷出合15・30—根ノ平峠16・30—朝明渓谷17・30(解散)

踏っすらと積もった新雪のなか、大雪警報の間隙を突いたラッキーな登頂になった。頂上からの眺めは雄大で鈴鹿の奥座敷を歩いた。くだりは厳しいルートになったが、全員協力して朝明に辿り着くことができた。

(参加者) 北野清士　大石将美　高杉　梅　北川　浩　北川友子　穀野政枝　与謝野澄　武村千鶴　小田妙子　多湖節子　谷　久雄　水戸鉄治　木村隆彦　倉本雨夫　細野欽也　鈴木　研　笛井敏子　今岡昌代　○中村勝次　○木村青秀

◎岡井克治 (計21名)

飯高・局ヶ岳 (三重の山37)

1月24日(土) 雪時々晴れ

国道166号線飯高町役場・道の駅駐車場集合9・30(車)—堀出バス停(車)—木地小屋—局ヶ岳神社10・30—新道登山口11・00—小峠12・40—局ヶ岳13・00(昼食) 12・40—小峠14・10—旧道登山口15・10—局ヶ岳神社15・20(解散)

飯高町は朝から雪。参加予定29名のところ18名が定刻集合し、例によって待たずに出発。木地小屋まで車で登るが、一面の積雪。樹りのことを考え、一部車を集合地におろすなどして到着。局ヶ岳神社に着いたのが10時半。思いがけない雪山にうきうきとさせられ、飯高一の急坂コースを存分に楽しんだ。頂上では晴れて展望良。下山後、旋の音頭衆、立松さん宅で美味しいお茶をご馳走になり、生き返って解散した。

(参加者) 河原信尚　川本　隆　本橋好和　脇田和雄　岡本芳子子　山木雅子　和田孔郎　石田真由美　伊藤到一　城月隆幸　堅田美奈子　小堀幸男　冨井綾子　三浦貴志子　北川　明　サマンサ・ピリング　○稲垣英夫　◎長崎英五 (計18名)

京都北山・雲取山 (ハイキング入門12)

1月25日(日) 曇り時々晴れ

北大路駅集合7・50(バス) 花背高原—寺山峠—ハタカリ峠—寺山峠—花背高原(バス) 鞍馬駅(電車) 出町柳駅(解散) ＊タイムとらず

寺山峠から尾根通しで雪取峠経由雪取山を狙ったが、やぶこぎ、ラッセルが予想以上のアルバイトで、ハタカリ峠で時間切れとなり戻った。寺山峠からダイレクト雪取山をめざすべきであり、リーダーのコース設定ミスを西条同原町ミュンヘンにて反省した。

(参加者) 前田幸子　桑名和子　内本良子　出口郁代　吉嶺　清　製野紘子　堅田玲夫　栗　美智子　新家勝義　新家純子　隣　易子　井林寿英子　中井ひろみ　○渡邊次男　長尾吉行子

◎西沢広二 (計16名)

明智越 (京都北山歩き62)

1月25日(日) 晴れ
JR亀岡駅集合9・40～10・10―明智越登山口10・40～55―峰の茶屋11・40―鉄塔広場12・10(昼食)13・15―△340・6△13・50―JR保津峡駅15・05(解散)
前日の荒天が不思議なくらいに晴れた。積雪も少なく軽い山行だった。340・6△峰の3等三角点は頂上より50△位下の分かりにくい所にあった。
(参加者)近藤 恭 川中 保 横部光子 小田初子 小林 稔 荒井寛子 中村静香 鈴木英雄 中村 保 倉橋純一 堀 久子 本間 隆 藤田明子 小林 昇 塙谷静子 西崎澄博 下村英子 青木一雄 中村英雄 中村英子 松田好市 加藤 孝 山田英雄 田中 明 小川明美 梅原きよみ 長沢信夫 高木 晋 高木美智子 前田政雄 寺本 至 吉田ソノ子 多賀久子 山脇清男 辻 嘉一郎 若木俊一 速水 保 塩見千恵子 鹿田 誠 藤井芳子 岩本いすゞ 上坂延枝 武部 剛 高橋美芳子 桜田牧子 高橋由紀子 川端敬子 上田幸男 井藤正明 三井紘一 本落孟夫 重富妙子 里井信雄 里井信子 中路加代子 金森節子 高木忠夫 呉山繁三 林 弘毅 安倉正勝 ○川上次郎 ○里井保夫
◎中西高行 (計66名)

北山・金剛羅山から鷹巣山
(週末ハイク5)
1月30日(日) 曇り時々晴れ
京都駅集合8・20～30(バス)大原バス停9・30―寂光院10・10―焼杉山分岐10・30―寂蓮山11・00―金剛羅山11・25―江文峠11・50(昼食)12・45―鷹巣山14・00―上一本松14・40―三宅八幡15・45(解散)
叡山電鉄から寂蓮山にかけて積雪があったが、例年に比べて非常に少なくアイゼンは不要。金剛羅山からはゆるいアップダウンが続く冬枯れの尾根歩き。少し長く歩いたが三宅八幡までがんばって歩いた。
(参加者)岡本初子 吉田誠宏 三井紘一 上部信廣 小林伊佐子 堀 良男 森川郁之 岩城澄子 大村光江 田中 誠 佐藤新一 佐藤妙子 桑田 呈 瓜阪和明 川端敬子 前田精一 光川二美子 山田隆雄 小林 昇 中村英雄 田中 明 大渡宗道 熊田千夜子 中田静子 高松雅子 相原慈紀子 伊藤 真 井川敏一 金森節子 玉越静子 前田政雄 銀井初子 中西高行 浅田俊男 竹内寿久子 辻 行子 白根清子 斎藤 隆 斎藤妙子 横井幸子 砂原喜美子 佐田次男 横 瑞子 堅田美智子 加藤佳彦 森島紀美代 川上次郎 吉田裕子 菅生幸子 小島フジ子 上坂延枝 竹田喜美 森美喜美子 花熊静子 佐吉田文子 ○加藤元彦 ◎荒野真彦 (計58名)

伊賀・室山
2月1日(日) 晴れ
JR近鉄桜駅集合9・30～35―名張国道下トンネル10・00―室山寺分岐10・35―室山11・35(昼食)12・20―室山寺13・10―トンネル13・45―桜駅14・15(解散)
稲雪は昨年に比べて少なかった。信仰の山らしく山頂には五輪塔や仏堂もあり、気持ちのいい人たちといっしょに歩けて感謝した。
(参加者)横部光子 布施清美 多賀久子 川上次郎 芝野泰明 吉田明子 川本 隆 砂原喜美子 川上次郎 芝野泰明 吉田明子 川本 隆 砂原喜美子 伊藤則男 細田暢子 飯田由美子 ◎小出良春 (計14名)

鳥城・布施城跡から大和鳥城山
2月1日(日) 晴れ
近鉄近江駅集合9・30～45―登山口の橋10・40―布施城跡11・10～30―小ピーク12・10(昼食)12・45―久保辻13・20―持尾辻13・30―鳥城山15・00～10―行者滝16・00―ローブウェイ前16・35(解散)
布施城本丸跡の狭いピークに立ち、それから久保辻までの道が荒れていて捜索隊を行ったが、途中で迷いタイムをロスした。昼食後、久保辻に出てから快調に雪道を山頂へ。下山道は深雪していたのでアイゼンを着けた。
(参加者)小田雅子 小林 稔 奥村清一 近藤利明 中村 保 山下恒三 鈴木敏彦 中尾志郎子 鈴木静香 島 明子 入江正信 中野哲二 岡崎澄博 西田美智子 前田栄三 本落孟夫 野々山明夫 斎藤 隆 高浜妙子 小野しげ子 横本和幸 関根義雄 辻村幸裕 高木忠夫 堅田幹夫 塩谷静子 多賀智二 岩本いすゞ 松田好市 細 久子 山内多恵子 安倉正勝 作間 穣 青木一雄 青木敏子 奈良邦子 熊田 誠 竹田秀夫 重富和幸 重富妙子 堀月満幸 宮井洋次郎 小林伊佐子 ○青木一雄 ◎鳥羽次郎 (計38名)

比叡アルプスから無動寺
(木曜ハイク39)
2月5日(木) 晴れ
京阪三条駅集合8・40～50(バス)地蔵谷9・15～25―比叡アルプス鉄塔巡近10・45～11・00―東海自然歩道好地滝12・35(昼食)45―和尚堂13・40(根本中堂拝観)14・05―尼飛谷・大宮谷を経て日吉大社15・35(解散)
うっすらと雪化粧した比叡の古道を歩き、ほとんど知られてない行者道(建立道・尼飛谷)や、大宮谷の谷を歩いた。
(参加者)高田 努 生駒はるみ 川端敬子 高松雅子 松本いつ子 中山茂子 今西宏男 郡司喜八郎 郡司喜江 芝野泰明 伊藤みはる 川原勝憲 北尾保夫 久世芳紗子 中尾博子 中村英雄 秋田雅郎 辻 博子 藤井芳子 上田久子 古川裕子 鈴木 哲 酒井武親 鈴木 保 前田政雄 ○水見周二 ○西上利和 ◎田中 毅 (計30名)

笠置・釜老山(自然観察山行)
2月3日(日) 晴れ時々雪
JR大和駅集合8・40―近鉄大和駅8・53(電車)釜老駅9・33(タクシーピストン)滝駐車場10・10―三方山11・15～25―小倉山11・50―釜老山12・10(昼食)13・00―小倉山13・20～30―笠置降13・40―栗ノ木平15・10―滝駐車場16・20(解散)
厳冬のせいか、積雪が少なく暗乳和物の尾根は歩き易く、フィールドサインは思うように発見できませんでした。時おり、風雪となったが、脚が揃っていて予定以外のコースも歩けました。
(参加者)近江秀子 横方由子 金森節子 祥野栄彦 河原良尚 鈴木秀雄 小堀準男 呉比裕美 真田明子 田中博子 砂原喜美子 寺田久広 夏山登子 深坂 宣 深坂昌子 三浦弘幸 三井紘一 太橋 勝 森川信之 由田郁代 和田真弓 ○加藤元彦 (計23名)
◎鷲見行康

絵馬・鷲ヶ岳(雪久子と鳴倉2)
2月8日(日) 曇り時々風雪
JR高山駅集合8・00～10―中尾峠―クラビーク1042△11・00(昼食)11・30―鷲ヶ岳12・00～15―ホタカ分岐頂13・00―大日向14・00―宇賀沢15・00(解散)
昨夜の雨が山肌に雪の約絵様を飾っている。見えていた穂高にもいつの間にかガスがかかる。鷲ヶ岳の肩にのる頃、風雪が歓迎の礼にピンタをくれる。天気はくずれないの予想も山頂では期待はゼロ。帰路は背受、風雪、地吹雪混じりの冬の尾根散歩を楽しんで予定通り下山した。
(参加者)大石秀夫 高杉 博 北川 浩 谷 久雄 氷戸鉄治 太村城彦 細野欽也 鈴木 甫 ○小田妙子 ◎荒野真彦 (計10名)

比良・蛇谷ヶ峰
2月15日(日) 曇りのち晴れ
JR近江高島駅集合9・00～10(バス)畑バス停9・35～45―ボブラ峠11・00―蛇谷ヶ峰12・05(昼食)13・00―てんぐの岩屋14・30(休憩・入谷)16・00(バス)安曇川駅16・20(解散)
山間の積雪が50㎝くらいで歩きやすい雪道だった。風があって寒く、山間付近は樹木が見られた。太郎坊を楽しみ、てんくう温泉に下山したが、満員でほとんどの人

が入会できず残念だった。
（参加者）森川信之　三井紘一　倉橋隆二　若松智子　稲本芳雄　中村雅春　田中茂子　井林芳奈子　上田正子　田中　誠　根中豊美江　本間俊次　鈴谷　栄　横井恭子　駒崎武敏　石田孝子　小山弱美　金森節子　本間　隆　今西光男　宮松智子　宮澤敏喜　佐藤敏一　宮木良幸　宮本強子　集三三彦子　高岡信男　石黒修子　前田宏三　高木忠夫　堀　久子　堤　長男　山田晃三　本蔵英大　猿月誠幸　川中　保　吉田誠宏　西田美津子　上田敬子　人見正信　布施清美　加藤元彦　森脇良義　鶴明二三男　前田政雄　南　寛子　園松孝雄　青木一雄　秋山雅彦　大田敏弥　太田広子　高岡敬子　高森宏一　木村光江　鈴木吉和　松田昇市　吉住裕美　橋　孝子　橋　みうる　迎佳洋子　瓜敦利明　矢鍋巧美子　瀬田敬香　敬野敏枝　清水すみ子　石川和男　宮前孝雄　多賀岡二　多賀岡一　多賀久子　農田　誠　森宏宏美子　笛山信夫　遠藤　保　宮坂孝次郎　渡辺達郎　高橋　寛　相原繁紀子　三野　旭　武部　輝　武部美美子　上坂延枝　佐田次男　中井ひろみ　中路加代子　○岩壁貴彦　山内寛子　田明三三男　高杉　博　藤原正人　森脇良義　小田妙子　神野孝充　星加弘之　谷　守　北川　浩　北川表子　谷　久雄　河辺牧男　奥井宏生　西澤猛徳　山田明男　◎岩野　明（計53名）

北山・桧数ヶ岳
（ハイキング入門13）

2月22日(日)　晴れ
北大路駅集合8・10（バス）岩屋口―志明院―逢坂峠―桧数ヶ岳―逢坂峠―志明院―岩屋口（バス）北大路駅（解散）＊タイムとらず
快晴、無風、銀雪、雪山ハイクの予定が春山ハイクになってしまった。桧数ヶ岳頂上付近にはうっすらと名残りに雪が残っていた。
（参加者）前田幸子　新宮勝敏　新宮節子　藤　敏子　東　美智子　桑名利子　鍛冶益子　堅田鈴夫　内本吉子　宮島百合子　○渡邊欣男　◎西沢広二（計12名）

雪景色から松尾峠・峰山
（京都北山歩き63）

2月24日(日)　◎今西光男
雨天のため中止しました。
（参加予定55名）

新ハイキングクラブ関西

入会のすすめ

このページの山行例会を通じて正しい山歩きを、たのしい山仲間たちと味わいませんか。リーダー（係）はすべて無償の奉仕で、各自で切符を買い実費を払い、宿泊料もすべてワリカンです。

あなたも新ハイキングクラブ関西に入会してたのしいお仲間になりませんか。会員には機号「新ハイキング・別冊関西の山」（年間翌月5号分）をお届けします。会員は山行例会に優先参加できます。

入会金　500円（バッジ代）
年会費　3000円（送料共）

新ハイキングクラブ関西への入会申し込みはこの雑誌に挟入の振替用紙をご利用ください。氏名（ふりがな）及び第何号からの送本かを忘れずにご明記ください。

尚、定期購読をご希望される方も会員になっていただきますと、毎号確実にお手元に届きますので便利です。

○新入会員紹介

新しいお仲間のみなさんです。会員番号3582から3642番まで。

【東京】　姜谷明美
【愛知】　松田幸生　安田良隆　服部孝江　加藤上彦　西村美智子　田中幸子
【三重】　吉本春之　三浦良左子　和田四郎　樋口　治　南　智恵子　柳　敏弘　吉本美保子
【滋賀】　渡辺　茂
【京都】　栽野政枝　遠藤節妙子　小島照光　加藤公雄　中西峰子　福田新一郎　田中　明　中村博子　小嶋和子　栗生　哲
【奈良】　山本好子　平塚鶴姫
【和歌山】　平塚久雄子　福三美智子　山本雄子　谷三永津　庁　すみ子　福井多津子　渕　志乃夫
【大阪】　深江敏子　中山三千代　坂谷節郎　越智　肇　慶佐次一夫　宏藤　進　西村雅彦　上田久子　匹本弘子　中谷美多　森田和子　木村　豊　鹿児島いつみ　西澤宏一　渋崎祥一　中川松栄子　東山美行　小野和子　本間美智子　土井　茂　乾　泰信　坂本昭雄　日野　基　志水正明　橋　茂子　田畑　武　柴田憲嗣（61名）

訂正とお詫び

39号（関西）15ページ下段一行目「吉野」の読み方「よしばり」は「よなばり」が正しい。

39号（関西）84ページ下段12行目「ヒノキ・坦山……」は「ヒキ・ノ・坦山……」が正しい。同版19行目「山ノ神峠・峠―貴和田―」は「山ノ神峠・峠―貴和田―」が正しい。

39号（関西）87ページ下段22行目「35（昼食）12・00……」は「12・40」が正しい。（編集部）

「本誌のバックナンバー」
大阪梅田のハードスプラザ3Fの「トラベルギャラリー・ハービス大阪店」に全巻を常備しています。

「毎号お求めになりたい方へ」
前もって当店に毎号はしいと「購読予約」をされますと、どこの書店でもお買い求めいただけます。（毎月の20日ごろ）（毎月刊）の発売です。

○安倉広勝　○則末保夫
◎村田智彦　（計88名）

紀東・天見から宝塚山
2月22日(日)　晴れ
南海天見駅集合8・40～9・30―井関谷口9・20～30―尼根道10・10～20―長吉峠10・45―南長域山分岐11・10～20―岩湯山11・50（昼食）13・30―山田分岐13・50―三石山分岐14・40―高山森林公園15・10～20―紀見峠駅15・40（解散）
春を思わせる暖かい晴天の一日で、全員楽しく歩けた。岩湯山頂上は360度の大パノラマ、のんびりと過ごした。高山森林公園はナザンカやツバキの花に混じり桜が咲いていた。
（参加者）森野栄彦　占部博厳　立川郁夫　荒井宮子　真田明子　米谷悦子　田淵勝長　佐賀登一　木村光江　田中　茂　千葉千鶴子　中村　保　鈴越利明　船越みさ子　三井紘一　山本恒三　岡田忠美子　山野　眞　堤　勇男　武田久子　平敏美子　金森節子　堀田吾郎　山本　勉　岩本一雄　前田政雄　高森宏一　小林　昇　鈴方由子　池田登一　瓜敦利明　渋谷節枝　秋田神前　川上友堅　鈴野正弘　岡田真介　中塚美智子　木村次郎　巻田　晃　長岡吉子　西田　誠　三木民子　○岡田　昇　◎関村誠治（計45名）

雲仙山西麓根を歩く
（鈴鹿を歩く43）

2月22日(日)　晴れ
河内風穴―東寺院―草千里―今8・30～35（バス）今福泉口8・40―高谷8・45―ふき峠9・20―昼食10・00―終塚山11・00―雲仙山11・30（昼食）12・35―鼻高峠12・50―南雲岳13・40―音峠15・10―今畑登山口16・00（解散）
2月とは思えない暖かい日和で雪が解け、歩きやすい道を登ると雪は消えていたが、山全体に根氷に変わり朝日を受けて白く輝いていた。そして山頂からの大パノラマをのんびり楽しむ。西麓根祖には一ヶ月も早く福寿草が咲き出していた。今畑では福寿草を写生される人もあり、すばらしい山行となった。
（参加者）大石博美　森脇元博　山田泰三　小島照光　河合正彦　柴田登一　田中順子　武村千鶴　中山博史　林　弘毅　眞部清ち子

お知らせ

○「山行計画」の定員制は先着順になっていますが、定員を超過した場合は、表紙ハガキで即お断りの連絡をしています。断りの連絡がない方は、定員内で参加できます。規定がはっきりしてから山行案内を送信します（約10日間）ので、それまでお待ちください。

○関文化協行の『山と高原地図』シリーズ（33ページ広告参照）の地図番号が、'98年度版より変更されます。今号よりしばらくの間、本誌は地図番号の記載はしませんのでご了承ください。

○雑便番号が七ケタになりましたが、訂正に時間がかかっています。今号も三ケタで発送しました。ご了承ください。

なお、「山行申し込み」ハガキや会費の「払い込み用紙」の自宅住所は、七ケタの番号が書かれてあっても絶対ないで従来通り、正確にご記入ください。

また、雑誌年会費の払い込み用紙には、会員番号を忘れずにご記入ください。